# 第1部　各地域における東日本大震災
## B　宮古地域
# 第4章　宮古市街地

杉本栄子

### はじめに

平成23（２０１１）年3月11日、宮古市街地は津波の浸水面積が48・4ヘクタールにわたり、浸水高はT.P.3・3～5・2メートル、最大浸水深は3・9メートル、浸水区域内の建物1千２７０棟の14％が流失するという被害に見舞われた。宮古市役所からJR山田線、三陸鉄道の宮古駅にかけて新川町、向町大通1～4丁目、中央通商店街（本町、新町、大通1丁目）大通1丁目商店会、末広町商店街、新町　黒田町の浸水深は2メートルから30センチであった。中でも閉伊川に接する新川町、向町の被害は人的、物的ともに大きかった。

これらの地域は宮古市の生業を支える港に近く、市役所が位置する中心地である。近年堤防ができ、建物が立ち並び、人々は生活の中で近くに海があることを意識することが少なくなった。

この地域は昭和22（１９４７）年のカザリン台風、23（１９４８）年のアイオン台風で、大きな浸水被害を受け、親世代から水害伝承が浸透している。津波に関しても「地震がきたら津波は来る」とほとんどの人は認識している。3月11日は地震の大きさに驚き、誰もが「こんな大きな地震だからきっと津波は来る」と思ったという。すぐに車や徒歩で避難した住民がいる一方、「津波は来るが、ここには来ない。来てもたいしたことはない」と、家の中に留まっていた人も多かった。防災無線のアナウンスを耳にしても、マニュアル化した言葉にいつものことと聞き流していた。

道路に黒い水を見た人たちも、それが津波によるものだと気づいたのは後になってからのこと、瓦礫や車が流されてきたのを見て、あるいは、「津波だ！　逃げろ！」という声を聞いて、初めて危険が迫っていることを知ったという。それからは無我夢中、全速力で駅方面に駆け抜けた人、あわてて近くの外階段のあるアパートや高い建物に上がった人など、まさに水との競争だった。

家の中にいた人は、外の物音で水に気が付き、慌てて自宅の2階に駆け上がって危機一髪。しかし、ほっとする間もなく、水の勢いの凄まじさに、ベランダから屋根へ、さらに2階の屋根へ、またより安全な隣の家の屋根へと移った人もいる。幸い2階に避難して一命は取り留めたものの、迫りくる水、押し寄せてくる瓦礫の山を目の当たりにして、その恐怖はいかばかりだったことだろう。「もうこれまで」と覚悟を決めた人も少なくない。

不幸にして、自宅の1階で逃げ遅れて、水門を見に行って流されて、あるいは避難途中で寒いからと上着を取りに帰ったために、命を落とされたといった方も多い。

宮古市街地で働く人の中には、田老、鍬ヶ崎、高浜などに住む人も多く、職場と自宅の両方に大きな被害を受けた。また、他所から仕事や買い物に来ていて、被害に遭った人もいる。

山田線を境に南側は津波の被害を受けていない。同じ生活圏内にありながら、その差は大きく、天国と地獄ほどの違いがあったという。南町に住む60代女性は地震の後、宮古小学校に孫を迎えに行った。そこに津波が来たために、家に帰ることができなくなった。翌日の昼ごろに船や車でふさがれた道路を遠回りして、線路を乗り越えてようやくの思いで家に帰ったが、そこは津波の被害を全く受けていなかったという。

難を逃れた人と犠牲になられた方の差はほんの一瞬、それもいくつかの偶然が重なったことが多いようだ。また津波の被害を乗り越えた後に、亡くなられた方も少なくないと聞く。災害で受けた心労が計り知れないものであったことと推察する。また、自宅の浸水は免れたが、停電、断水で避難所に一時避難された方も多く、日常の生活を脅かされて、不安な日々を送った人々は数知れない。そんな混乱の中で消防団の活躍はどれだけ人々を励まし、助けたことだろう。

5年が過ぎ、主要道路は着々と整備され、新しい道路が作られ、災害公営住宅も建ち、個人の家の再建も進んでいる。しかし、いまだに仮設で不自由な暮らしを余儀なくされている方々がいる。復興への道はまだまだ遠い。しかし、まちの人たちはお互いを思いやり、助け合い、復興に向かって着実に歩んできた。10～12商店街、女性のグループなどが街の活性化に、町内会・自治会は防災の強化など、日常の生活の中で復興に力を尽くしている。

＊各町内の世帯数、人口は行政別人口資料を基に、死者数は『東日本大震災宮古市の記録』第1巻に従った。証言の中で数字と一致していない場合もある。

## 1　新川町

新川町は明治12（1872）年から15（1882）年にかけて閉伊川の河川を埋め立てた地で、ゼロ㍍地帯といわれている。南は閉伊川と接し、南端には古くから藤原と結ぶ宮古橋が架かっている。

また、主要幹線道路である国道106号の基点や、45号の一部である「宮古大橋」を有している。

昭和47（1972）年に今の市庁舎が落成し、行政の中心地となった。中央公民館、郵便局、宮古地区労働福祉会館、第一分団屯所（管轄区域＝本町、新川町、築地1丁目）などがあり、漁業家が多く、水産加工が盛んであった。現在でも水産加工を営む人が在住している。

震災前、平成23（2011）年3月1日現在の世帯数は42、人口は81名（男44、女37）であった。この地域の特徴として、仕事は新川町にあるが、住まいを他所に移している世帯もある。

「3・11」の津波は新川町の堤防を越え、市役所の2階まで浸水（3・5㍍）した。第一分団屯所の浸水高は1・8㍍、町内の家屋は1階が壊滅状態となった。市役所前の歩道橋を襲う津波の映像は、繰り返し全国に流された。死亡届者は7名である。

震災後、平成23（2011）年8月の世帯数は一気に28、人口51名（男31、女20）に、平成27（2015）年3月1日現在は19世帯、人口39名（男21、女18）に減少した。他所に避難、または仮設住宅に住んでいるため、実際に生活している人はさらに少ない。町内会の活動も一時休止状態であったが、徐々に動き出そうとしている。

### (1)　花坂 康太郎さんの話　昭和27（1952）年生

新川町1　花坂印刷工業㈱代表取締役、宮古商工会議所会頭

平成26（2014）年11月21日、社内で伺う。

**印刷会社の2階だけが残って**

ちょうどこの新川町の会社にいたんですよ。すごい揺れで、長く続いたために、過去の経験から津波は必ず来るだろうと思った。積んであった紙類が全部倒れてね。どうしようもないから、「とりあえず逃げろ」と従業員はみな帰して、私は3時にお客さんが来るので、それを待っていたんですよ。津波が来る10分くらい前かな、自分が最後に逃げたんですけど。車で、山に向かって行くと混むから、駅の方に真っ直ぐ進めばなにもなかったから。田の神（旧山口地区）に工場があるので、そこに取りあえず行った。多分ひどいことになっているだろうと思いながら行ったら、案の定印刷物が全部だめだった。それを少し整理して様子を見ていた。

夕方山口川上流にもどんどん瓦礫がくるわけだよね。あ、これはすごい状況になっているなと思って。魚菜市場のあたりまで行くと水がきていて、全部通行止めになってね、その時点で、ハー、おらほのところはもうだめだべなと思った。自宅は山の上の方、西ヶ丘なので無事だった。

12日に細い山道を車で来られるところまで来て、山の上から見たらなにもない。また少し下りて、ぎりぎりのところまで来たら、会社の1階部分が全部流されて、2階だけがポンとあった。会社はもうだめだと思ったら、ショックを通り過ぎて、笑うしかなかった。2階に金庫があったから、金庫は大丈夫なのかなあって…。

次の日はどうにか会社のところまで下りてきて、下はなにもないか

ら2階の金庫だけを見てね。濡れていたんだけどね、その中に印鑑とか貴重な物が入っていたから、これだけあれば取りあえずはいいかってことで。あとはどうしようもない。

結局、津波でぐるぐる回って、1階は印刷工場で重い機械があるから、ガリガリとミキサーみたくやられてしまったんじゃないかな。だから下は工場も事務所も全然何もない。機械から何からなにまで全部だめ。2階の金庫だけ、それだけが残った。

年度替わりで印刷用紙も大量に仕入れてあった時期で、それがすべて駄目になったのは痛かった。

**2週間後に田の神工場、1年後に仮設工場で再開**

ただよかったのは、仕事のデータとか、最新のコンピューターからなにから全部、田の神工場にあったから、仕事をするには全然支障がなかった。それで震災から2週間目ぐらいに、取りあえず田の神工場で作業を始めた。3月いっぱいは仕事になんなかった。3月中に納めねばならない物もずいぶん納期が伸びてしまった。

パソコンと小さな機械はあったけど、6月にオンデマンドを設備して、それ1台である程度まではできるようになった。1年くらいしてから、市が旧千徳中学校に仮設工場を造ったので、印刷機とかある程度の機械設備をした。そこで、震災後に一度解雇した社員を再雇用したが、世代交代でほとんどを新規採用に切り替えた。仮設工場は大きいだけで、天井が高い鉄工場のような感じで、夏は暑いし冬は寒いしね、印刷屋向きではなかった。そこには1年半ぐらいいた。

**2年半後に社屋を再建**

昨年（2013年）の10月にようやくここ（新川町）ができた。商工会議所会頭の立場上、一番最後にということで、事業所のほとんどが復旧した後となった。被災事業所800のうち700ぐらいが再開して、多分680番目ぐらいだったと思う。ここは1メートル嵩上げしたけど、地盤が下がっているので、実質的には前より50センチくらいしか高くなっていない。津波にはいいんだけど、台風や低気圧で川の水が氾濫したときにどうなるのかね。

時代がどんどん変わっていく、印刷機も新しくなる。モノづくり補助金で北日本第一号となるオンデマンド印刷機を導入したが、世代交代と震災が全部絡んでしまったという感じですね。仕事は1年くらい前から、どうにか震災前の状況に戻った。

**宮古の事業**

商工会議所は被災事業所を再開させなければならないから、すぐ次の日から始めた。宮古の再開率は今の段階で86％くらい。ただし、10％ぐらいは廃業しているからね、現実的には90％以上で、残っている田老と鍬ヶ崎の事業者が再開すればほぼ100％になる。廃業はもともと後継者がいないから、これを機会にやめる時期が早まったのかもしれませんね。

宮古を全体的に見ると、再開してもなかなか震災前の状況に戻っていない。震災前以上にいい物を出さないと復興に繋がらない。雇用の面でも製造の面でも水産加工業は大きいから、そこの再開をやっているが、震災前の状況にまだ6割くらいしか戻っていないんじゃないかと思う。水産加工業は一所懸命販路の開拓をしている。一度供給できなくなると販路が途絶えるので、なかなか厳しいものがある。状況がいいのは建設関係、サービス業も若干いいのかな。しかし、全体的にはあまりよくはなっていない、そこが一番の悩みですね。

震災前、水産物は宮古の名前が付いていれば、物がいいからなんでも売れるっていうのがあったのね。商品に対する見方が震災後には全部変わった。安全安心、顔が見える物でなければならない。品質基準、消費者、衛生、安全などすべての条件がガンガン厳しくなっている。それに対応しなければならないっていうのが、今一番の課題でね。復興支援をいただいている東都生協の品質基準が一番厳しいから、そこをクリアすれば全国どこの生協にも対応できると思う。そこにどう参画していくかってことですね。

水産、工業、観光の3つをとりあえず太くして再開させれば、あとは自然についてくるという考えでやらないとね。全部いっぺんにやろうとしても無理だ。平成25（２０１３）年4月に3年計画を立てて水産物の販路拡大、商品開発などに取り組んでいる。来年は3年目になるが、まだまだ続けていかなければならない。工業は合板メーカーと金型・コネクターの2大工業が順調だし、観光は大事ですから、厳しいけどいろいろな可能性をどんどん作っていかなければと思っている。

震災で変わったのは、若い人たちがやる気を出してやっているところ、後継者がきちんとしているところはぐんぐん伸びている。震災前にいくらよくても後継者がしっかりしていないと伸びていかないが、Uターンで実家の家業を継ぐ若者が結構いるので安心している。水産加工も、後継者がしっかり成長しているから安心、将来は明るい。業界のリーダーを地域全体のリーダーに育てていかなければならないと思っています。

**(2) 堀田 尚志さんの話** 昭和18（１９４３）年生

新川町4 ㈲レストランほりた、新川町自治会会長

平成27（２０１５）年4月23日、店内で伺う。

**階段を駆け上がる**

2階建と4階建の棟続きの店舗を所有しています。現在は主に、宴会や会合、会場貸しなどを営み、また、高齢者向けにお弁当をお届けしています。

震災当日は、夕方お届け分のお弁当の準備を始めていました。そこに、大地震が来ました。結構長く、今までに経験した事のない大きな揺れでした。こういう時は、お弁当をお届けしているお年寄りの方は不安になるだろうと考え、一刻も早くお弁当を届けようとそのまま準備を進めていました。

ただ、何かいつもと違う…、そう感じて、コンピューターなどの貴重品を念のため上の階へ避難させました。2、3回往復したときでしょうか、ふと外を見ると、私の目に飛び込んできたのは、目の前の宮古大橋から滝のように乗り越え迫ってくる水でした。私は急いで、1階の厨房で仕込みをしていた家内に知らせ、手を引き、階段を駆け上がりました。かかとが濡れる寸前のところまで、水が迫ってきました。危機一髪のところでしたね。当店の立地上、市庁舎と国道の大橋が第2、第3の防潮堤となってくれたため、この程度で済んだのだと思います。屋上に上がって辺りを見回すと、もう別世界になっていました。

当日は花巻に出張していた息子や、揺れの直後に帰した従業員たちは、幸い皆無事でした。

地震発生から40分程経っての津波でしたが、「津波は来ないだろう」という油断もあったのでしょう、私たちが駆け上がった4階からは、大橋でまだうろうろしている人々も見えました。

また、歩道橋の上にいて、ぎりぎりの高さのところで助かった方や、電柱に登って助かった方、宮古大橋の上にいて車ごと助かった方もいました。さかもと眼科クリニック（向町4）の駐車場の車が宮古信用金庫（向町2）の方向へと、固まりになって流れて行くのも見えました。突破できると思ったのか、宮古大橋から水の中へ突入して行き、そのまま流されてゆく車や、「ビーーー」という断末魔のようなクラクションを鳴らしながら、水没してゆく車を何台も見ました。

**事務所で2晩過ごして**

浸水は2階まであと20チセンというところで止まりました。不幸中の幸いでした。その日より2晩は、3階の部屋で寝泊まりし、そこにあった石油ストーブで暖を取りました。13日の午後には、崎山にある家内の実家を頼って、歩いていきました。2時間以上はかかったと思います。他にも多くの人たちが、難民の様に列をなしていました。14日にバイクを借りて店の様子を見に行きまして、愛宕小学校に避難所が開設されたのを確認しました。数日後、合流した息子共々、愛宕小学校の避難所へ移りました。ですが、いざ行ってみると、家を失くされた方など、大勢の方がいらしていたので、2、3日お世話になった後、防犯の意味も兼ねて、寝泊まりは店の2階とし、食料や支援物資などを頂きに避

難所へ通うことにしました。

店舗の裏手にある土蔵と昭和11（1936）年頃に建てた木造の自宅への被害は、水というより瓦礫によるものでした。魚市場の機械や、周辺で壊れた建物の一部が一緒に流れてきたので、壁も天井も壊れてしまいました。門の周辺は、どこの家の物か判らないタンスや机などが山になっていました。泥出しだけでも半月以上かかったと思います。全国からのボランティアの皆さまに感謝しています。

**時代に合わせた事業を**

1階にある厨房、機械類は、全部だめになったので処分しました。店舗部分は全面的に天井がやられてしまったので、補助金を頂いて修理をするため、工事の段取りをしています。

震災後、1か月過ぎた頃だったと思います。世界中からくる支援物資を受け入れるために、宮古ロータリークラブさんが例会を開くことになり、その際のお弁当を頼まれました。2階にあった小さな厨房には被害がなかったので、それを機に、営業を一部再開しました。

高齢者向けのお弁当は、震災の年の5月末には再開し、現在もお昼と夕方にお届けしております。個人、社会福祉協議会、介護施設などからも問い合わせがあります。主に地元でとれた食材を使って、昔からの宮古の味をお届けしています。被災された方には仮設にもお届けしています。レストランは夏前には工事に入れるよう、打ち合わせを進めています。これからは、世の中の動きや高齢化に合わせて、高齢者が集う事のできるような仕組みや、フードコーディネーター的な営業にシフトしようと考えています。

**町内の様子**

この町内でも、避難しなかった方、津波の様子を見に行った方など、5名の方が亡くなっています。

新川町は水産加工や漁業が多かった地域で、もともと50世帯位と少ない世帯数でしたが、震災後は他所に避難された方や、仮設に入った方などもいるため、9世帯（19人）に減少しました。人は減ってしまいましたが、その分見ず知らずの方ともお互いに挨拶するようになりました。

自治会の運営については、私は会長をしているのですが、運営費の徴収を昨年の10月以降下半期分から再開しています。

**震災と祭礼**

私が総代を務めている横山八幡宮では、震災の年の9月の例大祭をどうするか？　という議論がありました。「亡くなった方がこんなに出ているのに失礼だ」という方、「こういう時だからこそやろう」という方、様々いましたが、結局実施して良かったです。行程20キロ以上に亘り行列も練り歩きましたが、被災したにもかかわらず、いや、被災したからこその奉賛もこれまでになく多く、関係者一同喜んでいます。

## 2　向町

向町は東に新川町、南は土手を挟んで閉伊川に接している。慶長16（1611）年の津波後に区画された本町に続く古い町である。町内は1番から3番を下向町、4番から9番を上向町として、それぞれ町内会、または自治会がある。9番地と宮町との間に藤原に繋がるJR山田線が通っている。宮古橋と並行して鉄橋（第43閉伊川橋）が架かっている。第二分団の屯所（管轄区域＝向町、大通1丁目、2丁目）があり、震災までは市保健センター休日急患診療所があった。

震災前、平成23（2011）年3月1日現在の世帯数は143、人口は315名（男137、女178）であった。

「3・11」の津波による浸水は第二分団屯所が3・2メートル、町内のほとんどの家屋は1階が壊滅状態となり、人的・物的両面に市街地でもっとも大きな被害が出た。JR山田線の鉄橋の橋げたが流失し、橋が崩壊した。

家の中での被害者が多い。自宅に留まって仕事をしていた人、家族を2階に上げたが自分自身は上がりきれなかった人、1階の部屋に寝

ていた老夫婦、地震後老夫婦を心配して様子を見に来たヘルパーさん、自宅の3階に上がったが下に物を取りに戻った人などである。

家の外では水門に様子を見に行った人、一度は避難したが上着を取りに家に戻った人、家から逃げる途中の人、電柱につかまっていたが力尽きた人、シーツを投げてもらったがつかまりきれなかった人など、死亡届者は合わせて24名（認定者1名）にも及んでいる。

震災後、平成23（２０１１）年８月の世帯数は１０４、人口は２２１名（男99、女１２２）に、平成27（２０１５）年3月1日現在は85世帯、人口１９９名（男90、女１０９）に減少した。

町内会・自治会の活動は徐々に動き出している。

(1) **吉田 精一さん**　昭和10（１９３５）年生　と
**吉田 栄子さん**　昭和17（１９４２）年生　の話
向町1　平成27（２０１５）年4月26日、ご自宅で伺う。

**井戸の水が引いた**

**精一さん**　三陸の津波のことはわからなかったの。まだ生まれていなかったからね。それでもね、亡くなったおじいさん、おばあさんから「大きな地震があったら、必ず井戸の水を見ろ、引けていれば津波が来る」と、そういうことを教えられておるんですよ。水っていうのは、人間の生活に大切なもんなんです。扱いだとかいろんなことがわからなければ、結局人間が災害に襲われてしまうんですよ。それで今回の地震のときも井戸に行って見たわけ。水はスーッと引けて、湧いてこなかったわけだ。

**栄子さん**　今はポンプで汲み上げているので、コンクリートの蓋をかぶせて、余分な水を下水に排水している。それが流れていなかったの。

**精一さん**　私はね、以前、町内会長もやっていたんですよ。町内に、「津波が来るから、逃げろ！」って騒いでね。まず20分ぐらいね。「命が大切だ、逃げねばなんねえ。津波てんでんこでだ」ってね。私たちはすぐに常安寺に避難した。

**栄子さん**　一番トップに常安寺さんに着きました。

**精一さん**　ところがねえ、町内の方々でわかっている人は何人もいないんですよ。井戸もほとんどないから。それでね、私は一番先に避難したような形だけど、残った方々は、「たいしたことない」って逃げなかった。昭和36（１９６１）年のチリ地震っていうのはね、閉伊川の底が見えて津波も来たけどもね、波は岸壁を越えなかったわけだ。「だいじょうぶだ」って逃げなかった人も、「なあに、チリのときもこなかったべ」って、そういう安心感もあったのかわからないけどね。

私が騒いで回って、手ぶらで東屋（本町2）さ行ったときには、後ろに波が見えた。第1波は強くないんですよ。第2波、3波と強くなってくる。東屋の駐車場で第1波が足元まできたんですよ。

昔から言われたことは、大切なことなんですよ。ここが宮古市で一番低い土地なんです。昔の町名は中洲（なかせ）と言って、閉伊川の河川敷で埋め立てられたところ。この地域で、新川町も含めて37名亡くなったよ。3日目に帰ってきて井戸を見たら湧いていた。どんどん、どんどん湧いていた。近所の井戸もポンプを付けているけど、震災後自然に1メートルは湧いていた。大切な井戸なんですよ。だから、息子に「絶対、この屋敷を放してはなんねぇ」と言っているんですよ。井戸は使えば自然にどんどん湧くんですよ。

**避難生活**

**栄子さん**　ここは水が2階まで上がった。2階の床上10センチくらい上がったんじゃあない。

**精一さん**　津波はだいたい2メートル50センチくらい上がった。

**栄子さん**　このテーブルは津波に耐えて助かったの。足が1本取れましたっけ。重いマッサージ機の座椅子は流れていって、この一枚板のテーブルは居間の中を少し動いただけで残った。

常安寺さんには1か月と10日ぐらい、いたなぁ。なんでそこまでいたかと言うと、お父さんにお薬が出ているんだけど、盛岡に行けば病院を変えなきゃあなんないの。当時はごちゃごちゃしていて主治医の先生になかなかお会いできなくて、長引いたんです。1か月後にはう

やく紹介状が出たんです。で、常安寺には一番先に行って、ほとんど最後までいて、その間常安寺さんは同じメニューは出さなかったの。和尚さんもおにぎりを握ったりして、すごかったですよ。最後は5人位しかいなかった。

その後は盛岡（滝沢市）の娘のところに4か月ぐらい、娘に飽きられてしまうほどいたんですよ。ここは土台と柱が残った。2世帯で上に住んでいる息子夫婦が一生懸命片付けくれて、大工さんも入れてくれた。私たちは盛岡から1か月に2回くらい通っていたんです。

**伝承が大切**

**精一さん**　水の大切さ、有難味が伝承されなければいけない。火だって同じで自分の命にかかわることだ。震災の年の9月の選挙が終わった後、市が市民を集めて津波の体験を聞く機会があった。大勢の人が参加してみんな言いたいことがあって、次々と意見が出た。私はじっと我慢していたんだ。9時を過ぎて半になった。私だけ盛岡に帰っていかなければならない。そこで、「金をかけないいい方法があるんだ。小学校の黒板の脇に「津波てんでんこ」という標語を掛け軸に書いて貼っておきなさい。学校に入れば子どもたちは必ず見るし、金もかからない一番いい方法だ」って言ったんですよ。

それから、町名は自然の条件を考えて付けられているから変えてはいけない。そういうことを考えてまちづくり、家づくりをしなければいけないんですよ。

**(2)　釜場 清人さんの話**　昭和44（1969）年生

向町1　釜場電気商会代表

平成27（2015）年3月9日、事務所で伺う。

**7階まで一気に駆け上がる**

近所の家でちょうど朝から仕事をしていました。そこは路駐ができなかったので荷物を全部下して、車は自分の家に置きに来て、歩いて仕事に行きました。

地震ですごく揺れたもんでまず表に出た。ぐらぐらときて、1回揺れが治まって津波警報が出たけど、まさかここに来るとは思わなかったので、もう1回仕事に戻ったんです。そしたらもう1回大きく揺れたので外に出て、「これはまずいんじゃあないか」って話になった。この辺りのみなさんは歩いて避難を始めていた。一緒に仕事をしていた人がワンセグを見ていて、「津波が来ているようだ」って見せられたけど、画面が光ってよく見えなかったので、そんなもんかなあと眺めていた。そこの家の人も車で避難して行ったので、私も自分の家に、津波に向かうような形になるけど、なにを持って逃げようか、バイクにしようか、車にしようか、なんて考えながら歩いていった。

家の前に近所の人が2、3人いて、話しかけられた。そこで「避難所は宮古小学校じゃあないの」なんて立ち話をしていると、後ろになんか気配を感じた。振り向いた瞬間、さかもと眼科クリニックの前を駅方向に黒い波がバワァーと、後から映像で見る市役所のところに来たのと同じ波だと思うけど、それが走っていくのが見えた。「ワァー、やばい！」って、家の方を振り向くともう水が来ていて、私の車がプカプカと浮いていた。これはもうあお空さん（介護施設、向町2）の方に行くしかないと思って、すぐに走った。2階か3階にいた施設の人たちが、「こっち来い！こっち来い！」と呼んでくれた。階段を一気に駆け上がって逃げたんです。ここで立ち話をしていた人たちはみんなちりぢりですよ。

正面玄関から入ると、1階には誰もいなかった。2階、3階に利用者さんたちがいたようだったけど一気に、上へ上へと一番上の7階まで行きました。お住まいをノックして開けてもらって、ベランダから屋上に出た。下を見ると、大きい水がサァーと浸透していくように来て、水嵩もかなり増えてすごいことになっていた。

家の前で立ち話をしていた5人は全員、あお空さんで落ち合った。その人たちは多分外階段から上ってきたんだと思います。向いの楽菜さん夫婦（向町3）は玄関から上がってきて、中で会いました。

**自宅の2階がプカプカ流れる**

屋上に出た瞬間、携帯電話が鳴った。大阪の人からで「どう?」と言われたちょうどそのとき、私の家の河口側にある家が流されてきて、家も押されるように流れていくのが見えた。2階部分がプカプカ浮いて100㍍くらい先に止まった。「ああ、ああ、家が、家が流されている!」と言って携帯を切ったので、私が家の屋根の上にいて流されているという情報になった(写真1)。家族はみな盛岡にいて私ひとりだったので人的被害はなにもなかった。もし、すぐ自分の家に入っていたら、私も巻き込まれていただろうから、家の前で立ち話していたのがよかったのかもしれない。

私の携帯がauだったせいか、高いところにいたせいかわからないけど、しばらく何本か繋がったんです。内陸(盛岡)に姉がいるので電話して、「すごいことになっているから、誰か早く助けに来てくれるように連絡してくれ」と言ったら、すぐに盛岡の消防署に駆け込んでくれたみたいで、消防署から私の携帯に、「沿岸がすごいことになっているみたいで、私たちも急いでそっちに向かっているから頑張ってくれ」という電話がきた。私は宮古だけの出来事かと思っていたが、ああ、ここだけじゃあないんだ。全国的にすごいことになっているんだと思った。

写真1　プカプカ浮いて流された自宅の2階
2011/03/21　撮影:釜場清人

夜中に1回、津波が引けた後に、あお空さんに避難していた近所の男性に頼まれて、一緒にその方の家族を探しに、外に出たんですよ。そこで、分団の人に「手伝ってくれ」と言われて、瓦礫の中の人に声をかけたりしましたけど、その人は助からなかったようです。探していた方の奥さんと小さいお子さんは近くのアパートに逃げていて、無事が確認された。その後、内陸で働いている近所の男性2人が、心配して戻ってきたところに出会って、一緒にあお空さんに行った。その晩、あお空さんに避難した近所の方は9人くらいだったと思います。

**翌日は盛岡へ**

次の朝、陽が上るとすぐ流された我が家に荷物を拾いに行った。2階はプカプカ浮いている状態だったので、中の物は大丈夫だった。私が家にいたら、2階に上がって多分助かったと思うけど、きっと心が折れてしまったと思う。あお空さんに挨拶をして宮古小学校に行った。場所を取ったんですが、携帯が繋がった友人から盛岡の家族に連絡がついて、義父に千徳まで迎えに来てもらって、その日のうちに盛岡に行った。津波の翌日だったのでみんなに、「テレビに出て話せ」と言われたが、2、3日経てばどんどん情報が入ってきた。その次の日(13日)テレビに「あお空さんに外から7、8人が避難して、施設の人が20~30人くらいいる」というテロップが出たんですよ。姉と消防署に話した情報が少し上がったんだと思うんですけど、それが1週間くらい流れていたので、宮古ではまだそんな状況が続いているのかと心配になった。

盛岡に1週間くらいいて、その間に宮古に借家を手配して、被災した同業者と一緒に仕事を再開した。店舗のことがあるので早い段階で準備を始めて、平成26(2013)年3月ごろに店舗と住まいが出来上がりました。

**(3)　大久保 博さんの話**　昭和27(1952)年生
向町2　㈲介護施設「あお空」代表取締役
平成26(2014)年8月8日、施設内で伺う。

**町内の一時避難所に**

地震があったとき、私は7階にいたんですけど、長い地震だったので下に降りて、まず1階のデイサービスの利用者20名を2階に上げました。帰した方はいなかったですね。そして津波が来て、そこでも危ないというので、また上の階に上げてという作業をしていたんです。そこに近所の方10人か11人ぐらいが、7階の私の住まいに、ご自分の判断で非常階段を上って来ました。私は施設の利用者の方、高齢者の方のお世話で手一杯だったので、直接誘導したりすることはなかった。

そうこうしているうちに、男性が流されてきて、とよ（とい）につかまったんですね。それをシーツでロープを作って、みんなで2階の窓から引き上げて助けた。それがここの建物の一番の救助でしたね。男性は低体温症で大変な状態だったんですが、ここには看護師さんもいましたから、6階で布団を敷いて介抱して、次の日には回復しました。私から見て50歳くらいの方だったかな。

上に避難したご近所の方には7階を開放して1晩泊まっていただいた。水は1晩でかなり引いたので、次の日にここから避難所の宮古小学校に行かれた方が多かったと思います。

**介護施設は一時閉鎖**

当日は入居者が20名、デイサービスの方が20名くらいで、職員は24～25名いましたが、デイサービスの方を上の階に避難させて、その方々の入る部屋の調整や入居者のケアもあり大変でした。デイサービスの利用者を帰すことは考えませんでした。送っていく職員がここに戻るということも考えなければいけないし、津波が来る前にみんな上にあがったので、結果的によかったと思っています。デイサービスの方は、翌日ここを出て避難所などに行かれた。

次の日はみんなで食糧探しですね。停電、断水でトイレが使えない、それが大変でした。入居者の方々のご家族の状況などはお聞きしていませんが、13日頃から自宅にお帰しするか、または分散して近所の施設に移っていただきました。入居者はここでは怪我をしなかった、とりあえず命が助かったということで、この施設は一旦閉鎖して、職員は休みにして家で待機してもらった。

停電、断水が1か月か2か月くらい続いたけど、私たち家族はなんとでも我慢できます。暗くても食事はあるし、元気だったので、ここに住んで、トイレは遠いところに行きました。

**再開と復興**

再開してから入居者は戻った方も戻らなかった方もいます。窓から津波がくるのを見ていたのですから、一度そういう目にあえば怖いんじゃあないんですか。デイサービスも2、3か月の間は閉めてましたから、ゼロからの出発ですね。その間に他の施設に行った方は、そちらに慣れたでしょうしね。職員は戻ってきた人もいるし、トラウマで戻れなかった人もいる。そちらも新たな出発で、それからの方が痛かったですね。私の友人にも頭の中に何回も津波がきて、ストレスが消えないという。そういう方はいっぱいいるんではないかな。いいことはなにもない。もうたくさんですよね。

部屋は27室ありますが、現在の入居者は14～15名、デイサービスは震災前の8～9割に戻っています。

今考えれば、津波のときはこういう高い建物を利用するというアピールを、もっとしておけばよかったと思っています。非常階段を上がった人たちは、自分の判断でこの建物の上にあがってくれてよかった。逃げる途中で亡くなった方もいらっしゃるから、ここを使ってもらったことで、少しでもお役に立ててよかったです。あのまま逃げていれば、距離がありますから、何人かは巻き込まれていたかもしれない。悔いがあるとしたら、普段からもっと町内会に「なにかあったら使ってください」って知らせておくべきだったと思っています。震災後に町内会にこの建物を使ってくれるように申し入れをして、市役所からも避難所指定を受けました（写真2）。

ここは開設して9年経ちましたが、最初は費用の安い木造建築でやろうと思っていた。しかし、津波のことも頭の中にあって、ちゃんとしたものにしようと、鉄筋の建物にしたんです。

写真２　津波から逃げて、駆け上がった介護施設の非常階段

**第六感が働いた**

自分自身の中でほっとしていることがあるんです。

津波の半年くらい前、釜石市に申請して事業者指定を受けて介護施設を造ることが決まっていた。その事業所の予定地は、大勢の住民が避難して犠牲になった鵜住居地区防災センターのすぐ近くだったんです。ところが、あるときここは津波があったら危ないと私の第六感が働いた。そこで市役所に「ここは津波で危ないから場所を変えてくれ」と言って、強引に山の方に建てることにしたんです。それで、手前どもだけ助かったんです。役所というのはこの場所に介護施設を建てると決めたら、あんまり変更はしないもので、あれは私の人生の中でただただ運がいい。後で考えたらそこは誰が考えたって、悪くない場所でしたよ。周りに病院があるし、堤防もある。でも本当にここは危ないと感じた。あのときだけは虫の知らせがあったんです。

今は日常に戻るのに精いっぱいで、正直忘れたい、前に進みたい。いいことはそのときの行動で命を助けることができた、その体験をしたことです。

**(4)　伊藤囚一（しんいち）さんの話**　昭和21（1946）年生

向町２　蕎麦屋「藤七屋」

平成27（2015）年3月10日、店内で伺う。

**ひさしから隣の屋根に上る**

この蕎麦屋はお祖母さんの代の明治からだから、もう百年以上になるね。お袋から見よう見まねでやってきた。

地震のときは近所のお客さんが1人いたんですよ。おばあさんを避難させると言ってすぐに帰って行った。この辺はたいがい地震のときは津波があるから、お手伝いのA子さんに、「津波が来っかもしれないから逃げろ。今日はもう店を終わりにする」って言ったの。A子さんは逃げないで後片付けをしていた。

俺は外に出て様子を見ていたら、まだ逃げない人もいるから、大丈夫って思っていたら、向こうから走ってくる人がいるんですよ。えっ！と思って、三浦米屋さん（向町４）の交差点の方を見たら、水がワーと来た。もう間に合わないから、家の中に走ってきて、A子さんと2階に上がった。どんどん水が上がって来て、ここは建物が低いので水は2階まで上がって来た。これはうまくない。「屋根にあがれ」って、窓を開けて、ちょうど屋根のひさしが隣りの家に続いているんで、屋根を伝って隣の家の屋根に上がった。ねずみも1匹一緒に上がってきた。可笑しかった。雪がちらちらと降って寒かった。

辺りに変な匂いがするなと思ったら、プロパンのガスボンベが噴き出しているんですよ。水は道路から家と家との間に入ってきて、どんどん上がって来るんですよね。裏からもウワーと来てすごかったからね。古い家の梁がぶつかってドアが壊されて、この辺はすごかったですよ。家が流されてきて、この辺に溜まって、車もそこここに引っかかって、どうにもなんないね、ありゃ。

水はこの家のひさしまで来た。隣の家は新しいから基礎が高くて、水は1階の屋根のぎりぎりまでしか来なかった。

隣の家は避難して誰もいなかった。ちょっと大きな地震が来るというと、いつも息子さんが迎えに来るんですよ。寒かったので2階の部屋に入って、押し入れに布団があったから、使わせてもらった。夜の間も水はなかなか引けなかった。だいぶ時間がかかったんじゃないかな。俺は耳が遠いので聞こえなかったけど、A子さんは女の人の声が聞こえたと言っていた。

朝になって下に降りてきたら、家の中はメチャクチャで、歩く場所

もない、外に出るのも容易じゃあない。ここの2階は畳の上まで水がきていた。でも、家が壊れなくてよかった。船もその辺に引っかかっていたからね。俺はいいほうかな。

道路にはまだ水があった。A子さんが家に帰るので、長靴を探したら穴が空いたのがあった。その長靴を履いて水のないところまで送って行った。A子さんが家に帰ると、近所（西町）の人がワッーと抱きついてきたって。おそらくA子さんは流されたしまったと、思っていたらしい。

**真っ暗な2階で避難生活**

道路は瓦礫ですごかった。みんな家にあった物を道路に出したから、瓦礫で埋まって、人が通れるくらいしか空いてなかった。2階にも水が入ったけど、マットレスと布団を2枚敷いて、その上で暮らしていた。電気なし、水道もなし。食べ物は向いに住んでいた人がいろいろな物を持ってきてくれた。みんな避難所に行って、いろんな物をもらったりしていたらしいけど、俺はずっとここにいた。

津波の後なんか真っ暗でしょ。雲がすごいんですよ。低く流れていく。そんな雲見たことがない。ここら辺は人がいるような場所じゃあないからね、俺だけだから、ひとりで気楽だったな。

A子さんが毎日来て、泥運びからメチャクチャになっている家の中の片付けなどを手伝ってくれた。電気が戻ってくるまでだいぶかかったんじゃないかな、この辺はメチャクチャだったから。向こうのちょっと高い方は、電気が早くにきたようだけどね、こっちの方は真っ暗ですよ。

車は東屋の駐車場においていたので助かったんですよ。あそこの手前まで水が来た。ジャンパーに免許証とか鍵とか入れてるんですよ。部屋にかけておいたジャンパーが見えねえんですよ、どこ探しても。畳も、もう、全部引っぺがして探した。水圧で天井が開いているところがあった。一番最後にそこを見たらジャンパーがあった。よかったですよ。免許証も鍵も入っていたから、それですぐに車が使えるようになった。

近所の人たちが戻ってきたのは1か月か、もっとあとだった。住めるような状態じゃなかったからね。隣の家の人と会ったのは、だいぶ後になってからじゃないかな。「よく生きていたなあ」と言われた。今もなんというのか、これが現実かという感じがして、ちょっとピンとこないね。

**店の再開**

商売を始めたのは1年後の3月頃。通りかかったお客さんが「いつから店を始めるのか」って聞くんですよ。「さあ、いつになるのか分からない」と答えていた。人がいなくなったけど、昔からのお客さんが結構いるからね。そういうお客さんが来てくれるんじゃあないかなって。商売初めてもそこそこはやっていけるんじゃあないかという計算をして、できるだけ早く商売しようと思った。この商売は道具とちょっとした店さえあれば、俺が器械だからって。だからなんとかできるんじゃあないかなと思った。

道路に面した店は取り壊して、後ろの自宅の1階を修理改装して店にした。工務店に頼んでも順番があるからね。でも早くやってよかったです。今は大工さんがいないし、材料が高くなっているし。俺のときには「予算がこれしかない」って、信用金庫の人に頼んで、補助金のことなど教えてもらった。金庫の人も被災しているんですよ。申請してもらえるやつは全部もらって、支援金では足りなくて信用金庫に借りに行った。年齢を見たら、普通は貸してくれないですよね。だけど津波の被災者なので特別貸してもらえた。その代り75くらいまで払っていかなきゃあならない。それまでもてるかどうかね。仮設でボケっとしているより仕事している方がいい。

**防災無線**

今、避難のときは防災無線で知らせるけど、あれはよくないね。子どもの時から地震があると、間もなく船が沖に出て行くエンジンの音

がしたもんだ。この辺は漁師や船関係の人が多かったんで、地震、津波というと、すぐに海とか川を見に行く。水が引けていて、様子がおかしいというと、避難する習慣があるんですよ。堤防ができたら水門を閉められて、見えないでしょう、見えないから全然わかんない。津波のあとビデオを見せてもらったけど、市役所の通りは堤防のところまで水が来ているのに、車が走っていた。堤防も善し悪しだね。

堤防ができてから頼りになるのは防災無線。だけど、マニュアル通りに言っているような感じで、全然緊迫感がない。見えてないんですよ。本当はね、海の見えるところで実況中継してもらわないとね。機械ばかりに頼っているというのは駄目だよ。あれで遅れた人もあると思う。しっかりしてもらわないとね。防災無線が頼りだからね。

それから、大事なのは警察。信号機も防災無線で、「赤でも無視して走ってもいい」と言ってくれればいいんですよ。ずっと先の安全なところで赤信号で車が止まって、こちらから避難する車が詰まって進まない。車に乗ったまま流された人もいるって聞いている。

**(5) 藤田 正憲さんの話** 昭和21（1946）年生

向町2 元第二分団員

平成26（2014）年10月22日、東屋事務所で伺う。

**大声で叫びながら走る**

地震があって、それが治まって、うちのやつはすぐに近所の奥さんたちと3人で、お寺だか宮古小学校だかに避難した。私は第二分団の屯所（向町2）に行った。

信号が止まって、交差点にあっちからもこっちからも車が来て、動かないんだ。屯所にある半纏とヘルメット着てきた。すると車が動き出したんですよ。やっぱり半纏というのは違うんだなあと思った。あ、12月に分団はやめていたんだって思い、屯所にヘルメットと半纏を戻した。

それから、家の裏の戸を閉めに行き、道路に出ようとしたら、屯所のところにいた分団員が、「来た！」って大きな声で叫んだ。ひょっと見たら、堤防を真っ黒な水がゴンゴン、ゴンゴンと越えていましたものね。それから分団員と2人で、「津波だ！」って、大きな声を出して八幡通りを駅に向かって走ったんですよ。

私ら2人とも前だけを見て真っ直ぐ駅の方に向かって走ったんで、後ろから水がどのくらい来ているのかわからなかった。途中で太田肉屋（太田屋肉店・大通2丁目）さんの3階のベランダから、「上がれ！上がれ！」って声がかかったので、2人で横の階段から3階に上がったら、通りにはもう水が来て、車が流されていた。車に乗っている人の手が見えたりして…。

私らの声を聞いて家から出てきた人や自宅の2階に上がった人もいた。楽菜さん（向町3）も私らの声を聞いて「あお空さんに逃げた」と言っていた。

家は道路に押し出されるような形で崩壊したので、現在はアパート暮らしをして、もとの土地に新しい家を建てている。

＊藤田さんは2015年11月に逝去されました。合掌。ご冥福をお祈りします。

**(6) 中居 達郎さんの話** 昭和46（1971）年生

向町3 中源米穀店

平成26（2014）年11月23日、店舗前の道路で伺う。

**黒い泥水がきた**

地震があって両親はすぐに親戚（の家）に避難した。私は大津波警報が出た時、店の前の道路に出ていた。いつも津波注意報だ、なんだって言っても、来ないですもんね。だから3メートルというのを聞いて、防波堤を越えるのかなって思っていたら、今度は6メートルって言った。あれぇ、6メートルだったら、もしかして来るかなって思った。保険センター（新川町6・震災後は閉鎖）で働いていた人たちが、みんなズラッーと歩って避難して行った。家の前に家具の荒川（向町2・旧うちむら家具・震災後に解体）があって、5階建で非常階段があったから、もし津波

が来ても、すぐにそこに上ればいいやと思っていたんです。

そこに、「ウワー」というような声が聞こえて、真っ黒い、泥のような水がジャワーとすごい勢いで流れてきて、男の人が道路に倒れていた。多分水が堤防を越えたのを見て、逃げてきたんじゃないですか。転んでそこに水が来た。あまり若い人じゃなかったようでした。最初その黒いものが津波なのかどうかわからなかった。なにか黒いのがきているなあって思った。家具屋さんの人たちも、軽トラ止めて、まだ働いていましたもの。その人たちに「津波が来たみたい」と言って、非常階段を上ったんですね。

非常階段を上がって河口の方を見たら、家がバキバキ、バキバキって音を立てながら、こっちに流れてきた。道路に立っていた時は、そういう展開になっているとは、全く思わなかった。ようやく津波が来たんだってことがわかったんです。

**消防隊員が車の中の人を救助**

屋上に上ってすぐに上を見たら、自衛隊の飛行機が飛んでいて、ああ、自衛隊の人たちはこの状況がわかっているんだなと一応安心しました。自衛隊も政府も気がついていなかったら怖いなと思った。屋上には家具屋さんの人たちが4、5人いました。

河口から来る水は確かに津波という感じがしたけど、ここら辺はどちらかというと洪水みたいで、ジワリジワリと上がってくるんですね。そのときはまだ畳を代えるのは面倒だな、ここらで収まってくれればいいなという程度にしか思っていなかった。ところが、そのうちに水はジワリジワリと1階と2階の境目くらいまで上がってきたんです。

閉伊街道（宮古街道）を見ていると、流されてきた車が交差点の信号にぶつかって止った。その中に人が2人いて、年配の夫婦でしたね。消防隊員がシュルシュルと電線を伝って行き、車のフロントガラスを何かでガンガンと割って、「必ず助けるから落ち着け」って、2人を引きずり上げたんですね。もう1人歩行者用の信号に引っかかっている人がいたんですが、その人はすでに亡くなっていたみたいでした。

道路にいた人が僕の方を見て、街路樹の上にいる女の子を助けるように言ったんです。「助けて、助けて」と言う声が聞こえて、家具屋さんの人が屋根を伝って助けに行ったんですが、ボートもなくてどうすることもできなかった。波が引いてから「消防隊員に助けたられた」と聞きました。

店は水につかって、2階にも水が入ったので、私も両親が避難していた親戚の家に世話になった。3週間後に両親はアパートに、私は電気もなかったけど、犬がいるので自宅の2階で暮らした。食事はインスタントやレトルト食品でしのいでいました。

精米機もだめになり車も流された。片付けに時間がかかり、米穀店は震災3か月後の7月に再開しました。

**(7) 笹原 美津秀さんの話** 昭和31（1956）年生

向町3 楽菜（無国籍ダイニング・洋菓子）代表

平成27（2015）年3月12日、店内で伺う。

**7階建てに駆け込む**

お客さまをみんな送り出して片付けをして、買い出しに行こうかという時間帯のときに、地震がガッーと来た。あまりにも大きかったんで、子どもが小さかったから、―小学校4年生、保育園児2人― 「うちは逃げるぞ」って、店の前に車を持ってきて、荷物をまとめて必要な物を積み込んでいた。下の子が風邪を引いていて、妻はその薬を取りに行った。

その時、多分藤田さんだと思うんですけど、「津波がきた！」と叫びながら、縦の通り（八幡通り）を駅に向かって駆け抜けて行った、その後から波がスーッと追いかけて行った。それを見てびっくりして、「下りて来い！」と2階にいた妻に叫んで、向いのあお空さんの玄関から入って、階段を4階まで駆け上った。本当は、店の前にいたときにもう津波は来ていたんですね。防波堤があって、僕らには見えないし、防災無線で言っている人も海を見ていないから、情報がちゃんと伝わらないんですよ。これはすごくよくないことですよ。

あお空さんの7階から、家の正面に瓦礫が突っ込んできて、自宅が流されていくのが見えました。前に建物がないので、水がワッーと来たんです。水が引けても瓦礫がひどくて中に入れなかったので、物も取れなかった。1階は全滅、2階の一部だけが残った。家の外側は残ったけど、建て直すしかなかった。

**レストランの再開**

復興はきつかった。山田や田老は仮設で営業できるが、ここは仮設で営業しても、お客さんは誰も来ないから、立ち上がりようがないんです。この辺りは流されていない、ちゃんとしたビルの中に冷暖房完備の立派なお店がありますからね。「お店再開してください」と言われても、まず建物を建て直さなければ営業できないし、お客さんも来ません。街中で被災した人たちの復興がすぐできないのはそこですよ。すぐに営業できてお客さんがいる仮設が羨ましかった。

家を建てて店を再開するのに2年7か月かかりました。

**(8) 笹原 めぐみさんの話** 昭和46（1971）年生

向町3 楽菜

平成27（2015）年3月12日、店内で伺う。

**避難生活**

翌朝8時に水が引けてから、ヘドロの中を瓦礫をかきわけて、はじめに宮古小学校に行って、小学生の長男と会いました。それから、小山田保育園にいる2人の子どもを迎えに行ったんです。震災前から知らされていた保育園の避難計画どおりに、子どもたちは先生と小山田神社から公民館に避難していた。保育園から昼寝の布団や紙おむつ、ティッシュなどをもらいました。

宮古小学校での避難生活は家族5人で3か月半。その間に図書館、集会室、体育館と場所を移動して、7月19日に西公園の仮設に入りました。その頃避難者は宮古小学校にもう10人もいなかったんじゃないでしょうか。

家族5人で4・5畳が2間と6畳の部屋に入ることができて、その時は嬉しかったですね。ところが、結露がひどくて、毎晩段ボールを敷いてその上に布団を敷いて、朝起きると段ボールと布団を陽に干して、また夕方になると段ボールを敷いて…、毎日その繰り返し。押し入れには湿気が強くてなにも入れることができない。2階で助かって持って行った道具も私の実家に預かってもらいました。

**家の再建**

家は平成24（2012）年に申請手続きをして、2年7か月で完成しました。その間に建築資材の価格が上がり、防犯のためすべての窓にシャッターを付けなければいけないなど建築基準も変った。そのために、資材の調達に手間取り、完成まで時間がかかったんです。平成25（2013）年11月17日にここに戻ってきて、12月1日にレストランを再開しました。レストラン再開までの間に、私は障がい者施設に就職したので、以前は家のレストランでパティシエとして一緒にやっていたのですが、今デザートは施設から仕入れています。

写真3　子どもの作成したアルバム

**子供とアルバム作り**

街中に遺体があったので子どもを連れて歩けなかった。1週間経った3月18日に初めて一緒に街に出て、変わってしまった街の風景を見せて、携帯で写真を撮ったんです。遺体のあるところは自衛隊が旗を立てて歩いていましたので、そこは写真をとれませんでしたけど。子どもたちはなにがなんだかわからない状況で、笑いもしなかったんですよ。で、逆に写真を撮って

歩いて、それをまとめることで、自分たちの気持ちの整理ができるのではないかと思ったんです。その後3人がそれぞれ、その写真にコメントを付けて自分のアルバムを作りました（写真3）。

**(9) 天杉 国夫さんの話** 昭和18（1943）年生
向町3 下向町町内会会長
平成27（2015）年3月12日、ご自宅で伺う。

**2階のベランダから2階の屋根へ**

当日ね、税金の集団申告の集会をやっていたんですよ。陸中ビル（宮町1）の3階で、150人ぐらいだったかな、その集会の途中だったんです。地震がありましてね、3階だから立っていられないくらいものすごい揺れでしたからね、もう、壁さ、つかまろうにもつかまれないしね、150名いた人がパニックになったですよ。ほんとにとんでもない。こんなのあるだべやと思ってね。それから集会は中止。集団で申告するのは止めとなりまして、申告書はみな事務所に預けまして、自宅まで自転車で一番近い道を帰ってきた。駅前からここまで来るのは一方通行だからすごい渋滞ですよ。車がいっぱいで全然動かなかったんですよ。渋滞は3時頃から始まったんでしょう。

家に帰ると、家内が倒れたお雛さまを片付けていたんですよ。「あの揺れ見ればそんな余裕はないでしょ。」って話してね。その後、欲たかりなもんだから、通帳だの財布だの大切な物を、互いにリュックに詰め込んで、いざ逃げようと表のシャッターを開けたとたんに、もう通りの両方、三浦米穀店さん（向町4）とアニュー宮古さん（向町3）の両側に、真っ黒い水がワァーと盛り上がるように来てるんですよ。「ああ、こりゃあ駄目だ」って、すぐにバックして家に戻って、靴を脱いで2階へ上がったんです。家の高さぐらいの水が目の前に来てましたもの。本当のところ、私も家内も津波は来ないだろうって思っていました。来るのが早かった。時計が3時20分で止まっています。

町内会長をしていたもんですから、目の前の7階建のあお空さんに、「もし津波がきたら、上がらせて下さい」とお話して、OK取ってたんです。でも、目の前なのに全然行かれなくて…。それぐらい恐ろしい真っ黒い水が目の前に迫ってきたということなんですよ。

家の中にも水がたちまち上がってくるんですよ。警報のサイレンは鳴るし、余震はくるし、生きた心地がしなかったですよ。どうしようもない、妻と2人で流されれば終りだと、覚悟しましたよ。

それから、屋根に上がろうとベランダに出たのですが、そこから自分の家の2階の屋根には簡単に上がれない。隣の蔵の屋根に移ってから、自分の家の2階の屋根に上がるんだけど、私は簡単に渡っていけても、家内は簡単にはいかなかったんです。足が上がんないんですよ。それにトタン屋根ですから滑るんですよ。ベランダに置いてあった台に乗って、隣の屋根に渡した物干し竿につかまって、なんとか隣の屋根に移って、そこから家の屋根さ上がったんです。下はね、はあ、もうね、水が来ているので落ちれば終りですからね、家内は相当の覚悟があったんではないですか。

**屋根の上からの救助**

いつの時点だったかよく覚えていないんですが、裏（大通1丁目方向）の角に水に浸かっている男性がいたんです。見ているだけで助けることができない、どうしようもない。でも、なんとかできないかと思って、1㍍くらいのブロック塀があるので、「そこに上がって塀を横伝いに来なさい。私の家のところにもう一段高くなっているブロック塀があっからそこに上がりなさい」としゃべると、男性はなんとかそこまで来た。「そこから斜め裏の家のベランダに上がれば誰かいるはずだから」と言った。なんでそう言ったかというと、その男性は2㍍ぐらいの太いロープを持ってたんですよ。「それを丸めて投げて上がりなさい」と言うと、男性はそれを投げて、うまくベランダに上がったんです。でも、その家は留守だった。さあて困った。いやいや、これはどうしようもないなと思って。そこで私が屋根伝いに隣の屋根に移って、男性にロープを投げてもらって、それで男性を引き上げようとした。家内は、「落ちてしまう。止めて！」と言ったが、そんなことを言っていられない

と思ったものですから、「やらなきゃあだめだ」と言って、屋根の雪止めに足をかけまして、なんとか引っ張り上げようとした。結構古くて錆びているような雪止めなんですよ。これ、壊れれば終わりかなと思いながら、踏ん張ってね、なんとか、なんとか引き上げましたよ。重かった。屋根の雪止めがなんとかもったからできたと思っているけど、よくわかりません。必死だった。

3人で家の中に戻ったが、家内はまたベランダに戻るまでが大変だったと思います。水は階段を上から3段残しただけのところまで来ていました。

私たちは3時半頃から2階に行き、屋根に上がったので、男性は1時間以上水につかっていたことになる。私と背丈が同じなもんですから、着る物を上から下まで全部貸して布団に寝かせました。65歳で向町には仕事で来ていたということでした。

夜の11時半頃水が引いたもんですから、3人で避難所ではないけど、避難場所の常安寺に行きました。最初近所に住む孫が宮古小学校にいるかと思って行ったんですが、いなかったので常安寺を見に行き、孫はそこにもいなかったんですが、そのまま家内と2人で4月1日までお世話になりました。昼間はお寺さんからおにぎりをいただいて、ここに来て片付けをしました。

その後はキャンプ用のランプで暮らして、そのうちに2階の増築した部分の電気がついたんですよ。これはいいなって思って、それで2階で過ごすことにしたんです。炊事場もあるものですから、不自由ながらもそこで暮らした。電気はたくさん使うと落ちるので、加減しながら使った。食糧はお寺さんからもらったり、退職後自分で畑を作っていたので、なんとかやってきた。1年後に支援金が出ることになったし、全労連の火災共済に入っていて、本当は火災のためのものだから、津波で壊れたところには出さないんですが、例外中の例外でお見舞金が出たので家を改装した。国はなかなか個人には出さないから、再建できませんよ。復興道路はバンバンやっているけどね、個人の家の再建は進んでいませんよ。

**⑽　天杉 美智子さんの話**　昭和18（1943）年生
向町3　平成27（2015）年10月12日、ご自宅で伺う。

**覚悟して隣の屋根に**

ここには津波は来ないと思っていたので、揺れが治まってから、お雛さまを片付けていた。

表の片っ方のシャッターだけは空けてあったから、そこから外に出ようとしたら、水が丸くなって入ってきた。ああ、もうだめだって思って、靴のまま2階に上がった。びっくりしちゃって、パニックになって、寝袋も一応持ったのね。ぼーっとしちゃったんだね。あとから考えたら何をやっていたんだろうってね。2階に行ってから靴をはいたままだったことに気がついて、びっくりして靴を脱いだ。

2階で大丈夫じゃあないかな、水はこれ以上あがって来ないと思っても、やっぱり怖いものね。主人が、「ここも危ない」と言って、隣の蔵の屋根から家の2階の屋根に上がることになった。どこからどうやって行けばいいのか、どうしようかと…。ベランダに昔のステレオのスピーカーの箱が置いてあったので、トタン屋根で滑るので靴下を脱いで、まずその箱の上に乗って、物干し竿を2本隣の蔵の屋根に渡して、主人に端を押さえてもらって、竿につかまりながら隣の屋根に足を渡した。主人に、「飛べ、飛べ」って言われた。その言葉は覚えているの。下は水が流れていたし、泳げないし、覚悟がいりましたよ。それから、隣の蔵の屋根から家の2階の屋根に行くのは簡単なの。

屋根に上がってみると閉伊川が見えるわけよ。ダッー、ダッーと流れてる。水に浸かっている男の人に気がついたのは、5時のチャイムが鳴っていたときだったと思う。雪が降ってきて寒かった。主人が男性を引き上げて、2階に戻り着替えさせて、布団に寝かせてマッサージをした。とにかくヘドロの臭いがもう大変だった。水が引いて行ったのは5時過ぎ頃かな。

**お雛さまに助けられた**

ここまで水は来ないと思って、1階の押し入れの中段に入れたお雛

さまを見たら、そのまま濡れていなかった。段ボールの中に入れてあったけど、水をかぶったようでも、かぶらなかったようでも…。不思議ですね。お雛さまに助けられたようなもんじゃないかと、私は思っている。震災後も毎年飾っています。

避難訓練の日は宮古小学校に行くことになっていますが、私は亡くなった方の供養もかねて常安寺に行くようにしています。震災のとき常安寺は避難所ではなかったので、途中でお巡りさんに、「ここは避難所ではないですよ」と言われた。今は高台避難地ということで行っています。お彼岸やお盆に拝みに行きますが、避難訓練の日もお寺さんに行くことに決めています。

## (11) 藤島 英世さん　昭和22（1947）年生　と
## 藤島 正子さん　昭和25（1950）年生　の話

向町3　平成26（2014）年8月8日、ご自宅で伺う。

### ここに津波は来ない

**英世さん**　地震のあったときは、市内からちょっと離れた宮古短大の近くの建物の中にいた。防災無線で津波警報が出て、停電になったので、はあー、こりゃあだめだって思った。それから、車出して小山田トンネルから家に来ようと思ったが、渋滞で小山田の橋は通行止めになっていた。津波が来たと聞いて、小山田のラサ工場の煙突のところに行き、車の中でテレビを見てたら、津波が堤防を越えていた。6時ごろ妻と携帯がつながって、「板屋の娘のところに避難した」って言うので、娘の家に行った。

**正子さん**　私は最初逃げなかったんです。スーパーで買い物をしていたときに地震があった。末広町を歩いてくると、酒屋さんの瓶が壊れてお酒臭くなって、停電していたんですよ。家に帰ってきたら、たまたまIHの工事に来ていた娘の旦那さんが、「すごい地震だから、津波が来るんじゃないの」と言って。でもうちの人が、「津波が来てもうちは大丈夫、ここまでは来ないから逃げなくていい」って、ずうっと、結婚してから言い続けていました。私も逃げる気もないし、来てもその辺だろうと思っていた。

そのうちに、婿さんがワンセグで出崎埠頭の船や車が流されている様子を見て、「ちょっと義母さん、逃げた方がいいよ」と言ったけど、犬もいるし「大丈夫よ。英世さんもそう言ってたから」って、それでも外にいたんですよ。周りの人たちが「すごいみたいだから、正ちゃん、逃げたら」と言うんで、「うーん」って言いながら、ずっと外にいました。仕事に来ていた電気屋さんが近くの人なので、「取りあえずあなたはお家に帰って、戸締りとかいろいろして、戻ってきたら」と言って、ちょっとしてから婿さんが、「義母さん、お願いだから車に乗って」と言うので、仕方がなく車に乗りました。

少し走っていくと、「津波が来た」みたいな声が聞こえたんですよ。で、宮古小学校まで行ったら、寒くて雪降ってきましたよね。婿さんが「山の上を通って板屋の家に行った方がいいんじゃない」って言うし、宮古小学校も、「ここにも水が来ますので、もうちょっと高台に避難してください」と言うので、山の上の方に行って様子を見たんです。消防署の上の方は結構人がいっぱいいた。4時半か5時頃だったかな、雪もすごくなり、頭痛もしてきたので、近道をして板屋の娘の家に行きました。

その日、宮古で仕事をしていた息子と連絡が取れなくて、逃げているとは思うけど、夜になって落ち着いてから、市内の避難所をあちこち見て回った。そうこうしているうちに、息子から携帯がつながって、宮古小学校に避難していることがわかった。

**英世さん**　息子に「じゃあ、家、見に行くか」って。夜の10時ごろかな、一緒に途中まで来たけど、まだ完全に水が引いていなかったので、家までは行けなかった。長靴を履いていても、あお空さんのところまでだった。

**正子さん**　真っ暗だしね。靴がビチョビチョになってたね。あお空さんの前に何人かの人がいて、ちっちゃい懐中電灯で「ここに人がいるから、人がいるから」って合図していたんですよ。たまたま歩いてきた消防の人に会って、「あそこに何人か人がいるみたいだから。連絡

とって欲しいみたいですよ」と言いながら、私たちは板屋にもどったの。道路も車や船がいっぱいね、お店や商店街に刺さったりしてたね。

**2日目から自宅で避難生活**

**英世さん**　板屋に1泊して、次の日は車を駅の駐車場に止めて向町に歩いてきたけど、もうすごかった。家に津波が来てもせいぜい床上50㌢くらいの浸水かと思っていた。ところが、1階の天井まで水がきて、ガラスも破られて、押し入れも抜けて、玄関のサッシも破けて、壁も破けて、下駄箱が天井にぶら下がっていた。うちは2階が大丈夫だったので、窃盗団だのあるから、2日目から2階にいました。電気も水道もこなかったし、プロパンも駄目だった。でも、反射型のストーブを買っておいたので、それがあってよかった。ちょうど灯油も値上がりするので、タンク以外にポリタンクに4つか5つ入れておいた。外に家の灯油ポリタンクが流れてあったので…、

**正子さん**　これは家のだって、持ってきて使った。

**英世さん**　寒い時期だったので冷蔵庫の中の物を出しては、ストーブの上で雑炊作ったりして食べていた。家にあるものを少しずつ食べて、避難所には行かなかった。

**正子さん**　津波の被害にあっていない友人からボンベのガスコンロとカートリッジをもらったり、兄夫婦がおにぎりや水を運んできてくれたり、盛岡からもお兄さんが真空パックのご飯を段ボールで買ってきてくれましたから。大人だけだからね、1食抜いても小さい子がいるわけではないし、どうにか暮らしました。

**英世さん**　大通の家で電気を通したらすぐにショートして火事になったので、「ちゃんと調べねばなんねぇ」と言うことで電気の回復が遅れた。

**正子さん**　どんどん遅れて、電気がきたのは40～50日あとくらい。向町は最後だったんですね。近所の仏具屋さん（本町1）が「お使いください」って、ろうそくを出してくれたのでもらいに行きました。テレビも見れなかったんで、電話が通じるようになって、みんなが、「すごかった」って言うんですが、こんなひどいことになっているとは思ってもいなくて、あとでびっくりしましたね。

**英世さん**　食べる物や寒さは、自宅にいたので他のとこよりよかったですね。

　プロパンもお風呂もだめだった。水は1週間後くらいからタラタラと出たので、バケツに貯めて2階のトイレを流すのに使った。新川町に井戸の水が湧いているところがあったので、そこにバケツを持って汲みに行った。

**正子さん**　角の三浦米屋さんの交差点に大きな漁船が止まっていて、1か月以上そのままで車が入れなかった。息子の車も借りていた駐車場から流れて他の車と重なっていた。

**英世さん**　家の前の道路は船にふさがれたうえに、家の中で水に浸かった物もみなさん外に出したので、車が通ることができなかった。向いのあお空さんの側は、早くに片付いて車が通れるようになった。

　家の1階を片付けるのには1か月くらいかかったかな。修理にどのくらいかかるかわかんないから、自分で壁を洗って、もういいなと思っても、水を含んでいるので乾くとまた膨らんでくる。3、4回は繰り返し洗いました。

**正子さん**　2日間ボランティアの人に手伝ってもらった。

**英世さん**　大通りのＹＭＣＡ（大通1）のボランティアの人が来て、「なにか手伝いますよ」と言われたので、床下の掃除をしてもらいましたっけ。助かりました。この町内の側溝の泥さらいは、自分一人のところだけやっても効果がないから。町内会長から申し込んで、やってもらった。3日間くらい14～15人が交代で来てくれた。岩大の学生も来ました。

**正子さん**　１００㍑満タンの灯油タンクの配管が壊れて灯油が流れ出していた。津波の泥水や魚、灯油の臭いがひどくて、1階の物はすべて捨てた。1年後に部屋が暖まると、窓枠になにか白いものがあったが、それは塩だった。銭湯はちょっと離れたところに車で行ったり、毎日洗濯物はリュックを背負ってコインランドリーに通ったりして、そういうのが大変だった。

**英世さん**　ガソリンがないから、なるべく歩いて行くようにした。
**正子さん**　電気がもどり、お風呂が直るまで、しばらくの間通いましたね。
**英世さん**　たまたま灯油も買い置きのポリタンクがあったからよかった。2階に台所があったから、冷蔵庫も残ったし、寝具も2階で使えたし…。
　逃げ遅れたり、1回は逃げたけども、寒かったので服を取りに戻ってきたりして、向町上下合わせて30人くらい亡くなっていますね。
**正子さん**　トイレも2階だったしね。次の日から自宅に住むことができた。私たちはいい方ですよ。

**⑿　三浦 利勝さんの話**　昭和20（1945）年生
　向町4　三浦設計事務所所長、三浦米穀店、上向町自治会会長
　平成26（2014）年8月11日、事務所で伺う。

**3階から覚悟の写真撮影**

　3階の事務所にいて、強い揺れを感じました。当時83歳の母親が心配になって下に降りて行ったら、柱につかまっていた。2回目の揺れが来て、「これはただ事ではない、今までとは違う、津波が来るから逃げなきゃだめだ」と家内と話して、地震が治まるのを待ちまして、2人を逃がしたんです。母親はいろいろ薬を飲んだりしているので、「あれがない、これがない」と2度も3度も行ったり来たりして、「あとで持っていくから逃げろ！」って急がせた。皆さんより若干遅れぎみでここを出ていきました。家内は市の避難訓練に毎年参加していたんですが、顔色を変えて、「津波が来る！　津波が来る！」って、私より危機感を持っていましたね。
　私は外に出でいた番頭さんを待つことにして、さかもと眼科クリニックの看護士さんたちが逃げるのを見ながら、一度3階の事務所に行き、また下に降りた。歩いている人はほとんどいなかった。宮古橋から駅の方に向かって車が渋滞していて、黒っぽい服を着た人が2人で交通整理をしていました。町内会長もしているので、しばらく家の前で町内の様子を見ていたが、通りに誰もいないのを確認して、家の中に入ったんです。
　最初は「20㌢の津波を観測」という放送で、そんなものなのかなあと思っていたら、その後に「6㍍」とか「9㍍」とかいう放送が1回あったような気がします。それで、これから逃げても間に合いそうもないし、自分の設計した家を放り出す気にもなれないし、また設計者としての興味もあったので、逃げる気にならなかったんです。番頭さんが帰ってきて、昔は米を担いで上にあがったんですが、もうそんなこともできないので、レジスターを上にあげた。そのとき、誰かの「来たぞー」という声を聞いて、番頭さんと2人で上にあがった。2、3万しか入っていないレジスターを上にあげたんですが、あとから考えると、十数万する米券や印紙はすっかり忘れていました。
　3階の窓から外を見ていると、ご老人がゆっくりと歩いてきて、そこに第1波というか、20～30㌢の黒い水が来た。おじいさんは後ろを振り向いて、びっくりして前に進もうとしたら、信号の柱に頭をぶつけて倒れたように見えた。でも、後から考えると、水嵩が増してきて水没したんですね、あっという間の出来事だった。
　その後呆然としていたら、突然大きな音がして、車がガラガラとまるで巨大なブルドーザーに押されているかのようにして来た。それは黒い波のようで、上から見ていると、下から盛り上がってくるように感じた。車の警笛が鳴り響き、それと同時に鳴り響いた異

写真4　突っ込んだ船（みやこわが町掲載）
撮影：三浦利勝

様な音は車が流される音なのか、人の声なのか…。また、重油の匂いがして、それは鼻をつくような濃い匂いでした。

波は荒くなったり静かになったりを何度か繰り返して、いろいろな物が流されてきた。そのうちに船が流されて来て、舳（へさき）は前の屯所（向町2）に、後ろは我が家にぶつかって止まった。波の流れが変わったのか、船は再び動き出して、今度は斜め角の美容院の前の電柱（向町3）に舳が挟まった形で止まった（写真4）。

**水が引ける頃**

私が2、3歳の頃、この辺りは昭和23（1948）年のアイオン台風で3～4メートル浸水しているんです。親父から水が引いていくときに屋根に上って、竿で流れてくる物が家に当たらないように避けたという話を聞いていたので、この津波も波が引くときに船やら何やらが戻ってきて、完全に家も駄目になるかもしれないと思い、覚悟を決めたんです。それから、やることもないので、カメラを持ちだして写真を撮りだしたんです。

波が静かになったときには、それまでの騒音が嘘みたいになにも聞こえなくなり、匂いだけがして、時折ガスボンベがねずみ花火みたいにシュウシュウと音を立ててグルグル回っていた。雪が降ってだんだん暗くなって、時々船がギィギィと音を立て、遠くから救急車のサイレンが聞こえてきた。さらに不安になった。だが、その後は堤防があるせいか急激な引き波もなく、命拾いをしたなと思った。

母は歩くのが得手ではないので、あの足では間に合わなかったかもしれない。もしかしたら途中であお空さんの建物に逃げたかもしれないと思って、ここからオーナーの姿が屋上に見えたので、何度か携帯をかけたが通じなかった。心配でした。

電気が消えたので、昔のストーブを出しきて、余震の度につけたり消したりを繰り返しながら使った。トイレの水はしばらく使えたんですが、節水の放送があったときから使わなかったんですが、その後は出なくなった。

10時頃にはだいぶ水が引けていた。見回りにきた第二分団の人が声をかけてくれて、「避難所に逃げた方がいいですよ」と言われたので、ここを出ることにした。駅寄りのもう1つ先の信号のところはほぼ乾いていて、そこにはすでに何人か集まっていた。分団員が自宅にいた方々に声をかけて、ホロをかぶせた軽トラに一緒に乗って、宮古小学校に行きました。

まず、母親と家内を探した。放送をしてもらったが返事がなかった。常安寺かなと思って、次に常安寺に行って、女性の部屋に声をかけたけど、そこにもいなかった。駄目だったのかなと思いながら、また宮古小学校戻ってくると、近所の人が2人を小学校で見たことを教えてくれた。そこでいくつかの教室を捜して回り、見つけたときにはほっとしました。覚悟を決めて3階で写真を撮るまでと、離れた母親や家内と再会したときの気持ちは、今まで経験したことがない初めてのものでした。それが印象に残っています。

**宮古小学校で避難生活**

次の日（12日）から、家内は自分の母親の介護が必要になって、宮町の実家で生活をした。母親は私と一緒に1週間ぐらい宮古小学校にいて、その後は近くの親戚の家に預かってもらった。私はちょうど1か月避難所を拠点にして、そこから自宅に通っていました。

最初の2、3日は電気、水道が止まったので、被災されていない方々も、たくさん避難所に来られていた。3月下旬までは学校の先生方がいろいろとお世話をしてくれたので、避難している人がやることはそんなになかったんです。副校長先生が具体的にてきぱきと指示してくれて感謝しています。新学期が始まる頃には避難所の人々で自主運営をするようにという方向性もあって、掃除や食事の準備を自分たちでやるようになった。そのうちに自衛隊員が校庭で炊き出しをして、校舎の入口まで持ってきてくれる。それを運んで配るなど、当番を決めてやりましたね。

水がなかったので、トイレに使う水は若い方々がプールに汲みに行っ

てくれた。トイレットペーパーなど生活用品は、避難者たちが自宅から持ってきたりしたので不足はなかった。そのうち水道は復旧したが、時々排水に不都合があり、使ったペーパーは流さないでビニール袋に入れておくことにした。また電気が回復するまで、夜使うロウソクも長持ちさせるために、時間を決めてつけたり消したり、灯油の使用時間の制限もあり、今まで経験したことがないことばかりでした。お風呂にも困まった。私は親戚でお世話になったが、週に2回湯ったり館（茂市、リバーパークにいさとにある入浴施設）が避難所に迎えに来ていました。私が出るころには畳が配られて、毛布も1人2枚くらいあった。ちょうど1か月後の4月11日まで避難所でお世話になって、それからは家内の実家に寝泊まりして毎日仕事場に通いました。

**復旧**

自宅は水が2階の床下まで来たので、畳も替えました。米屋は仕事仲間や親戚の若い人が手伝いにきてくれて、その後、ボランティアも3、4人お願いして、1か月くらいかけて片付けた。

店の米があちこちに流れて、ビニール袋の米はパンパンになって、使い物にならなくなっていました。精米所に玄米は1袋もなくなっていたが、精米した後の米ぬかだけが残っていた。

消防車が2台待機して、しばらくそのまま置かれていた船の解体が始まった。重油を抜くのに、1日では終わらなくて2日間かかった。流れてくる重油のために砂を用意したが、それが足りなくなって、たまたま家にあった使い物にならなくなったお米を利用していただいた。重油が流れるのをせき止めるのに役立ってよかったです。

3階の事務所は水の被害がなくてすぐに使える状態だったが、通信ができなければ仕事にならない。それがなかなか開通しなくて困った。直ぐ近くの同業者の事務所は通信ができたので、そこに机を借りて仕事を再開した。

8月のお盆のころに自宅で暮らせるようになり、東京の妹のところにいた母親と、義母を兄のところに預けた家内が戻ってきました。

仮設でお暮しの方はお気の毒ですが、自宅で避難生活をしている人たちのことは忘れられがちでした。自分でも気が付くのが遅かったんですが、支援物資も来なかったし、町内に残っている人たちの支援に対しては申請する仕組みもない。市にお願いして物資を回してもらうようにはしましたけど、今後のこととして、行政にそのあたりをもっときめ細やかにしていただければと思います。

⒀ **石井 繁さんの話**　昭和7（1932）年生

向町5　平成27（2015）年3月10日、ご自宅で伺う。

**船が目の前に！**

我が家は家内と2人暮らしですが、当日家内は病院通いのため不在で、家には私だけでした。過去の経験から津波は来ないと思って、避難しませんでした。今考えると油断があったと反省しています。

3時過ぎに2階から見ていたら、真っ黒い海水が宮古大橋に吹き上がって、まるで橋を呑み込むようでした。津波だと思った瞬間、今まで見たことのないような勢いで高波がどんどん押し寄せてきました。それがだんだんこっちに来るんですね、我が家もあっという間に海水をかぶり危険な状況でした。30㌧くらいの漁船が我が家に向って流れてきたんです。どんどん、どんどんとこっちに向かってくるんですよ。私は、「もうだめだ」ってあきらめたんです。ところが、漁船は庭先数㍍のところで潮の流れが変わり、隣の空地に流れていきました。万に一つの命が助かりました。

家の中にも真っ黒い水が入ってくるんですよ。どんどん、どんどんと盛り上がるようにね。どこまで来るのかなと思い、これもあきらめました。それが階段の上から3段残して止まりました。運がよかった、命が助かりました。

我が家の浸水は4㍍にも達し、1階の天井裏まで来ました。水は玄関を突き破って家の中を通り抜けていったんです。午後10時頃までに徐々に引いていきました。12時に危険がないか確認して、押し入れから布団を出して休みました。

**山口小学校で避難生活**

地震の時、病院にいた家内は津波警報で合同庁舎に避難して無事でした。12日の朝歩いて家に帰ってきました。

消防の方やお巡りさんが地区を回って、避難するようにと指示がありました。お昼頃、泥んこの下駄箱から靴を引っ張り出して一番近い宮古高校に歩いていきましたが、避難所ではなかったので、そこから避難所の山口小学校に行きました。体育館には１００名を超える避難者がいて混乱していました。１週間を過ぎると自宅に住める方は帰っていき、２か月後には50～60名くらいになりました。

消防署が１週間後に災害用の衛星電話を設置したので、仙台や東京にいる子どもたちとようやく連絡が取れました。食事は自衛隊の方たちが三度三度運んできてくれたので助かりましたね。避難所の生活は厳しく、寒さ対策、騒音、寝不足などで大変でしたが、みんなで協調して解決できたと思っています。

**自宅の復旧**

自宅の被害は想像を絶する有様で１階は全滅状態でした。山口小学校から自転車か歩きで通って片付けをしました。５月３日に避難所を出て、自宅の２階で生活を始めました。５月４日に電気、水道が通じてようやく安堵しました。電話がまだ通じなかったので、携帯電話を初めて買って使いました。５月から１階の工事にかかり、７月に１階の部屋の畳が入り、自宅が復旧しました。

自衛隊の救援や炊き出し、警察署派遣のパトロールや交通整理、避難所の山口小学校の先生方、健康管理してくださった看護士さん、消防、市役所、福祉協議会、ボランティア、自宅の工事関係者など、たくさんの方々のお世話になりました。皆さま方の崇高な意志に心を打たれました。皆さまに感謝申し上げます。

災害に対して常に心構えをしておくこと、食料品の備蓄や携帯ラジオなどを用意しておくことが必要だと思いました。そして、警報があれば逃げるということ、日常的な交流、横の連絡が一番大切だと感じています。

今後はこの経験を教訓として災害防止に取り組みたいです。

**３　大通１～４丁目**

向町から宮古駅に向かう大通の両側の町並みで１丁目から４丁目まである。町内会・自治会は、１丁目に２つ、２～４丁目までの各１を合わせて５つの組織になっている。商店、旅館や医院が多く、中心の通りはかつて八幡通りと呼ばれ、県北バスのバス通りになっている。３丁目には第八分団（管轄区＝末広町、大通３丁目、４丁目、南町）の屯所が置かれている。

震災前、平成23（２０１１）年３月１日現在の世帯数は３３０、人口は６７１名（男３００、女３７１）であった。４つの町内の世帯数はそれぞれ80前後である。

「３・11」の津波による浸水は１丁目、２丁目の被害が大きく、多くの家屋、店舗は１階が壊滅状態となったが、３丁目の駅付近一部は床下浸水までというところもある。死亡届者は２名である。

向町附近から駅方向にこの通りを車や走って避難した人がたくさんいた。大通１丁目の通りに面したアパートにおばあちゃん、赤ちゃんを連れた若いお母さんと女性の４名が外階段を上がり、アパートの部屋に入り助かったという。

12日夜中には漏電による火災も発生している。

震災後、平成23（２０１１）年８月の世帯数は３０６、人口は６２９名（男２８９、女３４０）に、平成27（２０１５）年３月１日現在は３１３世帯、人口６１７名（男３０２、女３１５）である。人口数は減少しているが、１丁目ではアパートの建設により世帯数が増えている。

**(1)　斎藤（しちこ）志知子さんの話**　昭和29（１９５４）年生

大通１丁目　平成26（２０１４）年８月12日、ご自宅で伺う。

**すぐに宮古小学校に避難**

当日は自宅にいました。主人の母と3人暮らしですけど、おばあちゃんは病院に行ってて、家に主人と2人だけだった。

揺れました。放送がありました。主人は、「俺は分団長だから船場（閉伊川の下流部左岸にある管内の水門）に行かねばなんね」って、私1人残された。近所の人たちが、「宮古小学校に逃げましょう、逃げましょう」って言ったんだけど、おばあちゃんが心配で行かれない。近所の人が「おばあちゃんのところ、車で送って行くから」と言ってくれた。車で佐藤クリニック（保久田4）まで送ってくれる途中で運よくおばあちゃんに会ったんです。そこで車を降りておばあちゃんと2人宮古小学校に避難したんです。だいぶ早い時間帯で避難しましたので、波も見ていませんし、なんにも怖い思いをしていませんね。おかげさまで。

近所の人の話だと、すぐここの路地に軽トラックが止まっていて、ラジオが津波警報ではなくて、「大津波警報が発令されました」というニュースを流していたというんです。津波警報ならばこの辺までくることはないだろうけど、「大津波警報って言うから宮古小学校に避難しましょう」って、逃げたんですね。もし家に帰ってきて大事なものを見つけたりしていたら、危なかったかもしれませんけど、ほんとにバックひとつ。自分の財布とか通帳とかハンコぐらいを入れましたけど、自分の分はね。

でも、大津波警報と聞きながらも、この辺までは来ないだろう、いったん逃げるけれども、警報が解除になって、また戻ってきて普通の生活ができるというつもりでいますんで、なんにも持って逃げないんですよね。戸締りはしたんですけど、ブレーカーを下げるという意識がなくて、何日かしてここに入れるようになってから下しましたね。ちょっとそこが甘かったですね。

宮古小学校には避難者が千人位いて、とりあえず体育館に入った。くっつくほどという状態ではありませんでしたが、毛布は2人で1枚だった。その夜は子どもとお年寄り優先に、レタスの入ったスープが出ました。中村屋さんのせんべいをいただいて、嬉しかった。

次の日から30人ぐらいずつ教室に入って、私たちの教室はたまたま大人だけだった。中にはペットを連れた人もいて、廊下を散歩させていた。学校は小学生たちを家に帰さないで、各教室に避難させていましたね。

ここの家の通りに入れるようになってから、毎日のように宮古小学校から通って片付け方をして、また宮古小学校に戻ってご飯をいただいて寝て、また次の朝ご飯を食べて、ラジオ体操やらお掃除やらいろいろやって、またここにきて片付け方をして、また夕方には宮小に…という生活をしていた。水道が復旧して、電気がついたので帰ってきた。4月12日、ちょうど1か月ですね。

家の1階は全滅ですね。神棚は大丈夫でした。寝室は2階でしたので、布団や衣類は大丈夫でしたけど、1階の電化製品は全部駄目ですものね。洗濯機、冷蔵庫、テレビから、車もだめでしたね。

この辺りは1・9メートル浸水して、通りの電柱にしばらく水の跡がありました。

**(2) 斎藤 仁司さんの話** 昭和27（1952）年生
大通1 第二分団長、大通1丁目第一町内会会長（2015～）
平成26（2014）年8月12日、ご自宅で伺う。

**管内の第二分団屯所は被災・第三分団で活動**

地震があってすぐに向町にある第二分団の屯所に行き、分団員5人とポンプ車で鉄橋の横の水門（閉伊川の下流部左岸）に行って、水門を閉めたんです。2人は家が心配で帰ったので、最終的には3人で警戒していた。そこで事件が起こるんですね。副分団長が流されたんです。彼はビデオで撮影していたので鉄橋方面だけを見ていたんですよ。ところが、だんだん水嵩が増してきて、津波が押し寄せてきたので、ポンプ車を移動させなきゃあだめだと思って、私の弟、斎藤部長にポンプ車の移動を命令した。まず弟が、そして私が水門の上から降りたんです。そのときに、副分団長（安倍主税さん）が「アッ！」という声を出した。「なんだ！」って見たら、もうすぐそこに黒い波が来ていて、ザッーと水をかぶった。慌てて水をザブザブとかきわけて、ぐるりと

回って、線路の上にあがって私と弟2人は助かった。

副分団長はビデオを撮っていて、遅くなったために流されてしまった。姿が見えなくなり、附近を捜索したところ、瓦礫の下に埋まっているのが見えた。助けに行こうにも、瓦礫に阻まれてそばに行くこともできない。「待ってろ！」と声をかけるだけでどうしようもなかった。

その時、近くの家の2階から、「助けて！」と叫ぶ女性の声がして、警察官が我々2人の近くに来た。そこで、その警察官に無線で消防署に連絡してもらった。消防署がゴムボートを持ってきて、副分団長は瓦礫の中から助けられた。もし、警察官が来なかったら時間がかかって、低体温になっていた。水が引けてあとから見たら、そこはそんなに深くない、低いところだった。

私は線路を歩いて市街地に戻り、宮古小学校に行った。家族の無事を確認して、そのまま宮古小学校の隣にある第三分団（横町3）に行った。

第二分団の屯所は、船が建物を破壊しながらぶつかって来て、壊滅状態だったので、私はその後、第三分団にお世話になった。赤沼分団長に「いらせてくれ。第三分団屯所にいれば情報が早いから、俺たちの第二分団員もなにかあったら来てくれると思う」としゃべって、1か月くらい第三分団に詰めていました。2階のコミュニティーは避難のお年寄りが泊まっていたので、分団員は座布団を集めて1階の屯所で寝ました。

第三分団長さんが「斎藤君、遺体捜索に行くべ」って、次の日から何回か、向町の家の中の遺体捜索をやったんですよ。やっぱり入って行けばあるんですよ、ご遺体が。見つかると、泥をとって顔を洗って確認して、管内でわかる人は名前と状況や損傷などを書類に書いた。流されてきた人もいた。電話をすると市役所のリサイクル車が引き取りに来てくれるので、ご遺体を毛布にくるんで両端を縛って車に乗せた。昔、火事現場で怪我人やご遺体を運んだことがあったが、普段は怖がりなのに、分団の半纏を着ているとなぜか冷静になれた。

震災後はこの町内でも家を解体してアパートにするなど、だいぶ様子が変わり、震災前よりも世帯数が増えた。不満があっても、お互いの助け合いで、絆が深まりいろんな意味で親しくなったように感じています。

### (3) 太田 昭彦さんの話　昭和42（1967）年生

大通2丁目　㈲太田屋肉店代表取締役

平成26（2014）年11月12日、本店事務所で伺う。

**3つの店舗を見回って、本店3階に避難**

太田屋肉店は、大通2丁目の本店と魚菜市場店で肉店を、そして焼肉レストラン「焼肉モリモリ」（大通3）の3か所で営業しています。

3月11日は千徳の自宅から魚菜市場店に向う途中で地震にあいました。すごい揺れだった。魚菜市場店は揚げ物をやっていますから、これはやばいなと思って、急いで魚菜市場店に行きました。案の定、店では油がすごくこぼれていた。まず従業員に怪我がなかったかどうか確認しました。電気が消えて、水道も止まっていたんですが、「できる範囲で掃除をしましょう」とみんなに言って、車で本店に行きました。

本店も電気が消えて、従業員たちは外に出ていました。次に近くにある焼肉モリモリに行くと、皿などが落ちて壊れていた。店長に、「電気が復旧したら、予約のお客さんがくるだろうから、片付けて準備しておきましょう」と言って、本店に戻り店を閉めました。それからまた魚菜市場店に行ったのですが。その時はもう渋滞していたので、車では時間がかかると思い、自転車で行きました。そして、市場店を閉めて、本店に戻ってきました。

その時、大通1丁目の丸福さん（魚店）辺りに波というか瓦礫を運んできた水がガァーと押し寄せてきました。本店の前に車を置いてありましたから、車で逃げようとしたら、3階のベランダから、「早く上に逃げて来い！」という声がかかり、本店の3階に逃げたんです。3階には従業員や近所の人たちが避難していました。下の道路に人はいなかったけど、車に乗っている人が流されてゆくのが見えました。みんなで、「がんばれ、がんばれ」と大声で叫んで声をかけました。

水が引けたのは9時くらいだったと思います。千徳の家族も心配だったので、家まで歩いて帰りました。家族は全員無事でした。停電はしていましたけど、水はチョロチョロですが、出ていたので、ペットボトルやいろんな物にいっぱい入れて、本店に持ってきました。

後日、焼肉モリモリの店長も逃げて無事だったことがわかり、従業員は本店も魚菜市場店も全員無事でした。浸水は本店が1メートル80センチ、モリモリは1メートル60センチ、冷蔵庫のある倉庫は2メートルでした。

**店の復興**

次の日は魚菜市場に行って、魚菜市場のメンバーと炊き出しをしました。魚菜市場店はすぐに電気が通ったので、1週間くらいで営業を再開できたと思う。本店の中は泥だらけになっていて、従業員たちで2日目、3日目あたりから、店の泥出しをしました。冷蔵庫など全部壊れましたので、会社の縮小を考えるしかないなと思いましたね。

水が出ないことには掃除もできないんですが、とりあえず泥や物を全部出して片付けてから、各メーカーさんに連絡しました。うちの場合は車も流されたので、仕入れ業者さんに商品を運んできてもらいました。いろいろなところに協力してもらって、1か月後から動き始めて、3か月以内で本格的に再開できたという感じですね。モリモリは10月1日にオープンしました。

本店は会社の資金で直すしかなかった。できる範囲でやりましたので、店舗までは修復できませんでした。補助金は遅かった。グループ補助金は1年後、第3次か第4次の時に、かかった金額の大きなものだけ申請できました。食肉の組合が協力的で、震災直後1年ぐらいの間、2トン冷凍車を無料で借りることができたのが、とても有難かった。支援は今だに継続しています。沿岸被災地域の牛肉販売促進のために年2回合計100万円の補助金が出るので、それで牛肉の売り出しをかけたりしています。不足器材に対しての寄付もいただいています。

1、2年は復興で逆に震災前以上の売り上げがありましたが、今は落ち着いて通常に戻った感じです。

**ライブハウスを建てる**

震災後、札幌のライブハウスの社長や東京からの支援者が支援物資を持ってきてくれました。バンドの人たちから、「他所で被災地の話をしても温度差があって、わかってもらえない」「ライブをする場所があれば、ライブに来た人たちが被災地を見に来るきっかけにもなる」と言われて、とりあえず私の家の土地（大通2丁目）にライブハウスを建てた。震災前、その場所にはテナントが入っていた建物があったんですが、津波で全壊したので解体して、その跡地に、私が借金して建てたんです。器材などは全部支援でもらった物で完成させることができました。友達、先輩、後輩などの関係者が集まってきて、月に7本ぐらい公演しています。最初の1、2年目は取材もたくさん来ました。

「東北ライブハウス大作戦」というプロジェクトの宮古の代表をしています。それは東北三陸沖海岸にライブハウスを建設して、バンドやミュージシャンが被災地を訪れることで復興への気持ちを広げていくことを目的にしたプロジェクトです。

## (4) 宮ヶ崎 英治さん　昭和34（1959）年生　と松崎 和夫さん　昭和26（1951）年生　の話

大通2丁目　太田屋肉店従業員

平成26（2014）年11月19日、本店内で伺う。

**田老で津波を見て市街地へ**

**宮ヶ崎さん**　久慈に仕入れに行ってたんですよ。その帰り道の田老で地震にあって、2トン車に荷物を積んでいたからそんなに揺れた感じはなかったけど、ちょっと尋常じゃあないと思った。第1波が築地の下り坂で白い波を立てて上がったところが見えた。対向車を避けながら急いで本店まで来た。

**松崎さん**　地震のとき、本店にお客さんはいなかった。かなり揺れたのですぐ外に出た。

**宮ヶ崎さん**　5分か10分くらい経っていたかな、店の前で荷物を降ろそうとしたら、最初水が下の方に流れてきて、それから津波というか

渦を巻いてきたんです。これは「ヤバイぞ」と言って、そこら中に、「水が来た、来た！逃げろ！」って騒いで、みんなに声をかけて3階に上がって様子を見た。

**松崎さん**　2トン車から荷物を降ろしていたら絶対危なかった。紙一重だった。

**宮ヶ崎さん**　仕入れた物を冷蔵庫の中に入れていたら、津波にあっていたと思う。俺が外にいて、「上さ、あがれ」って言わなかったらみんな、ずぶ濡れになっていた。まさかね、ここに水が来ても足が隠れるくらいかなと思っていた。水はすごい勢いだった。渦を巻いていて、ごみが回るような感じだった。

**松崎さん**　通りの向こうから、分団の人が「堤防越えた！」って声を出して逃げてきた。

**宮ヶ崎さん**　ベランダから下を歩いていた何人かに「上さ、あがれ！」って声をかけた。車に乗って流されて行く人も見えた。3階に上がったのは会社の会長、社長、同僚の他に藤田さんと分団員がもう1人、あと夫婦が2組だったな。全部で10人か12人くらいいたかな。

**松崎さん**　会社の3階があってよかったな。店のトラックが流されて、ここの浸水は1・5メートル。津波が引けたのは8時か9時だった。

**宮ヶ崎さん**　水が引けて、近所の人はみな帰った。社長が千徳の自宅から車を持ってきて、従業員たちを送って行った。俺の家は高浜、松崎さんは赤前でちょっと遠いし、夜瓦礫の中を歩くのは危ないから3階の休憩室に泊まることにした。

**松崎さん**　その夜は反射式のストーブが1台あるだけで、それも半分しか使えなかった、つけたり消したりしてね。炬燵もあったけど停電で使えなかった。毛布をかぶって寝た。食べる物がなくてお腹が空いた。店のシャッターは半分しか開けていなかったのに、あとで見たら津波で壊されて全部開いていた。

**朝早くに自宅に帰る**

**松崎さん**　次の日、夜が明けっか明けないうちに、赤前の家が心配だから、歩いて帰ろうと思った。

**宮ヶ崎さん**　家も心配だし、腹も減ったしな、水も飲みたかった。

**松崎さん**　ジャンパーも長靴もみんな車の中でしっちゃかめっちゃかになって、ヘドロの中だった。まだ津波の予兆があって、見ていると津波が来ているのがわかった。

**宮ヶ崎さん**　いつも車で行く浜通りではなく、歩いて小山田トンネルに行った。そこで、高浜小学校にも水が来て、被害がひどいと聞いて、ああ、うちもだめかなと思った。トンネルを通って山道を金浜地区に向かった。

**松崎さん**　トンネルを抜けて磯鶏の河南中学校に行った。学校の前のコンビニは開いていて、客が並んでらった。品物もなんぼかあった。

**宮ヶ崎さん**　途中河南中学校に寄ると息子がいた。先生から、娘はお母さんと一緒に帰ったと言うのを聞いて、2人は終りだな、でも息子だけでも助かったからよかったと思った。

**松崎さん**　分団の軽トラが止まっていたので、その荷台に乗せてもらった。救急のためあちこち回りながら6、7人が乗った。雪が降って寒かったので、歩きでは相当ひどい目にあったと思う。すげえ助かった。

**宮ヶ崎さん**　途中で松崎さんと別れて高浜に帰ると、周りは流されていた。家はチリ地震のときに高台に移転していたので、水は玄関前ぎりぎりのところで止まっていた。家の中から娘がちょこっと顔を出したのを見て、「あ、いた」って、ほっとした。中学3年生の娘は卒業式の練習で河南中学校にいたところに、妻が迎えさ行って、家に着いた時に津波が来たということだった。息子は在校生だったんで、中学校に1晩泊まった。母屋は助かったが、車や乾燥小屋が流されたので、やっぱり大変な被害だった。その後は電気も水道もなくて大変だった。高浜小学校の側の社会福祉協会（金浜老人福祉センター）まで30分くらいかけて歩いて、自衛隊の炊き出しを取りに行った。親戚や近所の家にも手伝いに行った。

　会社に来るにも足がない。普段は店のトラックで通勤していたけど、店の車は全滅だったし、ここで稼いでいる従業員の車も流された。と

りあえず車をどっかで手に入れるまでの1か月半くらいは、息子の自転車を借りたり、歩いたりして通勤した。

**松崎さん**　赤前に帰ると、家は2㍍近く水が入り、1階が浸水していた。家の前にはどこからか他所の家が流されて来ていた。次の日に自衛隊が捜索すると、その中から3人のご遺体が見つかった。

妻は崎山保育所の保育士なので家に帰れなかった。保育所が避難所になって、ずっと泊まりっぱなしだった。俺は3か所くらい、友人の家を回って寝泊まりしていた。自分で瓦礫の片付けをしていたが、あとで自衛隊が手伝ってくれたので助かった。会社でも毎日瓦礫の片付けをした。

**(5)　張間　重子さんの話**　昭和10（1935）年生

大通3丁目　魚元代表、昭和通りのおかみさんもてなしたい会員

平成26（2014）年11月21日、事務所で伺う。

**店の2階で夜を明かす**

地震が起きたときは店の休憩時間に入っていてね、びっくりして外に出たんですよ。すぐに孫のことを思って、宮古保育園（保久田1）に迎えに走ったの。帰って来る途中、近所の人が「ちょっと、おかみさん、津波が来る」って言うから、「ここまで来るわけないでしょ」なんて悠長に歩いてきたんです。

孫と2階で駅の電車を見ていたら、なんか水が来たのが見えたんです。津波とは全然思わなかった。なんだろう、おかしいなと思っているうちに、うちの板長が騒いで、「おかみさん津波が来たよ」って言うの。大通に面した個室に行ってみたらね、船や車が流されて来てるわけ。津波って遭ったことないし、この年になってもね。ピンとこなかったの。そしたらね、この前の通りも水が溢れて車も流れてきて外にも出れない。川の方からも溢れてきたんですよね。ここの店にも水が入ったけど、家は高くなっているので、床下浸水で済んだ。店の従業員はお昼が終って帰って、夜の人はまだ出てきていなかったから、よかったの。

ママ（孫の母親）が職場から保育園に子どもを迎えに行ったら、「おばあちゃんと行きましたよ」って言われて、水の中を濡れてここに帰ってきた。息子も勿論仕事で来れないわけよ。住まいは西町ですが、その夜は孫とママと3人でこの店の2階の休憩室で石油ストーブを焚いて1晩明かしたんですよ。なんの情報もない、ラジオも入らないしね。ただ夜が明けるのを待っているだけでした。

夜が明けて、水は引けたんだけど、家の前は黒いヘドロで大変でしたよ。事務所に水はチョロとしか入らなかったけど、機械類は下にあったので水をかぶって駄目になった。プロパンガスは、板長が地震のときすぐに十何本あるボンベの栓を止めたので、問題なく使えた。火を大切にする板長に感心しました。

**炊き出し**

停電になって、冷凍庫の中の物は全部駄目になると思った。中にあったご飯を蒸して、イクラとかウニなどを乗せて、いつも来てくれるお客さんや近くの人に持っていこうと、弁当をつくったの。ところがね、道路には瓦礫があって行けない。板長と従業員が歩いて届けてくれて、みなさんに喜ばれました。

それから宮古駅の三鉄さんに30何人分を持って行った。そしたら今度は、三鉄さんから炊き出しを頼まれてね。お米30㌔を持ってきて、炊く場所がないからやってくれということで、12日からすぐに仕出しをやりました。板長が昼の時間に合わせて朝から支度をして、毎日何十人分って数を作って、三鉄さんに取りに来てもらいました。最初の2、3日は食材があったけど、あとは何も入ってこない。おにぎりを作ったりして、目に見えない大変さがあったようです。板長が1人で1か月やってくれました。

お店は6月ごろまで再開できないと思っていたら、3月の末から4月に業者さんから「集まる場所がないから開けてくれ」って電話があった。電気が戻って、畳も汚れていませんでしたが、「材料がないし、まだ商売する状態じゃあない」と言うと、「食べ物はいらない、話をする場所があればいい」と言われて、4月7日に開けましたよ。店として

再開したのは5月に入ってからです。無我夢中でしたよ。

**お祓いのおかげ**

地震、津波がきても、家の中の物が何一つ動いていないの。あの揺れでも何一つ落ちなかった。不思議でした。以前から九州にいちご弁当のファンのお客さまで、祈祷をしてくださる方がいて、「宮古まで行ってあげますよ」と言われて、3月11日に来る予定だったんですが、あちらの都合で3月4日になった。4日に隅から隅まで、なにからなにまで、全部お祓いしていったの。そのお祓いの仕方が違う、迫力があるのね。そのお蔭か地震でなにも壊れない、津波で床下浸水ですんだのではないかと思っています。

震災後はいざとなったときの人間の強さを感じましたね。1年経ってみてから思いましたね。やっぱり人間って素晴らしい、強いわ。みなさんの強さが見えたもの、負けていられない、やらなきゃあならない、やるしかないということ感じましたね。

**(6) 本田 英子さんの話** 昭和33（1958）年生

鍬ヶ崎下町 ビューティサロンヒデ（震災後、大通4丁目で営業）

平成27（2015）年4月26日、大通店内で伺う。

**鍬ヶ崎で被災**

3月11日震災の日まで鍬ヶ崎の下町（しもまち）で母親と祖母の代からの美容院をやっていましたが、被災して店舗も家もなくなり、大通4丁目に店舗を見つけて2011年5月に再開したんです。

その日は3時に近所のお母さんの予約が入っていた。ちょうど母と2人でコーヒーを飲んでいる時に、もうすごく揺れて、「これは何のことだろう」って外に出たら、外も異常な雰囲気だったわけ。どこかの土蔵が崩れたみたいで土煙が上がっているし、これは大事だと思っていたら、大津波警報の放送が流れた。じゃあ、「逃げる準備をしよう」って、店を閉めたり、ガスを止めたり、私はトイレに行ったりなんかしたので、出るのが遅くなった。外に出た母が、「英子、なにやっている の、早くしないとはしば（OA機器販売・鍬ヶ崎仲町）のところに波打っている」って呼ばれて、びっくりして出て行ったら、水道が破裂して噴水みたいになっていました。

同じころ、近所のおばあちゃんと娘さんが、真っ直ぐに鍬ヶ崎小学校（熊野町）の避難道路の方に向かって行った。私はその時点で、波は清水橋川を上るということを聞いてたから、そっちは無理だなと思った。近所の床屋さんのところから、左側に曲がると、鍬ヶ崎小学校に近い道路があるんですよ。そっちに行こうと、床屋さんのところを曲がった途端に、菱屋さんの方から川を上った波がドッーと来た。母が、「波が足まで来た！」って。びっくりして、母を引っ張って逃げて、金勢さまに上がったんですよ。それで私たちは助かったんです。

**測候所から休暇村へ移動**

45号線の宮古測候所（鍬ヶ崎下町2）のところから鍬ヶ崎を見たら、すごかった。どんどん、どんどん波が入ってきて、家同士がギコギコって音がするの。雪は降る、ちょこちょこ地震は来るはで、寒くなってきたから、梅翁寺さん（中里団地）に避難したんです。

中でおにぎりを食べていると、8時頃だったかな、国民休暇村（休暇村陸中宮古・崎山姉ヶ崎）のバスが迎えに来て、休暇村に移動したんですよ。

私たち親子が避難所にいなかったので、みんなは私たちが津波にやられたと思っていたんですね。鍬ヶ崎小学校の避難所にお昼のお弁当をもらいに行ったら、生きていることがわかって、「おめえたち、だめだがよう、自衛隊の人たちに、ここは同級生の家だから、2人を探してくれって言ったんだ」と言われました。

友だちと一緒に家を見に行ったんですが、45号線の山の手から家は見えたけど、しぶきがあがっているような感じで、すぐに津波警報が出るし、とても家の方に下りていくことはできなかった。

休暇村は部屋と布団に余裕があったけど、避難所ではないから、だんだん食べ物がなくなってきて、売店の物もすぐに売り切れてしまっ

た。休暇村には4日くらいいて、それから田の神の従業員さん、親戚や友人の家にお世話になった。その後は宮町にアパートを借りて、8月のお盆のころには鍬ヶ崎小学校の仮設に入ることができました。毎日鍬ヶ崎の仮設からここにバスで通っています。

**無事だった近所の人たち**

3時に予約していた近所のお母さんは、出かける準備をしているところに地震。お嫁さんが、あ、おばあちゃんと思って、迎えに行ったら、お母さんは、「ヒデさんに予約があるから、一緒に行かれない」って。お嫁さんが「おばあちゃん、なに言っているの」って、無理くり車に乗っけて、避難したそうです。

私たちと同じころに鍬ヶ崎小学校に向かった親子は、波が来たところを、たまたま車で来た若い男性に助けられた。男性は自分の車を捨てて、2人を高いところに連れて行って、引き波の時に学校の避難所に助けを求めに行った、それで2人は救助されたそうです。

**大通で店舗を見つけて再開**

ここ大通で、震災後に廃業した美容室が見つかり、5月31日に仕事を再開しました。ここも水が入ったので、中の壁紙を張り替えたんですが、私が被災した場所じゃないので、工事費などの援助は認められなかったんです。場所を移動しての再開に補助金は出ない。一般の義援金だけでした。壁を張り替えたり店の中の修理はすべて美容師仲間が手伝ってくれた。美容の道具も仲間の支援で揃えた。岩手県の美容師組合から沿岸地域に物資の支援がきたので助かりましたが、こまごました物をそろえるのは大変でした。

鍬ヶ崎の元の家での復興はまだ先ですし、その間の働く場所はどうしたらいいんでしょうね。仕事をしてこそ復興に繋がるのに、店舗がなければ仕事にならない。補助金の制度がよくわかりませんね。

お馴染みさんが鍬ヶ崎から来てくれるし、この町内の方も来てくださるので、早くに店を再開してよかったと思っています。落ち着いたら鍬ヶ崎の元の場所で美容院を再開するつもりで、グループ補助金に取り組んでいるけど、どうなるんでしょう。

毎日ここの店にも出勤していた母が。昨年（２０１４年）３月６日に亡くなりました。骨粗鬆症で点滴をしに、そして胸椎圧迫骨折になってギプスをして病院通いをしていましたが、だんだんだんだん弱くなって、宮古病院に入院して1週間で亡くなりました。あっという間でした。原発不明の癌という診断でしたが、きっとストレスがあったんでしょうね。鍬ヶ崎に帰る日を楽しみにしてたんですがね、残念でしかたない。仮設暮らしもまた延びて5年になる。オリンピックより復興を優先して欲しいですね。

## 4　中央通商店街

中央通商店街は末広通りに続き、黒田町の通りに折れる角から市役所前までの間にある。その通りの下には山口川が流れている。昭和29年9月に蓋かけ工事が始まり、昭和34（１９５９）年にアスファルト舗装がなされ、歩道のゆったりとした通りが造られた。商店街は振興組合を組織し、コミュニティ施設「おでんせプラザ」を設置している。住所は新川町（本章1）本町、新町（本章7）、向町（本章2）、大通1丁目（本章3）にあり、それぞれに町内会・自治会がある。住まいを他所にしている場合もある。

本町の交差点にある市役所前歩道橋は、テレビで何回も映像が写しだされたが、2・3㍍の浸水被害を受けた。

中央通りは堤防を越え市役所方面から来る波、その波が本町の山にぶつかって戻る波、閉伊川・向町から来る波、さらに下に流れる山口川から溢れる水で複数の方向からの水が押し寄せた。多くの家屋、店舗の1階が壊滅状態となった。そのため震災後に閉店した店、移転した店もある。

本町は慶長16（１６１１）年の津波後の南部藩主・南部利直の町割で最初にできた町で新町とともに最も早く栄えた。宮古の商業の中心、交通の拠点であったが、昭和9（１９３４）年に山田線開通をきっか

けに街の中心地が末広町に移った。一部に蔵造りの古い商店や銀行などが残されている。町内会は本町1、2番の一部と新町1、3番の一部から成っている。

本町の震災前、平成23（2011）年3月1日現在の世帯数は58、人口は132名（男63、女69）であった。

震災後、平成23（2011）年8月は55世帯、人口は127名（男61、女66）、平成27（2015）年3月1日現在の世帯数は52、人口は110名（男51、女59）である。商店は大きな被害を受けているが、数字から見る限り世帯数・人口の増減は少ないようである。

＊平成27（2015）年に災害公営住宅の入居により世帯数、人口ともに増加している。

**本町**

**(1) 小山 由美子さんの話** 昭和47（1972）年生

本町1 ローソン宮古本町店店長

平成27（2015）年7月26日、本町店事務所で伺う。

**地震から30分以内に避難**

ここはもともと地盤が強いせいか、揺れが弱いところなんですね。大きい地震だったのですが、店内の物が落ちたりすることは一切なくて。ただ停電してしまったし、尋常の揺れではなかったので、店を閉めようということになった。オーナーともローソンの本部とも連絡が取れなかったのですが、独自の判断で動いたんです。

5分間くらいは、戻ってきたらすぐに開けられるようにと、商品の片付けをやっていたんです。最初、防災無線で津波は3㍍と言っていたのが、6㍍になり、10㍍となったので、津波は絶対に来ると思いましたね。小さい頃から聞いていた話で、「地震から30分後に津波がくるよ」っていうのがあったので、すごく時計は見てたんですよ。店を出たのが3時ちょっと過ぎだったのを覚えています。鍵をかけて張り紙して、戻ってくる気だったんです。

ちょうど私たちが出たときに、店の前は渋滞してましたし、多分みなさん、中央公民館かどこかに避難されていたのだと思いますけど、歩いていく方もいました。私たちは、従業員の車もあったんですが、渋滞で時間がかかると思ったので歩いて逃げることにした。商店街の方たちはシャッターを閉めようかどうしようか、立ち話をしている状態でした。百年堂（本町1、古本屋、ゲームソフトなどのリサイクルショップ）に見慣れた子どもたちがいたんで、「津波が来ちゃうよ、早く逃げな」と言いながら、最初は常安寺の方に行ったんです。まだ余震がすごかったので、「墓石が倒れるんじゃあないの」と言って、宮古小学校へ行きました。その間にうちの担当のスパーバイザーの車に偶然出会って、「逃げるんだよ」と言われて、「逃げる、逃げる」と言って、逃げたんですね。

宮古小学校に着いた辺りで、「水が来た、水が来た」と言うのが聞こえてきたんで、それでもっと高いところに逃げたんですよ。小沢の上の方に集会場みたいな所があって、そこにみなさん結構いたんですよ。その日は小沢の山の上の普通の家庭のお家に泊めていただいた。従業員2人と常安寺の保育園から連れてきたお子さんと4人でした。次の日は山を下りまして、一緒にいた従業員が、旦那さんの実家がすぐ近くだから行こうということになり、そこ（西町）に連れて行ってもらい、そこから車で津軽石の実家まで送ってもらいました。

**店を再開**

藤原のアパートにもどり、17日か、18日あたりにここの片付けに来ると、水は1階の天井まで来ていて、中は洗濯機で回したようにぐしゃぐしゃになっていました。思ったより早く工事が進んで、販売する物も限られていましたけど、4月24日に24時間体制で再開しました。ボランティアの方が結構来てくださったのですが、大学生に、「なにもないじゃん」って言われて、悲しい思いもしました。お盆にはお花を売ることもできて、気がついたら「あれよあれよ」という感じですね。4年経ってだいぶ復興工事の方たちが減ったんですけど、それでも売り上げと客数は震災前とそれ程変わらず、一安心しています。

夜勤だったため自宅にいた従業員が1人、赤前で被害にあっています。

**災害に備える**

震災後、ローソン本部の政策なんですけど、津波が浸水した店舗には緊急地震速報を知らせるラジオが設置されました。緊急地震速報が発令されると、すぐに鳴るので、それで「逃げろ」ということになる。防災の日や節目、節目にNTTの災害伝言ダイヤル（電話171）の訓練をやるようになりました。ストアコンピューターに、「訓練です。今大きい地震発生しました。伝言ダイヤルを入れてください」と、緊急情報が流れてくるので、店では、「全員無事です。今避難します」というようなことを答えるんです。誰でもできるようにしています。会社が懐中電灯などが入っている避難グッズのリュックを用意してくれました。

**(2) 高岩千幹（ちから）さんの話** 昭和15（1940）年生

本町1 コーヒーとお食事の店たかしち（震災後向町2に移転・営業）

平成26（2014）年11月19日、店内で伺う。

**2階のベランダから隣、そしてまた隣の屋根に**

震災までは本町1丁目の明治安田生命宮古の隣に店があった。宮古初（1967年開業）の喫茶店として『純喫茶保存協会110軒』に紹介されています。

後藤医院（大通1丁目）の帰り道、多分あお空さんの辺りで、ああ、地震かなと思った。歩いているときには、そんなに揺れは感じなかった。店に帰って来てちょっとしたら、2回目の大きな地震があって、店にいたお客さんを帰した。女房の姉さんの娘が「大きな地震だったから、みんなが津波が来るって騒いでる。避難しよう」と、女房とお義姉さんを車で長沢の義姉の家に連れて行った。私はまさか波が堤防を越えて来ると思わなかったし、息子の嫁さんも残ると言って、「治まるまで待ってっか」って、2人で店にいたんです。

お客さんも帰したので、安心して調理場にいたんですけど、表の方が騒がしくなってね、ガターンと音がした。店の前のドアだけ開けてあって、ちらっと見たらね、車が横向きになったり後ろ向きになったりして流されていた。すぐ店にも水がバッーと入ってきて、「こりゃあ、大変だー」って2階に上がった。2階の床まで水がバァーと来て、窓から物干しに出た。それまでは全然、まさかこうなるとは思ってもいなかった。

家は90年以上経っているから、崩れるのではないかと心配になり、物干しから隣のぶんぐの小成さん（本町1）の屋根に上って、またその隣のリビングアップ高岩さんの屋根に上ったんです。家と家の間はあまり幅がなく、高さも同じくらいなので、移れる距離だった。寒さなんて感じなかった。びっくりして、よくわかんなかったんです。水は3㍍くらい来ていたと思う。屋根の上には高岩さんの店長さん、奥さん、店員さんなんかも上ってきて、6名位いたかな。

古い家が波で崩れて流されるのが見えた。高岩さんの店長さんが、流されてきた若い人を引き上げて助けた。30歳位の男性で、もうすっかりびしょ濡れで「寒い、寒い」って言ってね、私のウェアを貸してあげた。街路樹につかまっている人もいました。

水が引けた夕方5時ころかな、水につかって歩いている人がいた。ちょうど引き波があるころで、「危ないから行かないほうがいい」と言ったんだけど、「お母が待っているから、行かねば…」と、衣類だかなんかを頭に乗せて歩いて行った。車が流されて、駐車場などに押し寄せてぐしゃぐしゃになっていた。

2時間くらい屋根の上にいて、水が引いてから自宅の2階に戻った。電気がつかないから、下に行こうにも行かれない。押し入れは水が上がってなかったから、布団を出して、暗い2階で1晩過ごした。次の朝、後ろの明治生命の駐車場を伝って家の前に出て、周りがどうなっているのか見ることができたんです。

**新たな出発**

次の日から、長沢のお義姉さんの家で1か月くらい過ごした。その後、私の実家のある崎山に倉庫を借りて1か月くらい、それから、貸してあった崎山の家の人に出てもらって、そこで暮らした。車は東屋駐車場にあって無事だった。車で片付けに通っていたけど、そのうちにガソリンがなくなってね、自転車を買って、ここの店を再開するために一生懸命通いました。

6月ころ、地主さんと話をしているうちに、「向いが流されて空地になっているからここでやったら」と言われて、今営業している向町に新しく建てて再開することにした。本当はね、お店をやめようと思っていたんだけど、「街に出てきても休むところがないから早く店を再開してくれ」っていうお馴染みさんが結構いたので、やらなきゃあいけないのかなあと思った。それからは無我夢中、借金して頑張りましたよ。震災後すぐだったから、まだそんなに建築材料が不足ということもなかった。新しく建てるために、コンクリートを入れて地盤を改良したので余分な金も使った。その年の12月初めに再開する予定だったのが、延びて翌年1月になってからオープンした。

前の店は古風な造りだった。壁に旅の絵描きさんが描いてくれた絵が掛っている。店は何回か改装したけど、絵にある建物は30年位前のものと思う。同じような感じの店にしたかったけど、時間がなくて設計屋さんに任せきりで、スペースも以前の店の半分になりました。

たくさんの方のご支援、ご声援のお蔭で店を再開することができました。お馴染みさんも喜んでくれて、やってよかったと思っている。息子も一緒にやってくれることになり、息子夫婦と私たち夫婦で頑張っています。ただ、これから市役所の移転もあるし、この街並みがどういう風に変わるのか、今のところそれが心配です。

### (3) 高岩 久美子さんの話　昭和51（1976）年生

コーヒーとお食事の店たかしち

平成27（2015）年7月25日、店内で伺う。

**震えながら屋根に**

もう怖くて腰がぬけたようになった。お義父さんが後ろから私の服をつかんで支えてくれて、屋根から屋根に移る時には、私のペースに合わせてくれた。2つ目の高岩さんの屋根に移る時には、高岩さんが手を差し出してくれた。気持ちは行こうと思っていても、体がついていかなくて怖かったです。

信用金庫の人たちが屋上にいるのが見えた。木にしがみついている人が、男性のようだったけど、「助けて、助けて」と叫ぶ声が聞こえたり、前の金魚屋さん（向町2・現在の店）が、ガタガタガタって崩れたりしたけど、屋根の上のことはあまり記憶に残っていないんです。家の2階に戻っても、すごく寒くて怖くて、ほんの2、3歩のところにあるトイレにも行けなかった。それは覚えています。

### (4) 高橋 文中さんの話　昭和31（1956）年生

本町1　㈱高京代表取締役社長（震災後栄町1に移転・営業）

平成26（2014）年11月19日、駅前店内で伺う。

**流されて来た女性を救助**

震災まで本店は本町1丁目にありまして、家内はその2階事務所で、前日の売り上げ計算をしていました。私は（当時取締役専務）別棟の蔵を利用した倉庫で仕入れた商品の値札付け作業をしようとしていた。正にその時グラグラときたんです。あまりも揺れが大きかったので、一緒にいた従業員2人と裏庭に出た。地震がおさまってから店内を見回って、店の前の道路に出たら、店頭の壁が崩れていました。お客様の安全を確認した後、シャッターを閉めてすぐに従業員を帰しました。

津波警報が鳴って、予想される津波の高さは3㍍からすぐ6㍍となったが、「まさかここまで来ないよな」と兄（当時の社長）と話していたら、中央通の商店街の皆さんが、店の前を避難して行くわけですよ。間もなく大津波警報が出て、河口そばの愛宕地区の知り合いの奥さんが、「津波が来てるよ！」って叫びながら車で逃げて来たんです。ここまでは来ないと思っていたら、中央通の下を流れている川から黒い水がブクブクと湧いて溢れ出してきたんです。これはまずいと思って、私は85

歳（当時）の母と家内がいる2階に上がったんです。それから水がググッーと上がってきて、店の表の道路側と裏側の両方から入ってきた。敷地の裏が山になっているので、水がそこにあたって家に入ってきたんだと思います。2階にいたのは私、母親、妻、従業員の女性、お手伝いさんの5名でした。

しばらくすると、従業員が泥水でいっぱいになった店から、「助けて」というかすかな声を聞きつけて、「下に誰かいるみたいです」って言うので、階段中ほどから下を見たら、確かにプールのようになった真っ暗な店の中に誰かがいるんですよ。店舗の造りは3段階になっていて、30センチずつ高くなっているので、浸水は90センチ、1メートル20センチ、1メートル50センチという感じで、ちょうど90センチくらいのところだった。私はジャンパーに靴のままドボンと水の中に入り、瓦礫をかき分けながら中央のところまで行き、水の中から40代の女性を引き上げました。

その女性は田老に帰る途中、市役所の辺りで津波が来て、ここまで流されて来たということだった。店のシャッターが津波で壊れたので、その間からうまく入ったみたいです。1時間以上水につかっていたので、かなり憔悴していましたが、お元気になられて1か月後にお礼に来てくれました。

津波が引いた後はプロパンが心配だったので、店内を見て回った。店の前には車が2台も重なっていてありえない光景でした。

夜になって落ち着いてから、このままでは寒いし、母や兄たちにも着替えがないと困ると思って、家内と交通規制の中なんとか板屋の自宅に行きました。私の車はたまたま上の方の駐車場にあり無事だったんです。歩いて避難している人たちがいて、まるで映像でみる戦時中のような感じでした。着替えや食べ物、ろうそくなどを持って再び店に戻ってきて、また夜の9時過ぎに家に帰りました。

**店の復興**

翌朝5時に出てくると、店内はぐしゃぐしゃになっていました。とりあえずできることをやろうと思って、2階が無事だったので、あまり被害のなかった品物を2階に上げましたが、商品の8～9割は駄目になっていました。入学の時期で中学、高校の制服、小学校のウェアなど一番在庫が入っていた時でした。4、5日したら従業員も集まって来てくれて、まずは掃除をしてなんとか場所を作りました。

先代や先々代からアイオン台風の浸水は聞いていたので、そのイメージがあって、各売り場の従業員に、「商品は台の上に上げなさい」と言ったのですが、台ごと流されていました。

一番ラッキーだったのは売掛の台帳が無事だったんです。店舗の一番奥にあった帳場のテーブルが津波でバーンと壁にくっつけられて、その中に汚れてはいたんですが、全部ありました。津波にあったお客さまが入金してくださったり、ご家族が被災された方も、お支払いに来てくださったりで、それは本当に助けられましたね。

予約で仕入れた制服も流されたので、同業者と中学、高校に行きまして納品を5月スタートにしてもらい、それまでになんとか新しい商品を取り寄せました。失った商品にはなんの保障もないので、すべて自費で再仕入れをしました。借金して仕入れなければいけないのでつかったです。補助金は店舗の再建にかかる費用の4分の3は出ますが、商品や店内の什器には出ないんです。10分の9の補助金が出る第一次産業の漁業、農業の方々は恵まれていますね。

うちはたまたま支店が2か所残りまして、縮小もしましたので、なんとかなりました。3月31日に本店、支店の全従業員を集めて、了解してもらって、半数以上を解雇しました。店は5月初旬に制服が届いてから本格的に再開しました。新たに栄町に店を借りて、6月14日の父の命日に本店として開店し、再雇用の従業員と共に新たな出発でした。

**明治19年建造の蔵を解体**

大震災から1か月位して、本町の本店を見てもらったら、津波で柱が折れて壊すしかないと言われました。取りあえず3、4、5月は後始末しなければならなかったので、後日解体の決断をしました。店内の

一番古い蔵は、明治19（１８８６）年に建てられた物だから、１２０年ぐらい経っています。

７月か８月に更地になったところを県から「売ってくれないか」という話がありました。本当は売らずに貸したかったんですけれども、災害公営住宅を建てるということで、仮設に暮らす方たちのお役に立てればと思い、兄と相談して手ばなすことにしました。何度も県との交渉があったんですが、県もなかなかの強気で…。もう創業地に戻ることはないと思う。生まれ育ったところですが、住まいが別にあったから気持ちに余裕があって、決心できたのだと思います。再来年の春ぐらいに40所帯くらいの災害公営住宅になります（２０１５年11月）。

**難しい判断**

川と海岸がこんなに近いということは、震災後に実感しました。ましてや道路の下に川が流れていることは忘れていますからね。

私は母も家内もいる２階に上がって助かったんですが、兄は坂の上にある東屋さんに逃げたんです。店の前の通りは結構な坂になっていて、車で逃げないで歩いて東屋さんまでくればセーフでした。今考えると２階で助かったのは結果論で、陸前高田のように３階までなぎ倒されるようなところもあるから、逃げた兄の方が正しかったと思います。でも、その判断は瞬時には無理でした。

従業員も早くに帰したので全員無事でしたが、愛宕地区、南町地区、向町地区に帰る人は途中で津波に呑まれる危険もあり、微妙なところでした。時間的に津波の来る前だったので助かったが、これも結果論で、返さないで店から高台に逃げるのが正解だったかもしれない。ただ、商品を２階に上げる作業をさせていたらアウトだったから、物を優先させなくてよかったと思っています。

**ラクビーで地域のボランティア**

宮古ラクビースクールで小学生の指導員をやっていました。当時の監督さんは分団の半纏を着て、愛宕から鍬ヶ崎に警備に行ったんですけど、津波に呑まれて行方不明のまま、まだ見つかっていないんです。５月、６月までは仕事がいっぱい、いっぱいで、気持ちに余裕がありませんでした。

震災後、スクールが立ち消えになっていたんですけど、暖かくなってきて、子供たちが待っているんじゃあないかなと思った。７月に指導員たちに集まってもらって、「私が代表を引き受けるから、みなさん協力してください」と言って、８月から再開しました。平成24（２０１２）年２月には静岡から、平成25（２０１３）年には埼玉から招待試合やいろいろなところからボールの支援など、有難いお話が次から次にきました。

私も子どもたちと一緒にラグビースクールをやってきたので、なんとか苦しみや悲しみを乗り越えられました。母親が津波で行方不明になってしまった兄弟の部員も元気にラクビーをやっています。弟はお母さんを亡くした年からラクビーを始めて、今年はキャプテンになって、本当に立派です。仕事だけだったらストレスが溜まって参っていただろう。今あるのも前監督のお蔭だと思っています。

**新町**

**⑸　熊谷　毅さんの話**　昭和44（１９６９）年生

新町２　宮古セントラルホテル熊安　㈲熊安旅館専務取締役

平成27（２０１５）年７月25日、ホテル内で伺う。

**ホテルの５階から通りを見て**

この近くにある事務所（倉庫）にいまして、揺れが大きかったので、すぐにホテルに戻りました。すでに停電になって、すべてが止まっていました。うちの従業員と出入り業者さんだけで、幸いお客様はいらっしゃらなかった。

大津波警報が出て避難をすることになり、全員フロントの後ろの事務所に集まってから上にあがった。うちの建物は９階までありますので、私は５階のバルコニーから外を見ていたんです。上の階にいた従業員が、津波の来るところを見たようで、「大変だ、本当にくるぞ」と

言いまして、まもなく本当に津波がきました。津波がダッーと来まして、ホテルの前が2㍍ぐらい浸水して、この辺り一帯がプール状態になりました。しばらくは上にいましたが、だいたい2時間ぐらいは浸水状態が続いていました。ここの浸水は1・5㍍ぐらいで、ロビーにシールが貼ってあります。

ホテルの西側に40～50代の女性が流されてきまして、「助けて」と言う声を聞きつけた従業員が、3人くらいかけつけて、ひさしの低くなっているところから引き上げて助けました。元気になるまでホテルの部屋で1週間くらい休んでもらいました。

水が引き始めたのは、だいたい日没で暗くなったあたり、6時ぐらいでした。だんだん、だんだん、ゆっくり、ゆっくりと引いて行って、引いた時は、もう真っ暗でした。下に様子を見に行って、だめだと思いました。停電していて真っ暗な状態でなにもできないので、取りあえず今晩は空いている客室に泊まろうということになり、従業員のほとんどが泊まりました。

**被害と復興**

ホテルは2か月間休業しました。客室の建物は鉄筋コンクリートなので修理もそれほどかからなかったんですが、食堂のある建物は鉄骨造りで、壁の中の空洞に水が入ったので、全部開けて掃除、修理し、壁と天井などの内装工事をしました。一部窓ガラスが割れたので、そこから書類などが流されましたが、中の物はだいたい残っていました。食堂の椅子などは修理しました。ただ、1階にあったコンピューターや電話交換機などの機械関係はほとんど駄目になりまして、全部処分しました。厨房の冷蔵庫は修理できるものは修理して、新品も入れて補いました。エアコンと給湯器は屋上にあったので無事でした。市役所で一部補助が認められて建物などの修復修繕に補助金をいただきました。

事務所（倉庫）は2㍍20㌢ぐらい浸水して、1階にあった物は全部駄目になりました。泥出しが大変だったので、ボランティアさんにお願いしました。

中央通の歩道に船が流れてきていましたね。ホテルの隣にあった古い建物は50年くらい経たっていまして、柱などが壊れたので全部解体しました。当日そこのお店の方々は避難されたようですが、女性従業員さんが1人水に浸かって亡くなったと聞いています。

1週間後に保久田のアパートに帰ってみたら、足元から30㌢くらいのところに水の跡が残っていました。

2か月後の5月下旬に、電気、ガス、エレベーター、水道関係が復旧してやっと仮営業という形で、取りあえず朝食なしの素泊まりで再開しました。9月あたりから通常に戻り、朝食を提供できるようになりました。

震災後は復旧工事や港湾関係のお客様が逆に増えて、震災前よりちょっと混んできているんですよ。今困っているのは人手不足ですね。震災後は社員が少なくなって、求人を出しているんですが、なかなか決まらない。人口は減少傾向であるようですけど、働く人が大幅に減っているとも思えない。おそらく求人件数が復興関係で増えているので、その関係で人が不足しているんじゃないですか。建設関係が一番足りないらしいですけれども、オリンピックでまた不足するんじゃないかと思っています。これからも人手が確保できればいいと思っています。

中央通は移転された方もいて更地になったところもあります。近くの小中学校の生徒さんが、地震や津波が来たときに一時的に避難できるという避難ビルの指定をいただきまして、玄関の前に〈津波シェルター〉のプレートを貼ってあります。

**大通1丁目**

**(6) 坂本 智子さんの話** 昭和33（1958）年生

大通1丁目　シューズコレクションさとう

（震災後向町3　宮古市中央通商店街振興組合事務局に勤務）

平成26（2014）年11月20日、組合事務所内で伺う。

**中央通商店街を往復して高台に避難**

中央通商店街にある実家のシューズコレクションさとう（大通1丁目）で、店番をしていました。母はキャトルの臨時店舗の店番に、父と弟は店の2階にいました。今まで経験したことのないようなひどい揺れで、電源が落ちましたので、シャッターを閉めることにしました。津波が来るだろうと思ったけど、正直言って、ここに来ると思っていないんです。「ちょっと大きいよね」と言うことで、駅の西の方に住んでいる店員さんを帰して、身内だけになりました。取りあえず横町の弟の家に行くことにして、父、弟、弟の嫁さんが車に乗ったところに、母がキャトルから走って帰って来ました。母もすぐに車に乗って、4人で横町の家に行ったんですけど、余震もあり心配なので、父と母はさらに山の上の方に上げました。

私は戸締りをしておこうと思って、取りあえず市役所のすぐそばの新川町の自宅に戻ったんです。途中で今まで一度も聞いたことがない「大津波警報」というのが聞こえてきたので、自分と旦那の下着など2日分をちっちゃいバックに入れて、戸締りをして20分くらいで家を出たんです。主人は市役所の職員だから、こういうときは帰ってこないものだと思っていますから、家族のところへ戻りました。

ローソンさん（本町1）が一番先にお店を閉めたんです。ローソンさんが閉めるということはよほどのことだなと感じて、逃げなくてはいけないという意識になりました。津波が来るちょっと前だと思うんですけど、道路が黒くなってきて、それが水という感覚もなかったんですが、「水が来ました、水が来ました！」と叫びながら走ったんです。まだみなさん街の様子を見ていましたが、「みんな、ここに上がれ、上がれ！」と言って、この辺にいた人たちは、ちょっと高くなっている東屋さんのところに上がったんです。私は弟の家に行き、そこからさらに両親と共に高台へ避難しました。

4時半頃高台から少し下りて、中央通の様子を見に行くと、シューズショップの正面に取り付けた赤い店舗テントの所まで水が来ていました。たまたま宮古に来ていた盛岡のリハビリセンターの車が高台に避難していて、「年配の方々は車の中で暖をとってください」と言われて、両親は車の中で暖をとらせてもらいました。そこでアイパットで市役所の映像を見て、初めて自分たちがどういう状況にいるかということがわかったんです。

その夜は弟の家で、下は怖いから2階のひとつの所に布団を敷いて、反射式のストーブとローソクをつけて、皆寄り添うような形で過ごしました。余震が来るたびにローソクとストーブを押さえていました。

ご近所や外にいる方々、特に女性はおトイレが大変だったので、たまたま風呂の浴槽に水があったので、下の入口は開けておいて、トイレを使っていただきました。

**離れている子どもたちは**

長男と長女は東京で暮らし、次男は大学受験のために10日に東京に行き、11日は受験地へ移動していました。

私たちが避難所ではなく自宅待機でいることを伝えたかったんです。それで、避難者名簿に記帳しようと思い、宮古小学校に行ったんですが、避難所はパニック状態で「自宅で待機できる方は戻られてください」ということで、記帳もしないで帰ってきました。都会でテレビを見ている人は避難所の名簿で無事を確認するらしいんですよ。いつまでたっても私たちの名前がないので、「もう、だめだ」と思ったらしいんですね。電話も携帯も駄目だったので、しばらくは連絡がとれない状態でした。

最初は電話を借りようと宮古病院に行きましたが、とても電話を借りる状態ではありませんでした。それから、佐原団地の知り合いのところに行き、その方のａｕが娘の携帯に繋がったので、「父さんも母さんも生きているからね。そっちは3人でいてちょうだい」と一言だけ言いました。16日に消防署に衛星電話がついて、ひとり5分間だけ話すことができたので、同級生の1人に連絡を取って、そこからみんなに無事を伝えてもらったんです。

次男坊はそのまま東京に留まり、その後東京の大学に行くことになりましたが、銀行がストップして、入学金を送金できなくて困まりました。大学に連絡しても思うように繋がらないし、状況も理解しても

らえない。親戚に頼んでなんとか無事に手続きができましたが、送金ができないために1年を棒に振るのかと思ったら、可哀そうで不安でした。

**軍手にマスクの生活**

水と電気が復旧したのは4日後で、その間は常安寺の沢水を汲みに行きましたが、そのうちに給水車が来るようになりました。父親の薬の水を駅の向こうまで買いに行っても、ありませんでした。

1階の商品は全滅でした。しかも1年の中で一番仕入れ量も多くて、新入学に向けて、倉庫にあった物を全部店に下したばっかりのところで、大変だったんです。長靴はかさばるので倉庫に上げてありました。取りあえず作業するにも長靴が必要ということで、横町のガレージまで運んで、必要な人に安く分けました。

私は自宅に戻るという感覚はなくて、店のことをやっていました。たまたま通りかかった同級生が、「おめんち、ひでぇぞ」と言われても、見ないうちはわからなかったんですよ。

2日目あたりに旦那が横町に来て、お互いの無事を確認して、旦那に「家に行って見たか。実印なんかどうしたんだ」と言われて、それから3日目に行って見たんです。1階はめちゃめちゃになっていましたが、スチールの塀と大きな木が植えてあったので、大きな物は入らず、家が壊れるまでにはなっていませんでした。土台を80㌢ほど高くしてあったので、水は2階まで上がらなかったんですが、後で天井裏をはがしてみたら、葉っぱが刺さっていたのでぎりぎりのところだったんですね。

40日くらい弟の家で世話になり、その後両親と店の2階に移りました。私は毎日店から自宅の片付けに通いました。ごみを出して、泥かきをして、水をかけて洗って、2か月くらいはかかりましたね。その後修繕して、自宅に戻ったのは9月でした。

駅を境目にして、海側と山側では生活が全く違っていました。どんどん春に向っていくので、被害のない方は春の装いになるんですよ。こちら（海）側の人たちは毎日カッパを着て、長靴を履いて、軍手にマスク、リュックを背負って、ペットボトルを下げて、5時、6時になるとそれぞれの避難所に戻るという感じでした。

実家の店は中央通を閉めてキャトルの店舗だけで再開することになり、私は振興組合の事務局を引き受けることにしました。当時は生きている人も必死で、悲しんでいる間も余裕もなくて、自分たちがこれからどうするのかということが先でした。今はきれいになった空地を見るとむなしく感じます。

## 5　大通1丁目商店会

中央通商店街に続き、末広町商店街との間に位置している。商店は震災後増減1で震災前と同数の9店舗である。住所は大通1丁目（本章3）、町内会は大通1丁目2組に属している。

「3・11」の津波の浸水はほぼ2㍍。中央通商店街と同様に家屋、店舗の1階が壊滅状態となり、大きな被害が出ている。

震災後に商店会を再結成し、両隣の商店街との連携事業「宮古あきんど復興市」に参加している。

### (1)　中村 進さんの話　昭和29（1954）年生

大通1丁目　中村生花店大通店、大通1丁目商店会会長

平成27（2015）年4月27日、大通店内で伺う。

**家族と合同庁舎に避難**

ここ大通と末広町に店舗があります。当日は大通店の2階でお花の教室をやっていて、ほとんど終わりかけた時にぐらっときた。取りあえず下に降りて、駐車場に行った。生徒さんの1人は、「出て行こう、出て行こう」と言っても、怖がって、「ここにいる」とテーブルの下に隠れていたんです。

最初の津波情報は1㍍とか2㍍、あまり規模は大きくない感じだった。地震は大きかったけれども、過去にここに津波が来たことないから、のんびりしていたんです。だんだんに騒がしくなってきて、3㍍から

6メートルとか聞こえてきて、周りの人が逃げ始めた。そこで、「俺たちも逃げよう」って言って、店先の花を7割か8割くらい店の中に入れたときに、「大きい津波が来るぞ！　逃げろ！　逃げろ！」という声が聞こえてきた。えー、本当かなと思って、残りの花をパッパッパと中に入れて、末広町の本店に行った。妻と息子と合流して宮古小学校へ行き、そこから山の方に逃げた。

その晩は家族で合同庁舎に泊まった。発電機があったので、テレビを見ることができてよかった。その日はお花の教室で昼を食べていないままだったが、夜11頃になってから食料の配給があった。結構な人数の人が避難していて、最初の晩は仕事場で職員の人たちの椅子で仮眠を取った。次の日にはちゃんとした大きなホールに移った。

次の日、ようやく歩いて状況を見に来たら街はすごかった。びっくりした。大通の店も末広町の店も水が入り、1階はもうめちゃくちゃで、商品は全滅だった。1、2日は水が出なかったので、仕事もなにもできない。水が出るようになったのは3日か4日後で、それまでは動けないんだから困った。電気はもっと遅かった。

合同庁舎に3日、4日泊まって、その後は末広町の本店2階や娘のアパートで生活し、店の片付けをした。

**仕事の再開**

魚菜市場は被災してなかったので、在庫のある1週間くらいは営業して、その後1か月間ぐらいで閉めた。大通と末広町の店は片付けをしながら、取りあえず切り花だけ置いたけど、みんな花どころではなかった。2週間後、卸しの関係やお得意さんを回ってみたが、ほとんどが浜どこだから、被災していた。うちの店も、もうだめかなって思った。葬儀屋さんも被災していて、花どころか葬儀そのものができる状況ではなかった。5月の連休あたりからなんぼか動けるようになった。

車は全部やられた。最初は軽自動車が見つかって、次に見つかったのも小さい車で、大きい車が見つかるまでは時間がかかった。車がないと仕事になんないからね。まず軽自動車が見つかって、今度はガソリンが不足で、毎朝2時3時にガソリンスタンドに並んで、配給だったから、1回に確か10リッター入れてもらった。満タンにはしてくれない。全部のスタンドが開いているわけじゃあなかったから、ズラッーと並んですごい人だった。前の日の夜から車を止めて、場所取りする人もいた。順番待ちの札が出て、「ここまで、あとはもうありません」という日もあった。ああいう苦労も忘れてしまったな。

**復興**

店のお客さんが前のとおりに戻ったのは1年ぐらい、ちゃんと仕事を戻すのには1年以上かかった。

店を建て直すには時間がかかるんです。末広町の店舗ですが、被災した土地の空いているところに建てて、それから建物を壊すという時間を与えてもらえなかった。「壊したい方は申請してください」と言うだけで、補助金の話もまだなかった。「いつ壊しにくるのかわかりません」「壊したい方は申請して、壊す体制にしておいてください」と言われたために、結局動けなかったんです。建物を撤去するまでに時間があって、もっと早くに補助金の話があれば、店の再建も変わっていたと思う。行政からアンケートもきましたが、それに対して何も言ってきませんね。

4年経って今は落ち着いているけど、この先は不安。仕事が回るという計画のもとで借金もしている。ただ、復興のために土を盛り上げているから、流れが変わるでしょ。例えば、建物が変わってどっかの商店街がガラッーとなくなれば、そこのお得意さんがいなくなるでしょ。だから、全部成ってみないと、わかんないですよね。ある程度横ばいか、下るかって感じだけど、流れがはっきり決まらないとわからないですね。

**(2)　川崎　礼子さんの話**　昭和41（1965）年生

大通1丁目　中村生花店 大通店従業員

平成27（2015）年4月27日、大通店内で伺う。

**13日から真っ暗な自宅で**

私は店を出たあと自分の車が置いてある駐車場を確認してから、末広町の店で社長たちと合流して、宮古小学校に行ったんです。校庭にも水が来たので、「上へあがれ」と言われて、山の方に行った。結構な人がいたけど、なにも状況がわからなかった。それから、合同庁舎に避難して11時頃に食料の配給があった。

次の夜はすごい爆発音が聞こえた。すごかった。農林課の3階の窓から「どこ?」って見ていたんですよ。そしてら、「大通だってよ。火事でなにかが爆発したんだ」っていうことだった。後藤医院のかなりの数の患者さんたちが、ぞろぞろと宮古小学校に避難して行ったと聞きました。

2晩して、避難所にいても疲れるから、電気がついていないけど、自宅に帰った。真っ暗で暖房もない。私のところは水とプロパンガスが出たので、やかんでお湯を沸かしてペットボトルに入れて、足を温めたり、洗面所に頭を突っ込んで髪を洗った。電気がきていなかったので真っ暗で、まるで幽霊屋敷ですよ。周りも全然わからない。何軒かはいたような気もしたけど、暗くて確認することもできなかった。

次の日からお店の片付けに通いましたが、社長が食べ物をたくさん用意してくれていたので助かりました。感謝の気持ちでいっぱいです。

私の車は、下ばかり見て探していたら、家と家の間に4台くらい重なっていて、そのてっぺんに乗っかっていました。生活の一部ですからとても悲しく思いました。

**(3) 大森 進さんの話** 昭和33（1958）年生

大通1丁目 三陸さをりプロジェクト

平成27（2015）年4月23日、店内で伺う。

**宮古小学校から宮町に避難**

当日は、陸中ビルで集団申告の集会に出ていたんですよ。とてつもない揺れとサイレンで、そのまんまバイクで家に飛んで帰ってきた。親父が足首を骨折して車椅子だったもんで、それで飛んできたんです。すると、消防車が「津波が来る、逃げろ！」と言うのが聞こえた。女房はちょうど帰省して家にいた三男坊に、中学生の末娘を迎えに行かせた。私は親父の車椅子を押して、その途中で次男坊と一緒になって、宮古小学校に逃げたんです。女房はちょっと遅れてきたのでぎりぎりだった。

「6メートルの津波が来る」というのを、なんかで聞いたんですよ。それじゃあ18メートルは来る。じゃあ、ここも危ないと、なぜかそう思って避難したんです。避難はちょっと遅かったんですよ。陸中ビルでバイクを止めていた場所が離れてたんで、そこまで歩って行ったから。あと5分遅かったら、宮古小学校に行けなくて、私たちも2階に避難したと思います。

避難して、大した時間ではなかったんですけど、浸水が始まって、グラウンド半分くらいまで水が来て、先生方の車のクラクションが一斉に鳴り出したときには、もうパニックですね。学校長か誰かが、「津波が来るから小学生は3階に上がれ！　お年寄りの方も高い所に上がってください」と言われて、若い人たちと一緒になって、うちの親父や車椅子の方やおばあちゃんたちを体育館の2階に上げました。その後、分団から布団やマットレスがきたんですけど、そのときにわっと一斉に人が集まって、軽いパニックになりました。

「水もねえし、どうしようもねえな」と、近くの宮古商工会に水をもらいに行きました。親父を避難させるとき、寒いから普段着に丹前毛布1枚だけを着せてきたけど、人もだんだん増えてきて、このままだと親父が病気になってしまうと思った。それで、宮町の建物（メガネの弐萬圓堂）が無事かどうか確認しようと、魚菜市場の近くを遠回りして、山口小学校の近くから川沿いに下って宮町まで行った。

宮町のばあちゃんのところには心配していた三男坊と娘、そして長男がいた。三男坊と娘は大通の家に帰ろうと八幡踏切のところまで来たら、「津波だ！」と騒ぐ声が聞こえたので、すぐに宮町のばあちゃんの家に避難した。そこに宮町でバイトをしていた長男も来たということだった。宮町の家と子どもたちの無事が確認できたので、また小学

校に戻って、親父の車椅子を押して、女房と次男坊と一緒に雪が降る中、暗い道を宮町に行った。大通の家を直すまで宮町で暮らした。

**土蔵で糸車を発見**

大通の店と住居は、水が1㍍80㌢入って、1階は全滅。電気、ガス、水道が駄目だから住めない。猫が2匹いて、弐萬圓堂で暴れまわって大変だったので、長男坊が自宅の2階で猫と一緒に守備隊要員として生活していました。

大工さんをすぐ頼んだんですけど、大工さんもてんてこ舞で、それに「ちゃんと消毒して、風通をやんないとカビがひどくて大変だよ」って言われたので、その分もちょっと遅くなったんです。市役所でＥＭ菌（有効微生物菌）の原液をもらってきて、薄めて散布して、あとは高圧洗浄機で泥を流して風を通した。ボランティアの人たちに頼んで、床下の泥をかき出し、床板をはいで風通しをよくしたんです。子どもたちが剣道をやっていたので、宮古高校剣道部、ＹＭＣＡさんやいろんな人に手伝ってもらってやりました。

この土蔵は70年以上経っている。2㍍くらい海水が入ったので解体するしかなかった。そのときに初めて見る糸車と糸巻きが出てきました。下手すると壊れそうです。

宮町から片付けに通ってここが完全に戻るまで1年かかりました。私は3月末から午前中だけ家の片付けをして、自分も被災者ですが、午後は支援物資の配達のボランティアで飛び回っていました。

**「さをり織」との出会い**

つなみクラフトの方から、「織での支援に協力してもらえませんか」と言われて、面白そうだし、土蔵に糸車があったこともなにかの縁だろうと思って、「さをり織」を始めたんです。もともと日本の僧侶がインド沖地震のときに、心のケアにとタイの被災地に持って行った織物で、日本に逆輸入の逆支援ですね。そのお坊さんが岩手の雫石出身だったので、めぐり巡って宮古に流れてきたようです。

本来私の仕事は機械関係の営業職ですが、今はこちらの方が主になっています。それは震災の時点で自分の心も半分おかしくなったような気がして、それを切り替えたい、何とかしたいという思いで始めたんです。「さをり織」は何をやってもいい。失敗しても「それはデザインですよ」という言葉に励まされて、はまっています。

グリーンピア田老、田老駅近くの個人宅、山田、大槌、釜石などで、主に技術指導をやっています。また、宮古ＮＰＯ法人若者自立サポートセンターの若者たちに指導をして、今度はその若者たちが先生になって、10か所以上の仮設集会所やグリーンピアの復興商店街などを一緒に回っています。

仮設で「さをり織」始めたのは、話のタネで集まってもらって、コミュニティーを作るのが目的だった。その副産物として、織ったものでマフラーなどを作ろうということです。

大きな仮設だと最初30人位参加するんですが、だんだんに少なくなり、最終的に多くて4人、少なくて2人、ゼロになるときもあります。震災後初めての方がほとんどですが、基本的には「さき織」と同じなのでなじみやすい。交代で少しずつ、何㌢か織ってもらって、でき上がった布はその場で切って渡しています。自宅が流されて落ち込んでいた方が夢中になっているし、ライトバンに乗っていて流された方はだんだん色使いが明るくなってきた。心のケアになっているのだと思う。少しでも仮設のご高齢の方たちの励みになり、そして収入の道も開ければいいなと思っています。

※震災から千日目の平成25（２０１３）年12月4日に宮古市で、全国を回って「さをり織」を完成させるプロジェクトが企画された。阪神大震災から20年目の平成27（２０１５）年1月17日がゴールで、３１１㍍もの長さになり、２０１５年12月3～5日に宮古市で展示された。平成26（２０１４）年6月の復興市で開催された「さをり織のファッションショー」には全国各地から参加があった。

## 6　末広町商店街

駅前から東にのびる約370㍍の両側に末広町商店街がある。昭和9（1934）年に山田線が開通したのをきっかけに発展した新興商店街である。本町・新町から移ってくる商店もあり、現在一番の繁華街、町の中心となった。振興組合を組織し、コミュニティ施設「りあす亭」を設置している。町内には自治会がある。震災前、平成23（2011）年3月1日現在の世帯数は85、人口は209名（男95、女114）であった。

「3・11」の津波による浸水は、2㍍～30㌢。1階が壊滅状態になった店舗、家屋も多く、大きな被害が出ている。

商店街という特徴から他所から買い物に来た人が、末広町あるいは帰り道に被害に遭ったケースも少なくない。末広町の女性店員は、送り出したお客さんが、家族の迎えを待って田老へ帰る途中で津波に呑まれたと聞いた。被害にあったお得意さんの数が多く、顧客名簿を見る度に心が痛み、しばらくは入眠剤なしには眠れない日が続いたという。

震災後、平成23（2011）年8月は84世帯、人口は196名（男91、女105）。平成27（2015）年3月1日現在の世帯数は83、人口は169名（男83、女86）である。町内会の調べによると平成27（2015）年11月現在の世帯数が117となっている。震災後は町内会と商店街振興組合が協力して住人の交流に力を入れている。商店街の特徴として住まいが他所にあるため、行政の発表とズレが生じていると思われる。

### (1)　志賀 政信さんの話　昭和54（1979）年生

末広町1　福島湯　㈲福島屋 専務取締役、第八分団員

平成26（2014）年8月11日、事務所で伺う。

**田野畑村から山越えで末広町に**

田野畑野球場でフェンスの工事中だった。もうちょっとで3時の休憩で、職人たちにジュースでも用意しようかなと思っていたところに、急に携帯電話がブ、ブ、ブと鳴った。そのころ地震や津波警報が頻繁に出ていたので慣れていて、作業員に「大きな地震が来るかもよ」と言っていたら、張っていたフェンスがビンビンビンビンと鳴り出して、バアッーと揺れ出したと思ったら、山がゴ、ゴ、ゴ、ゴッと鳴って、立っていられなかった。これって大きいなあ、また津波警報が出るなあと思ったんで、宮古に戻ろうと思った。職人たちに、「気をつけて、頑張ってね」と軽い感じで言って、宮古方面に走り出したんですけど。海沿いの国道45号線は通行止めになっていた。まだ津波が来てなかったんで、普通に警察が来て道路を止めていたんです。

岩泉町の小本に出て、山の中に1回入って、内陸をまわって106号で茂市を通り抜けてきた。途中大きな落石があった。結構大きかったんだなと思って、ラジオを聞きながら来たんですが、「釜石では住宅街で車が流されている」って。そのときは、釜石はすげえぇことになっているなあくらいにしか思わなかったですね。山の中で2、3台の車とすれ違った。海に向かって走って市内が見えるところまで来て、どうも様子がおかしいなと思ったら、建物の1階部分が水没しているのが見えた。車に乗っているのに腰が抜けたようにカクンとなった。勿論、末広町に入れないので、消防署まで行った。そこに車をおいて、膝まで水に入らないように、ぐるっと回って駅前の交差点のところに来たら、第八分団のポンプ車が止まっていた。分団員に、「大丈夫か」って聞かれたけど、大丈夫もなにもその日は市内にいなかったので、事情がよく飲み込めていなかった。

末広町の家族が心配だった。嫁さんも妊娠していて、老人ばかりなので「家を見に行く」と言ったら、みんなに「津波がいつ来るかわからないから、絶対に行くな」と止められた。それでも、消火活動のジェラルミンの長靴をはいて、胸元150㌢くらいまで水に浸かりながら、ザクザクと歩いて家に向った。完全に平静を失っていたようで、途中ですごく寒くなってきて、体が動かなくなって、やばいと思った。それでもなんとか家まで来たら、2階から声が聞こえてきた。家族は2階に避難していた。

家族の無事が確認できたので再び水の中に入り、ジャブ、ジャブと第八分団のポンプ車のところへ戻った。途中で、「おーい、だれか」という声が聞こえたけど、どこから聞こえてくるのかわからない、どうしようもなかった。

家には１６０チセンくらいまで水が入った。海の方から流されてきた車が事務所を突き破って、そこにザーッと入ってきた水がすべての物を押し流しながら、家の中を突き抜けて、反対側の勝手口から出ていった。家の周りには、見たことがあるような物、銭湯の洗面器だとかいろいろな物がいっぱいプカプカ浮いていた。父親はアイオン台風の経験で２階に上がれば大丈夫と思っていたようだが、すごい勢いで水が上がってきたので、死ぬ思いをしたと言っている。

**水に苦労した消火活動**

次の日の夜中に火事があった。すぐそこの角のところ（大通４）の建物が漏電で全焼したんです。夜、寝てたら木が割れるような音が聞こえて、ボキボキボキ、ボキッと。うるせぇなと思って２階のカーテンを開けたら、火柱が立っているんですよ。木が燃えて割れる音だったんですね。電話が通じないから消防署に通報できない。普通「何分団出動してください」ってサイレンが鳴るんですけど、それもなくて、いきなり火柱だったんです。すぐに第八分団（大通３）まで行って、ホースを持って火の前に行ったんですけど、水が出ない。水道が止まっているから、当たり前なんですよ。みんなテンパっていたんでしょうね。消火栓のところに行ったはいいんですけど、水が出ない。そこで防火水槽に回って消火したんです。水が足らないくらい燃えちゃって、最後は宮古小学校のプールから、何台も、何台も、ポンプ車を中継して消火した。遠くの分団からも応援に来てくれましたが、消火に朝までかかりました。

**町内に銭湯を開放**

銭湯はとりあえず泥出しして、そのままにしておいたんです。町内の人たちが「お風呂に入れてください」と来ましたが、多分管の中にも泥が入っているから、「無理です」と言っても、「復旧作業で汗だくになるし、塩水、汚泥にまみれている。水も出ない。何とかして欲しい」と言われた。そこで、地震から１週間するかしないうちに、浴槽はとりあえず大丈夫だろうというところまできれいにして、屋上のタンクの水を全部入れて、上の方に積んであった海水につかっていない薪で釜を暖めた。脱衣所もドロドロになっていたので、ビニールシートを敷いて、何かあると怖いので「お金はいらない、自己責任で入ってください」ってしばらくの間開放しました。みなさん喜んでくれて、営業しているときより混んでいました。

**自宅２階で避難生活**

震災後、すぐに東北電力が電気を通してくれたんですが、漏電で火事になったために、１軒、１軒チェックしたので、復旧に２週間位かかりました。水は多分その間に戻ったのかな。

今は使っていない古い井戸の水が湧いたんです。コボコボ、コボコボって。昔の人の迷信で井戸をふさぐとよくないと言れているので、小さい穴を残して上に洗濯機を置いてあったんです。飲むのは危ないから、トイレを流したり、食器を洗ったり、海水にまみれた風呂釜を洗うのに使った。水道が回復してから、井戸のところで家族みんなして、「ありがとうございました」とお礼を言って、洗濯機を戻しました。今でもたまにチョロと出ているみたいです。

食事は２階で卓上コンロを使って調理していました。駅の向こう側は天国ですよ。その被災しなかった友人、親戚たちが、「まずは食べ物だろう」と持ってきてくれたので、食べる物に不自由はしなかったけど、精神的なダメージが大きかったです。嫁さんはしばらく崎山の実家に行っていました。職人も無事で、車両の被害もなかったんですが、家の近くにある倉庫の中には何も残っていなかった。その損害は大きいですね。

震災後、工事会社はものすごい忙しさです。資材は高くなるし、人

出不足です。特にオリンピックが決まってからはさらに人手不足になりました。

**今思うこと**

消防団員の立場で言うと、とにかく身の安全を確保することが大切。避難訓練をやっていたが、ほとんどの人は参加しない。宮古小学校に行く途中にある山口川も津波がくればあふれる。海から波が来るよりも先にドブ川があふれる。避難所に行く前に被害に遭うこともある。水をよけて安全に避難所に行くことができる道を知っている人は少ないと思う。今回、ほとんどの人が、津波がここまでくるとは思っていなかった。水を見てから自宅の2階に避難して、水が引いてから避難所に行った人が多かったのではないかと思います。

3年が過ぎて、すごく昔のことのような気がします。数字として3年は千日ちょっとですが、10年分生きたような感じではないかと思う。千年に一度といわれる災害のときに、太平洋沿岸に住んで津波を経験して、生き残ってそれをしゃべっている。すごい体験をしたと思っている。ボランティア、警察、自衛隊の人たちに感謝しています。

**(2) 佐々木 慶子さんの話** 昭和20（1945）年生

末広町6 ㈱大越電気代表取締役

昭和通りのおかみさんもてなしたい代表

平成26（2014）年10月23日、店内で伺う。

**「早く逃げろ！」の絶叫で避難**

店にいまして、初めての大きな揺れを感じました。ファンヒーターを消して戸を開けて外に出たら、止まっている車が動いているんですよ。電柱を見たら電線がたるんで、ああ、すごいなと思いました。

高校生のとき、チリ地震を体験しているもんですから、ここまでは、津波は来ないという安易な考えがあって、それが今回被害を大きくしたのかもしれない。チリ地震は金浜がひどかった。当時の高校生たちが、日作開発興業（1973―2004年まで小山田にあったラサ工業の子会社）のトラック2台に乗って、今でいうボランティアですね、金浜に手伝いに行って、瓦礫なんかを片付けた記憶があるんです。

初め、水位が上がって6㍍と聞こえたような記憶がある。幸いテレビなどは落ちていなかった。電気が消えたので、ラジオをつけたりしているうちに、消防団員の「なにやってるんだ、早く逃げろ！」という声のすごさに、なにかとんでもないことが起こったんだと感じた。「津波がもうそこまで来ている！」って言うので、私たちは初めて津波が市役所を越えてこっちまで来たことを知って、それは大変だってことになった。シャッターを下して鍵をかけて、社員はみんな配達などに出ていたので、「宮古小学校に行っています」と張り紙をして、女性4人で宮古小学校に行きました。

そのとき、後ろの山口川がガッーと上がってきたわけ。それから、道路に出て海の方からザァーと水が来たのがわかったんです。それは水というか泥のようなものが浮いているような感じでした。

宮古小学校も校庭まで水が来るというので、知人宅が小沢のちょっと高台にあるので、そこまではどう考えても来ないだろうと思ったので、避難させてもらって1晩過ごしました。電気はなかったけど、薄明るい時に避難したのでまあなんとかなった。水が出なくてトイレが使えないし、携帯も通じなかった。auが8時くらいになったら通じて、社員もみな無事でした。

**店の復興**

次の朝6時頃に千徳の自宅に帰ったんですが、主人の母がひとりでいて、テレビがついてないので津波のことは知らないんです。東京にいる娘たちの方がニュースで津波の映像などを見て、こちらよりよほど状況がわかっていた。

店に行こうと思ったら、たまたま社員がトラックで来て、「末広町はすごい泥で入れない」と言うので、その日は店に行くのをあきらめました。次の日の夕方に千徳には電気がついて、3日目か4日目にスーパーも開いた。

3日ぐらい経って末広町に来ましたが、とても店に入れる状態でなくて、しばらく行ったり来たりしながら様子を見ていた。泥がすごくて、なんていうか、プールの中を歩いているような感じでした。1週間くらいしたら、なんとなく様子が見えてきましたが、まだ片付けるもなにもない。ここの入口にも他所から箪笥が流れてきたり、畳みたいなものがあったり、車も3段に重なっていて、初めて見る凄まじい光景だったんです。店の浸水は床上1㍍くらい。レジや商品が駄目になって、2台の車が流された。沿岸の方は見てないけど、ここでこのくらいだから、もっとすごいということは憶測できました。

そうこうしているうちに、みなさんが、「乾電池はないか」、「ラジオはないか」、「懐中電灯はないか」、「たばこはないか」って来られた。そこで、陽があるうちに泥の中で乾電池を探したり、上段の泥をかぶっていない物や下段にあった物はふいたりして、店先に出した。隣の店も洗濯機を持ってきて、衣類を洗っていたし、衣類関係のお店はシャッターを開けて、店を片付けるよりも、まず大丈夫な物、衣類や布団などあるものを店先に出していた。3、4日はみんな呆然としてなにもできなかったけど、1週間くらい経つと「あれがない」「これがない」と言われると、「はい！」ってなって、お客さんがない物をこっちが探して提供しようという気持ちが強くなった。そのうちにメーカーの人がホッカイロとかティッシュとか支援物資を持ってきてくれました。

一番困ったのがガソリンですね。2時間並んで千円しか買えなかった。車がないと身動きが取れないですからね。25日の給料日には、なんとか給料を出すことができた。4月になって、店の方も泥を出さないと匂いが残るから片付けを始めました。水道がきて、電気がきて、電話が最後に回復した。幸いその間に携帯が使えるようになっていた。お客さんも歩いて買いにきてくれて、仮設もまだできていない頃から、冷蔵庫、洗濯機、炊飯器がよく売れました。

1か月過ぎてガソリンも大丈夫になったし、盛岡―宮古間の支援物資の車以外の規制も取れて、みんなで力を合わせて動き出した。リサイクル法の電気製品も市役所が持って行ってくれて、町の形が戻ってきた。そのうちにグループ補助金が国から出ましたね。床を張り替えたり、レジを買ったりというものが認められて、末広町の振興組合がまとめてやってくれました。ただ、売る物がない。商品を仕入れなければならないのに、商品は補助金の対象になっていない。運転資金は借りないとね。メーカーも支援してくれました。今はみんな現金払いなので、震災後はどこのメーカーも厳しくなっている。電気店もだんだん減りましたが、震災を機に辞めた人もいますね。

復興支援で家を新築する人に環境省からエコ商品に30万くらいの補助金（商品券）が出たんですけど、店が指定されていて、しかもそれが大型店。これでは地方店が衰退していくでしょう。一方では産業省が地域の商店街にとお金を出すのもありますが、政策が一本化してないですよね。

震災後一番感じるのは命の重さです。突然死ぬことほど悲しいことはない、胸が詰まります。ご年配の方が気丈なのには感心している。いろいろなことを経験してきた人生は違うんだなと思います。「昭和通りおかみさんもてなしたい」のメンバーが集まって、ウェルカムフラワーをしたときには、本当に「もてなしたい」を実感して、「おかみさんの強さを出して行こうね」って話し合っています。

今はラジオ、懐中電灯を用意しています。

### (3) 末広町商店街のみなさんの話

**臼木 禮子さん**　昭和10（1935）年生
末広町7　ふとんのささき、末広町自治会副会長、昭和通りのおかみさんもてなしたい会員

**太田 憲一郎さん**　昭和21（1946）年生
末広町2　募集代理店、㈱太田代表取締役、第八分団長

**小成 勝郎さん**　昭和24（1949）年生
末広町6　㈲菊丹小成商店、末広町自治会会長

平成26（2014）年10月23日、リアス亭で伺う。

**「水が来た、逃げろ！」**

**太田さん**　新里からの帰り道車を止めて、かんの書店（宮町1、陸中ビル）で本を買って、外に出たら、携帯がヒュー、ヒュー、ヒューと鳴りだして、前を歩いていたおじさんの携帯もヒュー、ヒュー、ヒューと鳴った。すぐに車を出して末広町の保険代理店に戻った。あとで考えたら車を置いてくればよかったのに…。社員に「事務所を閉めて帰ってください」と言って、半纏に着換えて、すぐにチャリンコで管内の水門（南町1）まで行ったんです。地震とともに踏切の遮断機が下りるんですね、それで、もうずうっと渋滞していた。

**臼木さん**　家（店）にいたの。「津波が来ます。逃げてください」と、どっからか放送が聞こえてきたけど、まさか、津波がここまで来るわけがない！　そう思って逃げなかったの。

**小成さん**　私は末広町から離れたところで、趣味で車をいじっていたんです。ジャッキスタンドを4つかけて、ジャッキをあげたままで下にもぐっていた。そのときにガガガッと揺れが来て、ジャッキスタンドが外れた。あ、危ないと思った。幸い1か所だけジャッキが残って、それで車の下から逃げることができた。すごい経験をしました。で、松山地区からオートバイで、かあちゃんに携帯して、「切るなよ、切ると繋がらなくなるから」って話しながら走った。途中小山田橋のところで、指を指しながら話をしている人たちがいて、川の底が見えるかなという感じで水が引いていた。なんだろうと思いつつ通り過ぎて、ようやく末広町にたどり着いたら、商店街の人たちが通りに出ていた。「宮古というところは、ここまで津波がくるものじゃあない、大丈夫」って親父に教えられていた。そこで、かあちゃんに、「店の崩れた陳列物を直してもう1回並び変えろ」と言っていたら、「ただ今、大津波警報が…」なんて防災無線が言っている。多分消防車も1回通ったと思うんです、何時だかわからないけど。きれいなマニュアル通りの言葉で「ただ今、大津波警報が発令になりました」なんてね。

**臼木さん**　多分その車だと思うけど、その後、「水が来た！　逃げろ！」って叫びながら通りに入ってきた。ものすごい声だった。みんなで外にいたからその言葉で、「すぐ逃げろ！」ってなって、逃げたの。

**小成さん**　絶叫型だったもんね。宮古駅の向こうから「来た！　逃げろ！」って、2人ぐらいしか乗っていない消防自動車がグワッーと通って。「おーい、逃げろ！　今見てきたぞ！」って。「今見てきたぞ！」って言ったもんね。それからすぐにまたその車が戻ってきて、みんなオ、オ、オッとなった。それで、なんだ、なんだということになって、初めて本気になった。

**太田さん**　そのポンプ車は、我々が土手の上で波をかぶって、下に降りたときに、エンジンがかかっていたので、すぐにバシャバシャと波をかぶりながら、駅の方に行ったんですよ。それで、そのポンプ車に乗っていた分団員に聞いたら、通りのどこまで行ったか覚えていない。興奮していてよくわからないんですね、前から白い車だか漁船が見えて、ほら、中央通に乗り上げた船、あれが向かってくるのが見えたって。で、「ワッー、やばい！」ってなって。でもUターンしている暇がないから、そのまま車をバックしてきて、多分花の木通りで向きを変えて駅の方へ行ったんです。

**小成さん**　「逃げろ！来た！」って声が聞こえて、それで見たら、ベニヤさん（末広町3）のあたりが濡れていた。最初道路に水を撒いたのかと思ったんですよ。

**太田さん**　後で誰かが映したビデオを見たら、水は家の駐車場（末広町2）にもジワッーと来ている。

**小成さん**　それで初めて逃げた。それでも店のシャッターだけは下げて逃げた。避難所が宮古小学校というのはわかっていましたから、夫婦別々に逃げた。俺は子どものときから通っていた大越電気の脇の路地を真っ直ぐ行き、かあちゃんはまるしんスーパー（黒田町7、2007年に解体）のあった正規の道を行った。

**太田さん**　うちの女房と従業員もやっぱり絶叫型のアナウンスを聞いて、山口川がゴボゴボしているのを見ながら宮古小学校に逃げた。

**臼木さん**　そう、それで宮古小学校の方に向かって行ったわけ。地震がきても、津波はまさかここまでは来ないと思っていたから、水が来るってなんの水だべと思った。後で津波だとわかった。ちょっとした

川があって、排水溝からも水があふれていた。

**小成さん**　そう、ボコボコしていた。みんな同じくらいの時に、その「逃げろ！」っていう声で逃げたんじゃあないかな。だから、ああいう警報はローカル弁じゃあなきゃあね、宮古は宮古弁。誰もがいつも聞いている言葉がいい。テレビが流している言葉は、「またかぁ」っていう感じで聞き流してしまう。ちょっとマンネリ化しているんじゃあないですか。

**臼木さん**　「逃げてください」ではだめだね。頼まれては逃げない。「逃げろ！」と言われないとね。すぐに帰ってくると思って、何も持たなかった。コートもそれほど厚い物を着ていかなかった。私たちは宮古小学校の体育館の2階に避難したので、津波が来るのが見えた。いろんなものが一緒に流れてきて、校庭前の鍵商さんのとこなんかは、たちまちいっぱいになったけね。

**小成さん**　宮古小学校に着いたとき、臼木さんの言ったように、鍵商さんのあたりは水嵩が増して、そばにある堰（どぶ川）から水があふれていた。車で逃げる人たちがここを通って行ったけど、渋滞していて車が動かない。動かないわけよ、渋滞イコール前の車の運転手が車からを降りて逃げていたから、走るわけがない。「だめだ、下りろ、下りろ、前の車に運転手がいない！」って言った。それでみんな車から出てきた。中にドイツのＢＭＷ山形のナンバーがいてね、水嵩が増してきて、国産車はスーと沈んでクラクションが鳴り響くんですが、ＢＭＷは動かなくなっても浮いていた。そのうちにだんだん斜めになってから沈んだ。校庭に止めてあった先生の車も水につかりましたね。

**太田さん**　末広町は水が1メートル以上来ています。

　津波が来た後は線路を伝って帰ってきたけど、南町はほとんど被害がなくて、こっち側は瓦礫が水に埋まっていて、「助けてくれ！」って声が聞こえてきた。どうしようもない。悲惨だった。渋滞していた車がピーーと鳴りっぱなしで、プカプカプカプカ浮いていた。踏切まで来た人たちが車を捨てて逃げたんでしょうね。その人たちはうまく線路を逃げきったと思いますが…。

　こっち側に働きに来ている人たちが、南町もやられたと思って帰らなかったという話も聞いた。でも、山田線のこっち（大通）は地獄、むこう（南町）は天国くらいの違いがあった。

**臼木さん**　いろいろな物がなくなってから、あら、ここはこんな海に近かかったんだって思った。それまで海は遠いところにあると思っていましたから。水害はあっても津波は来るわけないと思っていたのに。あふれてくる水の勢い、あれが津波だったのかなと、今でも思うの。

**太田さん**　閉伊川が引いて、逆流して来る。その波頭が川面に白く線を引いたように来るんですよ。それがこのドブ川でもあったんでしょう。ただ瓦礫とかいろんな物が一緒に来たので見えなかった。2日前のときも同じような状況でしたが、その時は「3・11」が来るなんて全然、全然、思わなかったですね。

**臼木さん**　その晩は宮古小学校に泊まりました。そこでは涙が出る思いをしたの。お菓子を分け合って食べました。夜中に炊き出しがあって、「子どもとお年寄りに先にやって欲しい」と放送があったんです。本当にみなさんお利口さん、みんながそうしたんです。分け合って食べるってうまいね、すごいなと思いましたね。星がきれいでね、なんでこんなにきれいなんだろうと思うぐらい。ただ朝方は雪が降って、寒くて寒くてね。

　知人のまるこうさん（横町3、呉服店）が流されなかったから、毛布を借りに行こうとしたら、「解除になっていないから、外に出ては駄目だよ」と言われた。でも、「毛布を借りに行きます」と言ったら、通してくれた。小学校で幕や暗幕などありったけの物を出してくれて、みんなでかぶった。ストーブは2つくらいしかなかった。

　次の朝は体育館も危ないから校舎の3階に移るように言われけど、うちの家族は黒森の姉のところに行くことにした。「末広町に行っては駄目」と言われたけど、黒森に行く前に見に行ったの。もう歩けなかったですね。

**太田さん**　第八分団の屯所（大通3）は下に水が入ったが、2階は大丈夫だった。電気も暖房もなかったけど、夜になると必ず2、3人知ら

ない人が泊まって、朝になるといなくなっていた。全部で6~7人くらいいましたね。当時自主防災の資機材を八分団で預かっていて、その中に毛布が１００枚あったので、それを引っ張り出して使った。震災後、資機材は町内会と分けて保管している。大通2丁目、3丁目、南町までが八分団の管内ですが、寝たきりのお年寄りが1人ご自宅の1階で亡くなっています。

**火災が2件**

**太田さん**　次の日の夜中に火災があった。夕方、とても体がだるくて、これではもたないと思い、自宅の2階で6時くらいから寝ていたんです。起きたときは真っ暗で、ウーウーとポンプ車が通った。窓を開けて見たら、ガンガン燃えていた。こりゃあ大変だと現場（大通4）に行ったら、もうすでにうちのポンプ車も放水していた。角のガラス屋さんは古い家だったので、津波で簡単にビシャッとなった。そこに通電して出火したらしい。屯所に残っていた若い連中が、夜警でここを回った11時半ごろには、まだ火が出ていなかったそうです。このとき防災無線は津波警報だけで、火災については放送していないんです。

普通の火事は出動して放水して30分もあれば消える。ところが夜の12時から朝の7時まで放水した。この辺りはもろに風を受けたために火が広がったんですね。7時間の放水は第八分団だけじゃあない、第三分団、第九分団も来てくれた。

最初に近くの貯水槽からガッーと放水したら、貯水槽の水は10分くらいでなくなってしまった。そこで、山口川から水を引っ張ったけど、川も瓦礫で埋まっていて、水がチョロチョロしか流れてこない。なんとか堰を作ってやった。消防署が大型水槽車を持っていますから、普通は4、5本のホースで放水して、最後のブスブスとなっているのをそばに行ってガッーと止めの水をかける。ところが、あの日は余震が来ると、隊長が「地震、待機」、地震がおさまると「かかれ」の繰り返し、そんな感じでしたね。普段は野次馬がいるけど、真っ暗闇で誰もいないのが不気味でした。

それから2日後の黒田町の火事も朝方までかかりましたから、寒くて、寒くてね。お年寄りが1人亡くなりました。第八分団は志むら寿司（大通1）の横の山口川から、第三分団は宮古小学校のプールから水を引っ張りましたね。鉄筋のアパートでなかなか消えなかった。消防士たちはマスクをしてボンベを背負っていますから、この人たちが早く突入すれば終わるのに…。もう水がないですから手ぶらの分団は「待機せよ」ということに。待機中は黙って立っているわけですから、これはつらいですよ。

第八分団はなぜか田老の山火事にも「出動せよ」ときて、山火事だから下からの放水はできない、ヘリコプターで消すんですよ。午後から行って夕方までかかりましたが、その時に初めて田老の惨状を見ました。田老の入り口までポンプで入ることができた。警察官に頼まれておばあちゃんとお孫さんのご遺体を瓦礫の中から出すのを手伝って、戸板に乗せて通りまで運んだ。その時にご遺体を初めて見ました。道路はすでに自衛隊が入って整備されていた。

それから、地震で交通をストップしましたが、末広町は一方通行ですから、なにかのときにはこれを考えないと危ないですよ。

**1か月前後で店の再開**

**太田さん**　女房は従業員の実家のある山口に1晩、それから長根の姉さんの家に行きました。私の仕事は保険事業なので早くオープンしなければいけないから、とりあえず電話と机だけで、1か月かからないうちに再開した。書類がヘドロでドロドロになったけど捨てられないし、個人情報だから他の人に触らせるわけにはいかない。データがあったので、とりあえずお客さんの話を聞いて対応した。聞き役ですね。聞いてもらいたい人がたくさんいました。

末広町はいい方です。田老、鍬ヶ崎、重茂半島はもっと悲惨なんですから。その人たちが末広町に買い物に来て、わかっている人に話を聞いてもらいたい。身内を亡くした方はいっぱいいる。

家の前の駐車場に、自転車、蛍光管のダンボールなどのごみを車で

捨てにくる。それが毎日増えて山積みになった。それを見ると情けなかったですね。

**臼木さん**　毎日黒森から家族で片付けに来た。4月3日の誕生日までに帰りたかったんですが、1か月かかりましたね。手伝いに来る人もみな被災しているから、大工さんを頼んで泥出しもしてもらって、1か月してようやく畳が入って電気が戻った。そこで末広町に帰ってきて、商売も再開した。店はなにも残らなかったので「もうやめた！」って大きな声で宣言したら、お客さんが布団を買いに来た。もしかしたら布団が売れる時代がくるかもしれないと思ってね、悪いけど。宮町の倉庫にある在庫を出してきたらどんどん売れた。乾いていたものはなんでも売れました。

**太田さん**　分団長で一生に一度のこと、今まで経験したことがないことを経験させてもらった。1週間くらい経ってちょっと余裕ができたので、慰問がてら鍬ヶ崎の被災した第六分団、第七分団を訪ねたんです。変わり果てた鍬ヶ崎の街を見渡すと、警察官と赤半纏が4、5人で瓦礫の中の遺体探しをしていた。その人たちは自分の家が流されているにもかかわらず分団の活動をしている。赤半纏はすごいな、辛かったけど分団員になってよかったなと思いました。

　震災後、長靴とリュックサックに水を用意しています。

**臼木さん**　2リットルの大きなペットボトルを5個用意している。1か月は大丈夫だから毎月11日に新しい水に入れ替えるの。水がないのが一番大変でしたから。

**小成さん**　防災会として段ボール入りの5年保存の水とLEDの電気を用意しています。

**(4)　元田 利克さんの話**　昭和32（1957）年生

鍬ヶ崎日立浜　漁師、居酒屋ぶ～や（末広町3）

平成27（2015）年7月24日、ぶ～や店内で伺う。

**日立浜から脱出**

鍬ヶ崎日立浜で、昼間は夫婦で磯漁を、夜は末広町で居酒屋をやっている。震災まで住まいも日立浜だった。

　当日は、車で日立浜の家を出ると同時に地震がきた。家に戻って中を確認して浜に行った。2日前に結構大きい地震がありましたよね。あのときねえ、津波が20センチ来たんです。それで、大きい地震だったから、来ても1～2メートルかなって感じだった。それで、船を海の方に繋いであって、道具もみんな積んであったから、一応上げておくかなって、その作業をしていたんですよ。なんでかね、引き上げるロープが何回も切れて、すったもんだしているうちに、だんだん海が引いて行った。オー、何だ、来っところだなって思ってね、そいで、間に合わないから途中であきらめて、また船を繋ぎ直した。道具だけは持って、すぐそばの倉庫に入れてる最中に水が足元に来たったから、こりゃあ本気だなって思った。

　家のところはすぐね、浄土ヶ浜第3駐車場に上がってく道路があるんで、そこを上がればいいやと思った。道路わきにちょっとした川が通っているんですよ。水が足元まで来て、うわあ、車も簡単に浮くっけなあと思って、一端車を出して、そこの沢すぐだから、上がろうとしたら、目の前にこう見上げるようなのが来て、道路じゃあない、川のとこにすげえ水が盛り上がってて、びっくりした。後ろ側は浄土ヶ浜に行くところでいくらか高くなっているから、そっちにUターンした。車は途中でも浮きかけたけど、かろうじてビジターセンターの方を回って、第3駐車場にたどり着いた。それで着いたとたん、車のエンジンがガアッーとなって、参ったな。ぐるっと回って来たから冷蔵庫やら大きい建物があったんで、それで押さえられたんではねぇかな、途中なにもないところで止まれば終りだって感じだったからね。タイヤが埋まれば浮き上がるからもうだめだっていうからね。

　上にあがってきて、大きな木や葉っぱの間から海の方を見たら、最初に見えたのはカメイ（石油・ガソリン販売業）の油を備蓄しておく大きなタンク、あれが、はー、すごい勢いで流れて行った。

**流された自宅付近で女性を救助**

妻は税務署の申告で、陸中ビルにいた。携帯が通じなかったから、誰にも連絡が取れないし、暗くなってくるわ、雪は降ってくるわで、いの一番に、音はうるさくなったけども走るだけならと、車で探しに行った。中里の集会所みたいなところに行ってもいない。一緒に行った人が中里の人だから、そこにも行ったけどいなかった。妻の実家が熊野神社の上の方（桜町）で、そっちの家も心配だったから、山から下って行った。そこさ、息子が帰ってきた。

「おい、家、見に行くか」って言って。山側に細い道路があるんですよ。そこも歩く状態ではねえの、物だらけでね。ある程度行ったらば、「おい、家がねえ」って。そして浜どこの家まで下がって行った。うちの作業する倉庫がなくなっていて、その基礎の部分に下から流されてきたアパートの2階部分が引っかかって乗っていた。そこに足の不自由な70代の女性がひとりいた。向うの方から「おーい、そこに人がいるぞ！」と言う声がして、向い側にいた人たちも来て、そっから、救助が始まった。まだそれほど暗くなっていなかった。

「ドアを担架代わりにするからぶち破れ」って、取りあえずドアを外して、ドアに乗せてもつるつるすっから、足場もないような感じだからね。そこらここらの下には、うちの船の道具やロープ類があった。それを拾い集めて、「我慢してよ」って、その女性をドアに結わえた。4人で担架を持って、1人は先に行って、道路のごみを、通れるように避けて上まで行った。余震もしょっちゅう来るし、寒いし、大変だった。昔からの知り合いの家に連れて行き、「濡れているから入れてけろ」って、有無を言わせず置いてきた。

**妻の実家に避難**

それから、また妻を探しに行った。暗くなっても見つからなかったが、偶然携帯が繋がって第3駐車場で合流できた。息子は職場に行き、妻と桜町に戻った。義父が、赤ちゃんを連れていた家族を見かねて、家に入れていたので、家の中はいっぱいだった。そこで、その晩、俺は車の中に泊まった。

今度はうちの爺さん、父親がね、自転車で後藤医院に行った時間だから、おそらく帰る途中じゃないかなと見に行ったけど、わかんなくて、3日くらい探し歩いて、後藤医院にいることがわかった。それから日立浜の避難所になっていたパークホテルに連れて行った。「うちらも入れてけろ」って言ったら、「いっぱいです」って断られて、しょうがない、実家に戻った。

たまたま携帯が繋がって、妻の妹の旦那がテレビを見て、「大変なことになっている。大丈夫か」って言われて、「大丈夫もなにもない。家もなんにもない。流されたった。アハハっ」。「え、なんで笑っている」だって、笑うほかねえべ。仮設に入るまで桜町にいて、湧き水を汲みに行くのが日課だった。急な坂を重いタンクを持って歩くのに苦労した。

**船が盗まれて**

船の一隻が見つかった。日立浜の家の向かい側の瓦礫に埋もれていた。そのままにしておくと自衛隊にみなほかされっから、縄で吊って出してもらった。修理するとこがあったけど、ちょこっと修理すれば大丈夫だった。もう一隻はあとから聞いたんだけど、白浜に壊れてあった。船もいつ来っか見通しが立たないっうんで、修理した方が早いかなって思って、次に浜行ったらもうなかった。船外機から船からみんな、勝手に持って行って修理して売った人があんの、捕まったけどね。ちゃんとナンバーは付いているし、ああいうのは駄目なんです。

他にも、新しく船外機って、ほれエンジン、買って付けた人は、何日もしねえで、盗まれた。地元の人らでなくね、そういうのが入ったみたい。トラックに乗って来てバアッーとやってくるんですよ。うちらの仮設も入居する前に冷蔵庫やらを設置してあんの、それ持って行かれちゃった。

家も流され、船も流され、ここさ（ぶーや）来ている場合じゃあ、なかったもんね。浜の方が早く口開けにするという話だったので、急いで漁に出る準備をしたったが、結局のびのびになって。こっちは、はー、やめようかと思ったったの。だども、浜もいつ再開になんか、それよ

りこっちの方か早いかなと思って、みなさまに手伝ってもらって、こっちを先に、5月ごろに再開した。

**(5) 元田 千花子さんの話** 昭和32（1957）年生

居酒屋ぶ～や

平成27（2015）年10月11日、店内で伺う。

**市街地から鍬ヶ崎に**

地震のあと陸中ビルから歩いて宮古測候所（鍬ヶ崎下町）まで来て、「日立浜に帰る」って言ったら、「え、日立浜、ない、ない！」って言われた。そのときは津波のこともよくわかっていなかったので、なにを言われているのか不思議な感じだった。

日影の沢から鍬ヶ崎小学校に下りてくると、電線にブルーシートとか、布団みたいな物が引っかかっていた。なんなんだろうと思っていると、知り合いの息子さんに、「すごかったですよ、今水引きましたけど、校庭まで津波が来たんですよ」と言われて見たら、箪笥なんかが散乱していた。「実家に行こうと思うんだけど」と言ったら、「いや、無理だと思いますよ。プールサイドの方へ行ってみたらどうかな」って言われた。校庭に入ってプールサイドに行こうとしたら、近所の家が団子状態になって熊野神社の階段まで来ていた。測候所で、「日立浜なんて、ないない」と言われたのは、これなんだって、はじめてわかった。

足をガクガクさせながら体育館の横、プールサイドにある細い道を桜町に上がって行ったんです。あとから見たら鳥居がなくなっていたけど、その時は重なりあった家にびっくりして気がつかなかった。実家に帰ったら、「今、利克さんと俊吉が来て、探しに行ったよ」と言われた。そこで私も実家の裏山から蛸の浜の大橋に上って、第3駐車場から日立浜に下りたら、近所の人たちがいた。ちょうど見に行こうとしていた近所の男の子の力を借りて見に行きましょ。すごかったですね。6時前かな、雪がチラチラ降っていて、どうすっかなと思ってたら、旦那から携帯がきたんです。第3駐車場で会って、息子を職場に送ってから桜町に戻ったんです。

## 7 新町

新町は本町に隣接し、ともに早くから栄えた商業の中心地であった。山田線の開通をきっかけに商業の中心が末広町に移ったが、本町同様に古い蔵造りの商店が一部残っている。西側には黒田町がある。

震災前、平成23（2011）年3月1日現在の世帯数は85、人口は197名（男88、女109）であった。

「3・11」の津波の浸水は1、2丁目は最大2㍍。1階が壊滅状態となった家屋、店舗も多く、大きな被害が出ている。3、4丁目は山側からの傾斜があるため0～1・6㍍。

震災後、平成23（2011）年8月現在は85世帯、人口は198名（男87、女111）、平成27（2015）年3月1日現在の世帯数は88、人口は196名（男86、女110）である。

人口の増減の変化は少なく、世帯数は増えている。この数字から見ると震災の影響による世帯数・人口の増減は少ないと思われる。

**(1) 澤田 三夫さんの話** 昭和16（1941）年生

新町4 宮古ホテル沢田屋会長、新町通り町内会自治会長

平成27（2015）年4月25日、ホテルロビーで伺う。

**100名の宴会がキャンセル**

地震のときは、硬式テニスをやるもんですから、藤原のテニスコートに行く途中だったんです。港近くの海岸にあるコートは、街の方から見て防波堤の外側なんですよ。停電で信号機が切れたので、大きい地震だと思って、車を止めて脇に寄ったら、ぐらぐらっときた途端に岩（石崎鼻）が突然崩れたんです。揺れが治まってから、これはよっぽど大きいなと引き返して、宮古大橋を渡ったんです。そのときは車が1台も通ってなくて、へたするとこの大橋も途中で壊れるじゃあないかなと思いながら帰ってきたんですよ。「津波がくるんじゃあないかな」と家の者と話をしていましたが、それでも、街にはまだ人も結構歩いていて、普通の状態でした。今まで津波情報が出ても、30㌢とか40㌢、最高でも50㌢くらいだった。今回は地震が大きかったので、50

チセン程度ではないと思いましたけど、こんなに大きくなるとは思いませんでした。ただ、すぐそこの東北銀行（新町２）の重油タンクの蓋が飛んで、灯油が散らばっていましたので、やはり大きな地震だったんだと思いました。

当日、泊まりのお客様はほとんどなくて、３月11日が市議会の最後の日で、市会議員さんたちがうちでご苦労会をするんですね。約10テーブル、１００名ぐらいの予約が入っていた。宮古市の職員さんが「すみません、緊急事態なのでキャンセルにしてください」と言いに来た。それが３時頃、津波の来る前だったから、うちは料理を作って、テーブルも準備してあったんです。職員さんがお帰りになって、それからですね、津波が来たのは。

ホテルは新町通りから50チセンくらい高くなっています。水は新町通りから上がってきて、一番高いときはうちのロビーに５チセンくらいまで来て、それからスーッと引くようになくなっていったんです。この辺りは防波堤を少しずつあふれてきたような状態ですね。水の引けるのも早い方だったようです。

**低体温の女性が担ぎ込まれた**

「沢田屋さん、ロビーを貸してくれませんか」って混沌としている女性が担ぎ込まれた。服は波でみんな取られていた。松井内科（新町４）の先生が診て、少しでも早く大きな病院に連れて行かなければいけないと、聴診器を持って、「緊急だ！　緊急だ！」と言ってね、町内の小成商店の車を借りて県立宮古病院に連れて行ったらしいんですけど、翌日聞いたら駄目だったそうです。

亡くなられた方は大通の店（新町２）に勤めている方で、たまたまテニス仲間でお顔は存じ上げている方だった。シャッターを下しているところに水が来て被害にあったと聞いています。津波の水は見ているとゆっくりだけど、腰のあたりまでくると動けなくなるらしいんですね。

交差点の電柱のところに車が８台くらい積み重なっていましたし、その夜は東北銀行のセコムかなんか、危機を知らせるブザーがうるさかった。銀行員が鍵を閉めて帰った後に、津波が来て作動したせいでしょう。夜遅くまで電池が切れるまでずっと鳴っていました。

避難場所が宮古小学校なので、宴会に用意した料理は避難所に提供しました。停電していましたが、料理用のガスボンベのコンロがありましたから、暖かい料理を持っていくことができました。

**工事関係者の宿泊所に**

３月12日、13日の火事があったため、東北電力の作業員たちが配線工事に来たんですが、「作業員たちが車の中では眠れない。夜遅く来ても、ひとりずつライトをつけているから暗い中でも出入りができる。泊まるだけでいいから」と頼まれた。ここもお風呂がない、電気もない、水もない。１階はまだ泥をかぶった状態でしたが、屋上には８トンのタンクがあって、商売はしていませんから、それがなくなるまで水洗トイレが使えたんですよ。寝るだけという了解を取って、14日から泊まっていただいた。

写真５　震災後ホテルなど高い建物に設置された津波シェルターのプレート　宮古ホテル沢田屋

３月20日に電気、25日に水道、29日には電気が復旧した。ホテルは４月９日から食事が提供できるようになり、その日から全国各地の日本自治団体労働組合の方々が宿泊され、ここが本部となりました。この方々は各地区の避難所の受付や夜警の仕事をしている様子でした。

その間、地下にあった暖房やお風呂の重油を、地上に上げないと消防署の許可が下りないので、全部地上に出した。

床下に入れてあった厨房の電源が浸水して駄目になったので、ガスや電気機器を入れ替えて、フロントの絨毯の張り替えをして、5月の連休前に営業を再開しました。

ホテルの前にある自宅は床上50㌢浸水したので、私と妻もホテルで寝泊まりした。町内の自治会長を務めているので、自治会を通してボランティアの方々に片付けにきていただいた。全国からこんなに応援隊が来てくれたことには、涙がでるほど有難かった。

震災後小学校からの依頼で、津波の一時的な避難場所として「津波シェルター」のプレートが置いてあります（写真5）。

昔はこの辺りが中心地で蔵がたくさんありましたが、震災後にほとんど解体してしまった。道路上に津波の置き土産、ヘドロの跡がへばりついて残っています。

**(2) 松井 忠宣さんの話** 昭和24（1949）年生

新町4　松井内科医院医師

平成27（2015）年11月12日、医院内で伺う。

**水に呑まれた女性**

向町は閉伊川に近く浸水がひどかった。夕方4時頃、向町で水の中に浮いていた人を、消防隊員が腰のあたりまで水に浸かりながら引き上げて、中央通りの十字路のところまで10㍍くらいの距離を運んできた。さらにインテリアコナリ（本町1）のところから坂を上ってきて、「手伝ってください」、「この人を救急隊か医者に連れて行ってくれ」と、周りにいた人たちに女性をバトンタッチすると、急いで次の救助に向かった。

男性が4、5人で女性を担いでホテル沢田屋まで運んだ。私もちょうどそこに居合わせたので、「先生、確認をお願いします」と言われて、沢田屋さんに入った。ずいぶん水を含んでいたという印象を受けていた。

毛布をもってきてもらい、ロビーのソファーの上に毛布ごと置いて、聴診器で診るともうすっかり低体温で呼吸音もなし、肺音もないという状態だった。私が持っているのは聴診器しかないもんですから、「ライトないですか」と言って、沢田屋さんが貸してくれたのか、私自身がペンライトを持っていたのか覚えていないが、ライトで診たら散瞳しているんですよね。もうその時点で意識がなかった。その場合は救急医療機器があれば、気管切開をやるんでしょうが、なにもないし、なにかができる段階でもなかった。あとは宮古病院に連れて行くしかなかったが、電話も携帯もなにも通じない状態だった。その場にいたインテリアコナリの従業員さんが、四角い大きいライトバンを用意してくれて、県立宮古病院に運んだ。

**ミニパトカーに先導されて宮古病院へ**

コナリの従業員さんが運転して、私は聴診器をぶら下げて助手席に乗った。常安寺の裏道を行くと、前に車がいたので、運転者にプップッと鳴らしてもらい、私は窓を開けて、「おーい」って、聴診器を振って追い抜こうとするんだけど、それがなかなか通じない。ちょうど2台先にミニパトカーが見えたので、「鳴らせ」と言って、ビー、ビービー、ビービーと警笛をしつこく鳴らしてもらった。するとそれが騒音になるので、ミニパトカーがピタッと止まった。女性警官に聴診器を見せて、「新町で開業している内科医だが、溺死の状態になっている人がいるから先導してくれ」ってしゃべった。そしたら女性警官が、「先導します」って、ウーウーウーってサイレンを鳴らしてくれたので、ノンストップで病院に行った。

病院の門前のところまで行ったら、すでにね、バンだの、軽トラックが止っていて、後ろに乗せてきた水を含んだ状態の人たちを下しているんです。私は3番目だった。「ちょっと待ってください。順番に診ます」と病院の先生に言われた。順番がきて、「心肺停止で、散瞳を確認した」と状態を説明すると、「どこの誰ですか」と聞かれた。「消防隊員からバトンタッチされたので、女性の名前もなにも知らない」と事情を話すと、その状況や私の氏名住所、そして病院に到着した時刻などを全部黒板に書かれました。私はそこまでで、あとは病院に預け

て帰宅したんです。

後日その女性の写真を見せられたが、わからなかった。引き上げられた時には、水を飲んでいたため写真とはすっかり変わっていた。津波は海水と閉伊川の淡水80％が一緒になった水なので、水膨れがひどかった。海水だけだったら、浸透圧の関係で1、2日は変わらないそうです。

**(3) 田中 竜さんの話** 昭和31（1956）年生

新町1 ㈲小成周蔵商店（インテリアコナリ）従業員

平成28（2016）年3月14日、事務所で伺う。

**ライトバンを運転して県立宮古病院に**

地震のあと仕事を再開していたが、外でなにか声がするので表に出たら、地面がキラキラキラキラ光っていた。水だった。津波だ！と思った。それから、ちょうど店のシャッターを閉めたときに、市役所の方から車が流れてきた。同時に向町の方からも波が来た。目の前の通りは両方から水が来るので、上に行くしかない。瞬時の判断で坂道を上がって逃げた。店には2メートル10センチ水が入った。

水が引いてから上に逃げていた人たちが、だんだん集まってきた。東北銀行のあたりで足が濡れる状態でした。ちょうどホテル沢田屋さんの辺りからコナリの店の方を見ていると、水につかった女性が運ばれてきて、その辺りにいた人たちも手伝って、ホテル沢田屋さんに運び込んだ。

「病院に連れて行った方がいい」と言っているところに我々もいて、コナリのライトバンを用意して、同僚の佐藤元が運転して、松井先生、私と金沢仁ともう1人そこに居合わせた男性と5人で宮古病院に行ったんです。

**(4) 中村 克美さんの話** 昭和44（1969）年生

新町4 中村屋せんべい店、第三分団員

平成26（2014）年6月19日、第三分団屯所で伺う。

**すぐに救助活動**

地震の発生時は、向町の鉄筋のコンクリートの建物の中にいたんですけど、すごい揺れでした。1週間くらい前の地震とは揺れも長さも違っていた。これは津波がくるなと思いましたね。通常第三分団屯所までは信号があるので、4、5分かかるんですけど、信号が止まったので、1分ちょっとで来た。大津波警報が出たので、「逃げてください」って放送かけて、ポンプ車で赤沼分団長と管内を回りました。

そこから津波が来るまで30分もなかったんです。この前の地震のときは、注意報が出たけど津波が来なかったので、ご年配の方たちは逃げないでいた。でも、あまりにも大きな地震だから、「取りあえず宮古小学校まで行こう」って、この通りのおじいちゃん、おばあちゃんを全部連れて行ったんです。

津波は3時20何分かに入ってきたんです。ひまわり荘（黒田町4）の裏の駐車場でおじいちゃんの手を引っ張って歩いているとき、分団長の「津波だ！」って声で、水に気がついたんです。魚を入れるヨコダ（ケース）がサッーと走って、黒い水がグッーと流れてきた。160センチくらいの塀があったので、逃げれなくなっていたら、分団長に、「塀乗り越えて行くべし」って言われて、塀を乗り越えた瞬間、水はもう膝の上まで来ていた。急いで屯所まで逃げてきた。おじいちゃんは息子さんと一緒にアパートの2階に上がってもらったので無事だった。

逃げた時には、宮古の町は道路の下に川が流れていて、側溝ともつながっているので川が逆流して、町の方からも水が回ってきた。水は第三分団の屯所の前にある信号のところには10センチくらい、一番遠くは魚菜市場の前まで来た。

**三日三晩屯所に詰める**

逃げ遅れた人の確認をして、夜になって水が引き始めてから救助に行ったんです。うちの分団は水門がないので、ボートを持っていない。それで、お年寄りをおんぶしたり、水の中を一緒に手を引いて歩ってきたりして助けた。それから夜は危ないから一時待機ということになっ

た。

次の日の朝から、逃げ遅れた方とか、行方不明者の捜索をしてくれと言われて、3、4日はその作業が続きました。第二分団が被災しているので、消防署から「向町の行方不明者の捜索に行ってくれ」という指示があって、何個かの分団で探しに行きました。

屯所の上のコミュニティーも避難所だったので、具合の悪い人が出ると、救急車が足りなかったので、ポンプ車の後ろを空けて何回も病院との間を行ったり来たりした。それは結構きつかった。火事も2回あり、三日三晩寝られない状況だった。分団員はみんな食えない、飲めない。水を飲むこともトイレに行くことも忘れていたくらいだった。汚い話ですが、久しぶりに、「トイレに行くべぇ」って、するとコーヒーみたいなおしっこが出た。今は笑話というか思い出話になっていますけど。それもみんな先輩から、「こういうときはこうなるよ」と飲み会で教わっていた。

地震のとき分団員はほぼみんな来ていましたが、土木関係の仕事が多いので、だんだん瓦礫撤去に駆り出されていき、10日過ぎた頃には、ほぼこの近辺のやつらだけで活動してましたね。

**2か所で火事**

大通4丁目で1か所と黒田町で1か所火事があった。水が足りなくて消火に6、7時間もかかった。多分漏電というか、建物が水を含んでいたので通電して出火したんでしょうね。電気屋さんも、「電気通します」って言わないで通すんですよ。無線とか放送がない状況の中で工事をやっていたので、それも不可抗力で仕方がなかったと思う。黒田町の現場には早くに着いたんですが、ただ、当時冬だったので灯油がいっぱい流れてきて、建物自体が微妙に水を吸っているので揮発し始めて、行ったときにはもうひでぇ火だった。道路挟んで、4、5メートルの反対側の建物が焦げたくらいひどくて、道路標識も焦げて溶けている。

大通の火事は400～500メートル近くある宮古小学校のプールからホースを引っ張ってもらって消した。7棟か8棟燃えました。消火の間も余震で揺れていた。次の日に蒸気が上がっているから、「もう1回消しに行け」ってホース伸ばして行ったんですけど、大きな余震が来たのでホースをそのまま置いて、みんなで逃げてきた。「おっかなかったあ」。

今でもですが、訓練のサイレンで、「テェテェテェテ、テレレン、地震きます」とか、津波の「アーアー」とか長いサイレンが流れると、消防団員はみんなぐっとなる。一生に1回で済めばいいですけど。今はもう喉元過ぎているので、みんな忘れたいのが半分、忘れちゃいけないのが半分。みんなで飲むと「おっかねえな」って言っています。

**店の被害と復興**

住まいは南町なんですが、新町の実家で家業のせんべい屋をやっています。そこはおじいさんが昭和8（1933）年10月に建てた家で、3月に基礎を造っていたときに津波がきて2階に逃げた。そこで「土間を上げろ」ということになり、普通の家より一尺（33センチ）高くしてある。そのために上がりも高くなっていて、その高さで工場も作ってあるんで、入口には水が160センチ来たけど、家の中の浸水は120センチで済みましたね。器械は1台駄目になったけど、ほとんどは残った。じいちゃんの機転のおかげですね。

2、3年前、宮古市で、「20メートルクラスの津波はここまで来る」っていうシミュレーションがあったんですが、今回はそれ以上で、水の高さは想定より1・20～1・40メートルくらい高かった。うちも20センチ～30センチくらいと言われてたんですが、ここも160センチまで入った。やっぱり想定以上、想定外の津波だった。

家の玄関は西向きだから、水が渦を巻いて入ってきたので、泥がひどかった。11日の夜に避難所でせんべいを配って、工場の中はすかすかだったので片付けは早かった。ただ、やっと10日目から片付け始めたので、泥が固まってしまっていた。スコップですくって、瓦礫や資材も入っていたが、一斗缶に何十個も出した。水につかった資材は細かい泥にまみれて全部アウト、全部廃棄した。

3日3晩はまるまる屯所にいて、それ以降は1か月くらい毎日、店と屯所を行ったり来たりしていた。仕事は全然していませんでしたが、ちょうど分団長もお菓子屋さんだったので、「時間見て動け」って言ってくれた。

せんべいの型を洗浄して焼いて、また洗浄して焼いてという作業を1か月くらい繰り返した。海水を被った型は塩水で錆びが出てしまうので、何回も繰り返してようやく使えるようになった。子どもたちや親戚も手伝ってくれたので、ゴールデンウィーク前になんとかある程度焼けて販売もできた。完璧になったのは夏以降だった。お菓子屋さんは釜や設備の回復に時間がかかって、補助金もずいぶん遅かったので大変だったんですが、うちは手焼きなので、他のお菓子屋さんより早く再開できたと思う。町の人たちも卸し先も待っていてくれた。せんべいの材料だけでなく、箱やシールの材料屋さんもあちこちから都合つけて運んでくれて、みんなが助けてくれた。

仕事ができるってことはいいことです。つらかったことも忘れる。「補助金が出るのでこれを機に包装する器械を買うか」なんて言って、気を紛らわしていました。

今回、倉庫の中からおじいさんの時代の型が見つかった。昔の鋳物で雑なんですけど、花札の藤やあやめ、小さい桜、亀甲、船漕いでいる型などがあった。いつかその型を起こして焼いてみようと思っています。

**今思うこと**

救助に行っても逃げない方もいた。アパート住まいの方は外から来る方もいるので、仲よくなるのも難しい。とにかく生きていて逃げるしかない。警報が出たらすぐに避難をしてくれれば、ある程度の距離があっても、いま以上に助かったと思う。「まあ大丈夫かな、そろそろ行くか」っていう人たちは、みんな流されている。逃げる途中で亡くなった方もいる。それと2階に上がっていてくれれば、声かけに行って助けることもできる。このご時世なので2、3日待っていれば、食べ物は回ってくるので、とりあえず命だけ持っていればなんとかなる。

喉元過ぎた頃がおっかない。1年目、2年目くらいは意識しているけど、5年も経つと忘れていく。「備蓄だけはしておきなさい」と言っても、地区によっては備蓄した物さえも流されてしまう。宮古小学校も水が入ったし、確実に安全なところはない。道路を整備して、1段階、2段階、3段階というように避難することも考えなければいけないと思う。でもこれは経験したから言えることで、私も今までは津波はここまでは来ないと思っていました。

## 8　黒田町

新町や本町とともに古くから栄えていた。町内は町内会・自治会の2つの組織がある。隣接する北側の横町には避難所となった宮古小学校や第三分団の屯所（管轄区域＝新町、黒田町、沢田、横町、保久田、小沢1、2丁目、緑ヶ丘、五月町）がある。

震災前、平成23（2011）年3月1日現在の世帯数は136、人口は276名（男120、女156）であった。

「3・11」の津波の浸水は1メートル以上。1階が壊滅状態となった家屋、店舗も多く、大きな被害が出ている。13日には火災も発生した。

震災時の死亡者はゼロであったが、その後関連死は数人ある。

震災後、平成23（2011）年8月は133世帯、人口は269名（男120、女149）、平成27（2015）年3月1日現在の世帯数は123、人口は238名（男104、女134）である。

### (1)　赤沼 利彦さんの話　昭和22（1947）年生

黒田町7　つちや本舗代表

宮古市町内自治会連合会副会長、前第三分団分団長

平成27（2015）年3月9日、店内で伺う。

**管内の屯所に33日間詰める**

父親が22か23歳の時に田老村で昭和8（1933）年の津波にあって、家族5人を亡くしているので、津波のことは両親からよく聞いていま

す。3月11日は人生の中で初めての大きな地震で、家がつぶれるんじゃないかと思うぐらいだった。間違いなく津波がくるなと思った。地震が治まってすぐに自宅の前から奥を見渡して、「異常なし」と確認した。向町に女房のお母さんと兄さんがいるもんですから、「すぐに連れてこい」と女房を迎えに行かせ、私は店のシャッターを下ろして、すぐ屯所（横町4）に飛んでいった。分団員の中村君がシャッターを開けていた。津波が来るということを前提に、2人でサイレンを鳴らして管内を回った。そのときは防災無線が聞こえていませんので、「すぐ宮古小学校に逃げてください」とマイクで言いながら管内を2回ほど回った。

みなさんが宮古小学校に避難をして来るので、屯所の3階においてある宮古市の自主防災の毛布を全部出させたが、これでは足りない。まだ水が来ていないぎりぎりのときだったので、3人の分団員に、「防災会館までポンプ車で行って、毛布をみんな持ってこい」と取りに行かせた。私はその間に職員の人たちの所に行って、気合を入れて、「お湯を沸かして、水を出して、みなさん協力してください」と言ったんです。宮古小学校の先生たちが一番よく仕事をしてくれたと思うんです。

分団員3人で一人暮らしのお年寄りを助けに行ったとき、たまたま義理の息子さんがお出でになっていた。助けようと思って側まで行ったんですが、そのとき黒い水がブァーと入ってきましたので、これはまずいと思って、1・70メートルくらいある駐車場のブロック塀を乗り越えて、屯所まで戻ってきた。その時にはもう屯所のとこまで水が上がっていました。2人に「あとで迎えに来るから」と言って、2階に避難してもらったが、それどころではなくなった。さぞ寒い思いをされただろうと思っている。

宮古小学校で避難してくる人たちを体育館に入れたり、毛布を配ったりしているうちに暗くなったので、逃げてくる人のために、分団の発電機で校門を照らした。

**町の見回り**

次の日の朝、避難している人たちの朝食に1世帯におにぎり1個、コップに温かいソーメンを出した。それから川井と、新里地区の人たちが米を出し合って、おにぎりを差し入れてくれた。

分団は春と秋の全国火災予防週間に管内の火まわりの点検で独居老人、老人2人世帯の確認をしているので、各家の状況を把握している。そこで、管内の独り暮らしの方103人くらいの無事を確認して回った。異常がなかったので、向町、新川町の見回りに行った。

大通から向町に行く途中は車が何台も重なっていて、その車の中には誰かいるだろうと感じたんですが、とても入れなかった。町の角にはご遺体が何体もあった。瓦礫が3メートル以上も積み重なっていて、入っていけないところもあった。それから一番被害の大きい向町に行くと、家が流されて土台ごと動いているので、どこの町を歩いているのか、わからない状態でした。

家の中に入るとまず仏壇のところに行って、位牌があるかどうかを見る。もし位牌がなければそれを持って逃げている。そういうことを仮定しながら探したんです。だいたいはうつ伏せで亡くなっている。つらかった。遺体を見つけて消防署に無線で連絡すると、リサイクルのごみ収集車が来るので、最初はそれに乗せた。それから2日くらい後に警察が動き出したので、警察の遺体収集車が来るようになり、その後に自衛隊も来ました。

地震当日は道路が交通止めになり、次の日からも津波警報が出る度に封鎖になり、常安寺に行く道しか通れなかったのでパニックになっていた。そこで、分団が自分の地域をなんとかしなければと思い、消防署や警察を応援した。交通整理で声がすっかり枯れてしまった。分団員の心意気ですね。

大きな火事が2回、大通4丁目と黒田町であった。地震で停電して、それに伴って断水もしていたため、消火栓からの放水ができなかった。そこで宮古小学校のプールから引っ張って消火したが、半分ぐらい使ったところで、「トイレを流す水なので、被災者のためにそれ以上使わな

いでください」と言われた。そこで、旧山口川（庵屋川）からの放水に切り替えた。水が不足して消火に時間がかかった。

消防署から全分団に向けて出動をかけてもらった。無線を聞いていた津軽石、鍬ヶ崎、高浜地区など被災した分団も来てくれた。大通の火事は漏電によるものだった。その後電気の復旧に時間がかかり、そのために全体的な復旧も大きく遅れた。

震災後すぐに、災害FM（現宮古エフエム放送）が繋がって、局から要望を聞かれたので、「津波で濡れて電気の差込口が錆びているので、電気が直接来ると火災が起きる。一旦家に帰ってブレーカーだけは下してください」とFM放送で伝えてもらうように頼んだ。

**家族と仕事**

次の日の朝早くに家を見に来たら、店の浸水は1・20メートルくらい、ちょうど菓子ケースのところまで水が来て、中の物はすべて動いていた。灯油臭い匂いがしていた。土台を高く建てた家だけど、畳にも台所にも倉庫にも工場にも水が入っていた。8日か9日に届いて倉庫に置いた商品用の箱5千箱以上がすべてドーッと倒れていて、ああ、こりゃあ、駄目だと思った。その時ブレーカーを下した。

家族は宮古小学校に避難した。女房は4日後に自宅の2階に帰ってきて、息子夫婦は子どもが学校に上がるときだったので、電気が回復するまで宮古小学校にいたが、その後は倉庫の2階で暮らした。私は33日間分団で寝泊まりした。最終的に屯所に残ったのは3人くらいだった。2日目から魚菜市場で炊き出しをしてくれたので、食べる物はそこからもらった。

電話も不通、菓子製造の機械も駄目になった。仕事は6月下旬ごろに再開した。私は分団の活動をしていたので、家族には苦労かけた。ボランティアの人たちには町内の下水を掃除していただいて感謝しています。震災後、菓子の栞に感謝の気持ちを込めて次のようなお礼の言葉を入れている。

「お買い上げいただきまして「ありがとう」ございます。

3月11日の東日本大震災より、自衛隊・警察・消防・ボランティア等々の皆様方をはじめ、日本国中の方々より御厚情を賜りながら一歩一歩前進して復興する事ができました。誠にありがとうございます。つちや本舗」

## 9　消防団の活躍―第八分団を一例として―

震災時各分団の活躍は目覚ましい。多くの住民を救出し支えた。分団員の献身的な活躍は常日頃の活動に裏付けされたものであり、住民との信頼関係に基づいたものである。（分団員の活動…本章、3-(2)、6-(1)、(3)、7-(4)、8-(1)）

第八分団の管轄区域は末広町、大通3丁目、大通4丁目、南町である。日常的な主な活動は他の分団同様に管内を見回る、管内及び火災の要請に出動し消火に当たる。12月から3月は毎晩交代で屯所に詰め、夜警をするなどである。

3月11日地震発生時から翌日明け方まで、いつもの消火活動にはない長い1日だった。当時の分団員は14名、年齢は28～67歳であった。

### □　第八分団のみなさんの話

**太田 憲一郎さん　分団長**
**和山 悟さん**　昭和46（1971）年生　**分団班長**
大通3丁目　東海自動車工業㈱代表取締役
**黒渕 祐司さん**　昭和55（1980）年生　**分団員**
大通3丁目　ホテルビックウェーブ　東海電業㈱
平成26（2014）年11月20日、第八分団屯所で伺う。

**長い1日**

**太田さん**　地震の後、第八分団は8人で水門を監視していた。

水が最初はシャシャシャときて、次がウワッーと、3番目に真っ黒いのがバッーと来たんです。そこで、私の号令で土手の上にいた分団員たちが下に避難した。2、3人が土手下の道路に止めたポンプ車に乗り、私は他の分団員と線路の方に逃げた。数分後、線路に上がってみ

たら、鉄橋がなくなっていた。

**黒渕さん**　水門に行く前に、悟さんが運転して2人で1回管内を回っているんですよ。「津波警報が出ているので避難してください」って。マイクでしゃべりながら回って、ちょうど水門のところに着いて、俺だけ降りたよね、悟さんは乗っていたよね。

**和山さん**　なぜか、乗りっぱなしだったよね。

**黒渕さん**　津波が来たのは見ていないんですよ。ポンプ車から降りた瞬間、分団長の「逃げろ！」って声でポンプ車に乗って、悟さんに「行くべえ」って言ったら、もう1人走ってきて、後に乗ったのが見えたんですよ。

**太田さん**　吉濱部長だ。光雄さんは上にいたんだよ、確かに。

**黒渕さん**　1人後ろに乗るのを待って、普段であれば乗ったかどうか確かめるんですけど、そのときは確かめてない。で、多分乗ったということで、土手沿いを走っている間に、サッパ船が土手に上がった。その頭がピロっと見えたのを横に見ながら、バシャバシャと波をかぶりながら走ったんです。

**和山さん**　土手沿いに行って最初の角を曲がった。そこまでの間が本当に生きるか死ぬかという異常な緊張で、すごく長く感じだけど、角を抜けてからへんに冷静になった。南町まで波が来たということは大通全部に波が来ていると思った。そこで祐司君が「右行きますか？左行きますか？」と聞いたんだべ。俺はその時「右は駄目！」って言ったんだ。大通はもう水没しているって判断したんです。そこからは冷静になった。そのままずっと行って、オートバックスの前から表通りに出て、出逢い橋を越えて駅前に戻ってきた。末広町に確実に戻るための迂回路だったんです。運転していて、一番長く感じたのは、土手沿いに津波を被りながら走っていた数10メートルです。

今だから言うけどね、あきらめてアクセル抜きかけたんだよ。アクセル抜きかけたとき、でもな、祐司君と後ろに光男さんも乗っているしなって。ここで3人とも死んだら、俺は2人の家族に何と言われるかわからない。そう思ったら、アクセル踏みっぱなしになった。

**黒渕さん**　橋も渋滞で通れなかったですもんね。ルート的にもここしかなかったから、避けて、避けて、警察管がいたので「南町の堤防も水が上がっているから避難させてくれ」ってマイクでしゃべって、末広町に下ったのは覚えている。末広町には確実に入ったんですよ。

**和山さん**　そのとき末広町にはまだ水が来ていなかった。

**黒渕さん**　まだ人がいましたね。店の人たち、多分店の心配もあるから、何人か外にいましたよね。

**和山さん**　波を被っていたから必死で、「堤防を越えた、逃げろ！」ってマイクで言った。

**黒渕さん**　なんて言ったか覚えていないですね。

**和山さん**　はっきり覚えているのはね、「堤防越えた、逃げろ！」ってしゃべったんだよ。

**太田さん**　絶叫型でね。俺っちのカカアも聞いているぞ。「逃げろ！逃げろ！」というのを。臼木さんも聞いている。

**黒渕さん**　警察にストップされていたので、通りに車は1台も走っていなかった。

**太田さん**　車が1台もなくて、スピーカーで騒げば、俺っちまで聞こえることは聞こえるけど。

**和山さん**　みんな「えっ！」っていう顔してこっちを見て「なにをいっているんだ、お前たちは」みたいな。こっちも必死だった。その人たちが避難したかどうかは覚えていないですね。

すごい勢いで避難して行ったのをはっきり覚えているのは、むしろ南町を走っていた間です。オートバックスに突き当たる辺りで、そこの整備士さんたちが全速力でダッシュしているから、そこら辺にいた人たちがみんなつられて八幡さま（横山八幡宮）に向かって走っていった。後日宮司さんに聞いたら結構な人数が八幡さまに避難して来たそうです。

津波が到達する前に管内の南町から末広町を通っている間は、あくまで通り一遍のアナウンスなわけですよ。まさに文章を読むだけ。正直言って、誰一人動かなかったね。ところが、「堤防越えた、逃げろ！」っ

て言ったら、みんな本気で逃げだした。

**太田さん**　我々が土手で見た波と、末広町に入ってきた波はタイムラグがある。一気に来たわけではないんですよ。

**黒渕さん**　ただ末広町でどこまで入っていったかを覚えていないんです。船が見えて、波が見えて、…。

**和山さん**　なんだかわからないけど、前からありえないモノがありえない勢いで迫ってくるっていうのだけはわかった。「だめだ、下がろう」と言ってバックした。やばいのが来た、これは駄目だっていうのだけは覚えています。

**黒渕さん**　俺がバックの誘導をして、方向を変えたのは覚えている。多分花の木通だったと思いますが。それで駅前のロータリーに戻ったんですよ。

**和山さん**　駅前のロータリーのカリヤビルとみかみ酒屋（栄町２）の前に、腰を抜かして立てなくなっているお年寄りが何人かいたんです。その人たちをポンプ車に乗せたんですが、みんなびっくりして、ほんとに腰が抜けて一歩も動けない状態だった。俺も興奮していて、何人乗せたかは、全く覚えていない、記憶にないんです。

**黒渕さん**　その辺が俺もあやふやです。

**和山さん**　とにかく夢中で、その場にいた人を乗せられるだけポンプ車に乗せてから消防署まで行った。ところが、消防署が状況をまったく把握していなくて…。

**黒渕さん**　多分津波が来たときに、もう無線が切れたと思うんですよ。

**和山さん**　我々のポンプ車を見た瞬間、消防署員がふっ飛んできて、「状況がわからないので申し訳ないけど、２階に来て教えてくれ」と言われた。第八分団が来たということは、なにかが起こって、見てきたっていうのがあったんでしょう。

　まずはポンプに乗せた人たちを避難所に連れて行かなければと思って、宮古小学校に行ったんです。「ここまでくれば大丈夫、避難所ですから」って降ろそうとしたんですが、そこに津波が来た。

**黒渕さん**　俺らが宮古小学校に行ったときは、もう校庭まで水が入っていた。

**和山さん**　校庭まで水が上がってきているのに、「ここまで来れば安心だ、よかったね」と、のろのろ歩いている人がいっぱいいてさ、祐司君が「だめだ、走れ！」って、マイクでしゃべったんだ。

**太田さん**　家内が社員と２人で宮古小学校に逃げる途中、山口川がもうゴボゴボ、ゴボゴボとなっていたので、やっぱり来ているんだという感覚で小学校に入ったら、水が来たと言っていた。

**和山さん**　そのタイミングでわれわれが宮古小学校に行った。そこに末広町の人たちがいたんだ。

**太田さん**　末広町の人たちは、まさかここまで水は来ないと、みんな思っていたんです。

**和山さん**　宮古小学校でポンプ車から、何人かは降りたんですが、まだ中で動けない人がいて、結局もう一度消防署前に戻ったんです。ここなら水は絶対に来ないからって。それから向かい側の合同庁舎に行き、「申し訳ないけど、腰の抜けて立てないお年寄りがいるから中に収容してくれないか、宮古小学校にも津波が来ているから」って言って、合庁さんに会議室を開放してもらった。そこで岩手県にも状況が伝わって、空会議室を全部開放してくれたんです。我々は人を降ろしてから宮古第一病院（旧加藤病院・保久田）の角に行った。

**黒渕さん**　それから波が来たからって、魚菜市場（五月町）の方に逃げたんだよね。

**和山さん**　第一病院前、ここがおそらく波の来た最終到達地点だね。

**黒渕さん**　魚菜市場も側溝まで来たけど、道路にきたのは第一病院前でしょうね。

**和山さん**　魚菜市場駐車場の角で完全に道をふさぐようにポンプを止めて、アナウンスを続けた。

**黒渕さん**　そこは宮古病院の方に抜ける道路なので、多分みんなそこを行きたくて来たんだと思うんですが、水が来ていてこの先は行けないからと、車を止めていたんです。

**和山さん**　「ここから先は波が来ているから」と返すようにした。ただ

それだと、迷いに迷って何回も行ったり来たりしている車がいたので、30分くらい経ったところで、バイパスに直結している道路にポンプ車を移動した。

駅前通りに戻ってきたのはちゃんと理由があった。以前市役所の防災計画を聞いた時に、市内で駅前通りが一番高い土地だと記憶していた。ここなら大丈夫だろう、もしここが水にかぶったら市内は全滅だろうという判断だった。だから、駅前通りから声が聞こえてくれば、ここに寄ってくるだろうという頭がありました。それで、「この通りを通って避難しろ」という案内を続けた。

**水が引き始めてから**

**黒渕さん**　車の流れがとりあえず安定したのと、水が引き始めるのを見て、再び駅前に戻った。

**和山さん**　ポンプ車は駅に止めて、そのあとは第八分団の屯所（大通３）まで歩いていった。

**太田さん**　真っ暗になってから、その辺りで我々と合流したんですね。私は水門から逃げて線路を伝って、ビックウェーブのところの柵を越えて来た。分団員４人で、「すげえなあ、ひでぇことになったなあ」と言いながら、腰までジャブジャブと水に入り、末広町まで来た。末広館（末広町７）の前まで水が来ていましたね。家には誰もいなかったので、ああ、逃げたなと思った。屯所に戻ろうとしたら、ベニヤ（末広町３）の３階から「あそこさ、人がいる！」っていう声が聞こえた。軽ボックスの上でずぶぬれになっている男性がいた。一緒にいた分団員が助けに行って、その晩は屯所の２階に泊めました。

**和山さん**　夜、水が引くまでの間ですけど、結構な人数が自宅に帰ろうとしていたんです。田老、向町、藤原の人たちが。みんないつもの習慣で市役所の前を行こうとしていた。あまりにも人数が多いので、花の木通り、末広館のあたりに分団員が交代で１人立って、「ここから先は瓦礫で詰まっていて行かれない。絶対遭難するから１晩避難所で過ごして、明日の朝になってから行ってくれ」という説得を繰り返した。結構な数の人が血相変えて、「田老まで行けますか」、「藤原まで行きたいんです」、「金浜が全滅って聞いたんですけど」って聞いてくるんです。市内でなくて遠くに自宅のある人が、ここから帰ろうとしていたんです。

**太田さん**　１０６号線で帰ってきた人たちが、この辺で足止めになったんですね。

**和山さん**　その時点ではどこが詰まってどこが空いているのか、当然わからないし、すでに夜ですから、「頼むから避難所で１晩耐えてくれ」としか言いようがなかったですね。

**黒渕さん**　水が引くのに合わせてだいぶ遅くなってから、動けるやつが歩いて見て回ったんです。

**和山さん**　水が引いてからポンプ車も出したけど、セントラルホテル熊安の前に、白い大きな漁船が止まっていたので、その先は車が入れない、そこまでが限界だった。その漁船がポンプ車で末広町に入った時に見た船だったんです。あとは徒歩で行きました。

**太田さん**　アパートに住んでいるお年寄が、ベッドに寝ていてワッーと水をかぶって、水が引くのを待っていた。若い人に助けられて、衣類が濡れたので裸でおぶさって出てきた。もう１人階段から下した人と２人をポンプ車で宮古病院まで運んだ。

**黒渕さん**　無線機で消防署に連絡したけど、救急車が手配できなくて、ポンプ車で運べるなら運んでくれと言われて、その２人を常安寺経由で宮古病院まで運びました。

多分１時か２時で、だいぶ遅かった。その前におかめ（末広町１）のところを通った時は11時で、まだそこに水があった。２階にいた人に「水が引けてから、宮古小学校に逃げてください」って言ったのを覚えていますから。

**和山さん**　ポンプ車を送り出した後、行けるところまで行こうと、最終的に介護施設あお空の前まで行った。

**太田さん**　そうそう、そのあたりで後藤医院だけが、不夜城のごとく電気がついていた。ものすごく印象的でしたね。

**和山さん**　あお空さんのところに流されてきた人が腰を骨折していた。「重症でどうにもならないから病院に運んでくれ」と頼まれたんですが、「ポンプ車は宮古病院に行ったし、救急車もないっていうし、もう足がないよなあ」と言っていたら、そこに、どこをどうして来たのか、軽のワゴン車が1台入ってきた。その車の人に「常安寺の道が通れるから、病人を宮古病院まで乗せて行ってくれ」ってお願いしたら、快く引き受けてくれました。名前も聞かなかった。それが我々の「3・11」当日最後の救援でした。

　助かったから言えるけど、津波に南町、末広町、宮古小学校、宮古第一病院と4か所で追いつかれている。

**黒渕さん**　ポンプ車が生きていたお蔭で、その後の火事にも役に立ててよかった。

**太田さん**　第8管内ではおじいちゃんがお1人亡くなられましたが、管内を守ることができてほっとしています。

**自宅の被害**

**太田さん**　事務所（末広町2）は1㍍50の浸水で全滅。2日後私たちが田老の山火事に出動していたときに、家の前の瓦礫の中に町外の方のご遺体があったそうです。軽トラの上で助かった男性の両親が流されたと聞いていたから、もしかしたら一緒に買い物に来ていた親御さんだったかもしれません。

**和山さん**　会社（大通3丁目）は1㍍20位の浸水で、据え付けの工具が全滅、事務所のコンピューターもやられました。工具類も津波の水は塩分が濃いから、多少洗って油をさしても駄目です。時間を置いたら錆でやられてしまうんです。預かり車は、その場に残って駄目になったものもあれば、流されたものもある。一番遠くは大通駐車場の手前の角まで流されていた。向町の日専連の従業員さんの車が、大通3丁目の東海自動車まで流れてきていましたから。

　自宅の2階が無事だったので従業員も誘って、片付けをしながら暮らした。電気はなかったけど、生活用品、ある程度の食料があったので避難所には行かなかった。当日は甥っ子、姪っ子が学校に行っている時間帯ですから、家族は宮古小学校にいたことがわかるまで、子どもたちの無事を確かめるのに相当苦労したようです。

**黒渕さん**　後藤医院で仕事をしていたので、第八分団の前に会社の車を止めて、そのままポンプ車に乗った。その車は完全に駄目になりましたね。家（大通3丁目）は基礎を高くしてあるので、ぎりぎり床下浸水で済みました。家族は家にいなかったので宮古小学校に避難したと思った。その夜は見つけられなくて、2日後に会えました。宮古小学校は保護者が迎えにきた子どもは返しても、その他の生徒は先生と一緒にそのまま学校に避難していた。ホテルは3時のチェックイン前だったのでお客さんはいませんでした。支配人と従業員は一応鍵をかけて宮古小学校に避難したそうです。

　電気もなかったので、家族は2週間ぐらい親戚（の家）に行き、ホテルはコンピューター類がだめになったので、1か月以上閉めていました。

## 10　街の復興

　宮古一番の商業地は駅から末広町、大通、中央通、そして市役所へと続く約800㍍とその周辺の事業所・商店からなっている。昭和9（1934）年に山田線が開通し、末広町の西側に鉄道の駅ができ、宮古の玄関口となった。それを機に本町、新町から末広町に移る店も増えて、現在末広町がもっとも繁華な街となっている。

　商店街の津波による浸水は2㍍から30㌢であった。宮古商工会議所のアンケート調査（平成26（2014）年9月5日作成・回答率100％）によると、会員1千299件のうち自宅を含めて61％が被災を受けている。7月には65％が、1年後の平成24（2012）年7月には85・1％の事業者が営業再開を果たしている。卸売業・小売業・飲食店に携わるものは564件とあり、まちの事業所・商店街の多くはこの部分に該当する。

　震災3か月後の6月と10月に中央通商店街と末広町商店街の合同で

「宮古あきんど復興市」が開催された。平成27（２０１５）年秋には10回目を迎える。末広町商店街振興組合理事長の佐香英一さんは、３月末に「震災後第１段階は自助努力で各店の再開、次に商店街として復興のスタートラインを設定して、３か月後にはみんなで頑張りましょう」と再スタートの目標を立てたという。

中央通商店街振興組合事務局の坂本智子さんは「まだ泥かきをしている状態でとんでもないという声もあったが、前を向くこと、人が集うことが大切。ちりぢりになっていた人たちの安否確認ができてよかった」と、忙しかった当時を振り返る。

その後２つの商店街の中間にある大通１丁目商店会も復興市に加わり、３商店街の合同で開催されるようになった。大通１丁目商店会会長の中村進さんは「震災前から歳末大売り出しなどは共同でやっていたが、震災後はグループ補助金の関係もあり、連携してやることが増えました。時代の流れでどこも単独でやるのは難しくなっている。意見を出し合いながら協力関係を築いていけたらいいですね」と連携事業に取り組んでいる。

商店街の調査によると末広町商店及び事業所は、震災以前の78店から平成26年８月には77店、大通商店会は増減１で９店、中央通商店街振興組合は53店から37店で、現在８００メートルの通りには１２０余店舗が開業している。

３月はどこの事業所、店舗も、新学期、新入生、新入社員に供えて一番仕入れの多い時期であった。商品を店頭に並べ、さあこれからというかき入れ時に浸水で商品のほとんどが水につかった。仕入れた商品がほぼ全滅したのである。その痛手の大きさは計り知れない。瓦礫を片付けて店の中を整備して、さらに商品を新たに仕入れるのは並大抵のことではない。しかし、佐香英一さんは「お客さんのニーズに応えようと立ち上がりは早かった」と言う。商店が開けば人が集う、商店街は買い物だけではない、町の人たちの情報交換にも大きな役割を果たした。

### ⑴　事業所の復興

**佐々木 秀史さんの話**　昭和37（１９６２）年生
宮古商工会議所事業推進課課長
平成26（２０１４）年10月21日、平成27（２０１５）年11月21日、商工会議所で伺う。

**事業所の復旧**

地震のあと商工会議所の職員は、地震があまりにも大きかったのですぐに車で合同庁舎へ避難しました。その後津波が来て、商工会議所の建物は70～80センチメートルの浸水を受け、電気、通信関係が一切使えなくなりました。

被災した経営者が真っ先に考えるのは、人命は勿論ですが、雇用や資金繰りなんですね。その相談の指導やサポートをすることが商工会議所の業務です。翌日から浸水を免れた２階、３階で会員からの相談に応じました。相談件数は強烈に多かったです。震災前の相談は月に数える程度でしたが、震災後は毎日のように相談があり、平成23年度の相談件数は５０１件にも上っています。

盛岡の政府系金融機関が手厚いサポートで、宿もないという状況の中、毎日来てくれましたし、また、全国の商工会議所のネットワークで応援、指導を組織してもらって、我々の手が足りない所を埋めてもらいました。郵便局や浸水区域外の金融機関の支店は営業していましたが、駅前の岩手銀行や市役所寄りの信用金庫は、一時ストップしていましたから、事業者の方は従業員に支払う給与や相手先に支払う手形の資金調達に苦労されたことと思います。

一方、政府系の金融機関は手続きから着金まで通常より早い処理で、非常にスムースに融資をしていただきました。震災直後は町の経済自体がどうなっていくのかわからない状態で、事業者の年齢的な問題など大変な部分もありましたが、我々としては事業者が少しでも早く仕事を再開できるように全力を挙げて勤めました。

飲食店、中でも飲み屋さんの再開は早かった。集まって話をする場所が求められていたのだと思います。半年くらいは大盛況でしたね。

今は落ち着いたところ、伸び悩むところが出てきているようです。次に動き出したのは、水産関係で4月11日に市場が再開されました。商店街は、全国的な流れと同様に震災前に廃業した店舗もたくさんありましたが、震災で空き店舗が壊れたのを機会に解体したため空地＝駐車場が増えています。

**元気になる政策を**

平成27（２０１５）年に市から委託を受けてプレミアム商品券の発行事業をやっています。今まで宮古市でも何回か実施していますが、全国の多くの自治体が参加する中では今年が初めの取り組みです。販売期間は6、7、8、9月の4期に分けて、使用期間は6か月以内。最終的に3月末までに使い切るようにして、お金の流動期間が長期に渡る作戦を取っているんです。6月、7月の2期は好評で売り切り、加盟店は３００を超えています。発売後に取扱いを申し出る商店もあり、どんどん追加している状況です。

夏祭りなどの行事は商店街、企業、市役所などで協賛組織を作り、会議所がその事務局を担うため、全体の会長には当所の会頭、実行委員長には青年部の会長が引き受けることになる。12月のクリスマスイルミネーションはいくつかの組織が関わっていますが、宮古市の政策の1つとして、毎年申請、審査、効果の確認をしながら地域を活性化するための事業費を利用して行っています。

これから若い世代が元気になっていくためには政策が重要で、私の個人的な見解ですが、人口減少に歯止めをかけるだけではなく、外からの移住などの受け入れも合わせて考える必要もあると思っています。

**(2)　末広町商店街の取り組み**

**佐香 英一さんの話**　昭和27（１９５２）年生

末広町商店街振興組合理事長、㈱カメラショップG&B

平成26（２０１４）年10月24日、リアス亭で伺う。

**お客さんのニーズに応えて**

3月11日、私は商店街の仕事で仙台に行ってまして、12日に１０６号線を通り2時頃に宮古に戻ったのです。すでに水は引いていて、末広町の商店はシャッターを開けて、店の中を片付け始めていました。まず最初に、お互いの安否と商店街全体の被災状況を確認しました。

海岸から約2キロメートルにある末広町は、2メートルから30センチの浸水を受け、設備や商品が泥まみれになっていました。この商店街が他と違う特徴は、店舗兼住宅が多いので、翌日から片付けなどの活動が始まったことです。早い店では2日目から、被災を免れた商品を販売し始めて、1週間後に8店、1月後には約半数の36店が自助努力で営業再開を果たしました。最初の1週間くらいは、私のところに半数近くのお店が、「もう無理です。営業をやめます」と言ってきたのですが、1店、2店が再開すると隣の店にも被災された人たちが商品を求めてくるので、「私共もがんばりましょう」となり、多くの店が早い再開を果たしたと思っています。

郊外の大型店やコンビニは、津波の被害を受けていなくても、電気が通じないので営業できない。こちらは被災を受けているけど、お客さんが頼ってくれれば無料で配る、多少泥をかぶった物も洗って干して分けるなど、お客さんの希望に応えた。「この商店街に来れば、必要な物を分けてくれる」と口コミで広まって、かなりのお客さんが街にあふれていました。店も外にワゴンを出して、片付けをしながら販売していました。お店の判断で値上げもしませんでした。

**地域コミュニティーの拠点**

震災後、お客さんが心配して駆けつけてくれました。被災された方や地元の高校生たちも店の片付けを手伝ってくれた。震災前から商店街が地域のコミュニティーの拠点として、交流連携を大きな柱として活動してきたことが、活かされたのではないかと思っています。商店街に地域の交流拠点としての「リアス亭」を設置して、今年（２０１４年）で6年目になる。休憩所、介護所、会合、展示会、イベント会場など誰でも自由に利用できます。震災後も素早くリアス亭の環境を整

えて役員に集まってもらい、ここからいろいろの情報を発信した。商店街だけではなく、市や商工会議所の会合にも解放し、公的支援の説明会などにも利用してもらいました。

**商店街と街の復興**

3月末に「3か月後にはみんなでがんばりましょう」と商店街として再スタートの目標を立てました。そして、6月11、12日に連携事業の「宮古あきんど復興市」を開催した。商店の再開だけではなく、「街全体に元気を与えましょう」と地域の団体さんなどにお声をかけました。1回目だけでも1万3、4千人の人出がありました。街は買い物するだけではない、「お客さん同士が再会し無事を確認し合う、連絡を取り合う場所」になり、みなさんに喜んでいただいた。それまでの地域の繋がりが活かされ、また、商店街の機能を改めて認識していただいたと思っています。

震災前から毎年春、秋には売り出しや地域の芸能団体のイベントをやっていた。連携事業の商店街と、歳末大売り出しなど合同でやっていた信頼関係もありますが、復興市の共催でより協力体制が強化されたと思います。復興市は県、市、商工会議所が参加してくれたおかげで、だんだんに規模が大きくなった。震災から5年になるのに復興市という名前でいいのだろうか。ここで一応区切りをつけて、名前や実施時期なども考えようと思っています。

連携事業2つ目は新成人を応援する「商店街レッドカーペット」です。商店街路上に敷かれた150㍍のレッドカーペットの上を、新成人、前年に結婚、誕生、還暦を迎えた人、活躍した人、地域に貢献した人が歩いて、沿道の人々から祝福または感謝を受ける、地域を元気にするイベントです。毎年1月の成人式に合わせて行っている。平成24（2012）年1月に開始し、平成27（2015）年までの参加者は200名を数えています。

連携事業3つ目として平成24（2012）年10月に商店街振興組合を中心とする宮古市の事業所が、「いわて宮古街なか商人（あきんど）グループ」を立ち上げて、地域通貨「リアス」を発行しました。支援物資は有難いんですが、被災されていない方にも回ってしまい、商店街が売れなくなった。それでは地域の経済がストップしてしまう。そこで、被災者自身の選択により、必要な時に必要な物を被災地の店から購入するという仕組みを作った。10％が復興支援になっている循環型の支援です。被害を受けた約300商店が参加し、観光協会やJRのツアー、商店街として歳末売り出しの景品、市の生活支援金給付金などに活用していただいています。

その他、街が元気になるイベントを、折に触れていろいろ発信しています。例えば福祉の関係では作業所の製品の販売を任せたり、音楽イベント、郷土芸能、小中のブラスバンド、合唱団などにリアス亭を提供して、商店街は交通規制などで協力しています。

写真6　復興市

振興組合としての取り組みは震災前と基本的には変わっていませんが、リアス亭があり、振興組合の地域の活動があったから、震災の半年、1年で街に活気が出たのではないかと思っています。

商業だけではない地域内の交流、連携促進、自前の計画、自腹を切る事業、身の丈に合った事業を目指していきたい。商店街は大きなコミュニティ施設、お客さん参加型の商店街にしていきたいと思っています（写真6）。

## 11　まちを明るくする女性たち

宮古の市街地には、ふたつの女性グループ、中央通商店街振興組合並びに「みずき会」と、末広町を中心とした「昭和通りのおかみさん

もてなしたい」が、まちに花を飾るなど女性ならではの視点と行動力でまちの活性化に尽くしている。

中央通商店街振興組合では、昭和56（１９８１）年より商店街の生き残りをかけて、商店街近代化事業計画を実施してきた。カラー舗道、街灯、花みずきの街路樹、花壇を整備し、平成６（１９９４）年には各店舗前にフラワーポットを設置するなど、「買い物客にやさしいまちづくり」を目指した。しかし、３・11の津波で街路樹も花壇もすべて流されてしまった。震災後、休会状態だった「みずき会」を再構築して、女性パワーで「花かおる散策路」の復活や近隣の交流を目的とした活動を再開している。

「昭和通りのおかみさんもてなしたい」は、駅前通商店、末広町商店街、大通商店会のおかみさんが中心となり、おもてなしの心で、宮古に来た人に楽しんでもらうことを目的として、平成15（２００３）年に結成された。設立当初より県や市の助成枠に応募して支援を受け、ＪＲ宮古駅、三陸鉄道、岩手県北バスとも共同で４月と６月のフラワーバスケットや年３回の「昭和思い出探し」などのイベントを開催している。平成27（２０１５）年現在51名の会員（会長佐々木慶子さん）が活動している。

### (1) 中央通で活動する「振興組合」と「みずき会」

**坂本 智子さんの話**

中央通商店街振興組合事務局

平成27（２０１５）年7月26日、組合事務局で伺う。

**花壇のある商店街**

歩道が広くて花壇が整備できる商店街はここだけなんですよ。それがみんな津波で流されてしまいました。瓦礫は取り除かれたけど、生活、商売、住宅問題で手いっぱいで、花を植えるどころではなかった。ようやく震災1年後に全国からの支援を受けて、ツツジが植えられて、3年経ってなんとか昔のようになってきました。

まちの人々からも「また花壇ができて元気になるわ」と言っていただいた。そこで「もとのように花壇を整理していこう」「じゃあ、誰がやりますか」っていうことになると…。商店街には余力がない。男性は疲れてヘタッとなっている。そこで「元気な女性パワーにお願いね」っていうことになったんです。

新たに近隣の女性たちに声をかけて、休会状態だった「みずき会」を町内会とも、商店街振興組合とも別組織として再構築し、植栽の管理をお願いすることにしたのです。お花が届くとみなさんに声をかけて花壇に植えてもらい、月に何回か草取りをお願いしています。それから、ラベンダーを使って香りのろうそくを作り、11日に灯してもらう活動をやっています。震災後毎月やっていましたが、今は3月11日と8月11日の年に2回です。

本来「みずき会」は隣近所の女性たちが知り合い、仲間意識を持つことにあると聞いています。災害公営住宅がもうすぐ出来上がるので、みずき会と中央通の共同課題として「入居者にも花壇に参加してもらいましょう」という話をしているんですよ。

7月の七夕は振興組合で笹飾りをするのですが、近隣の保育園児に呼びかけをして書いてもらった短冊を飾っています。6月の復興市のお客さんにも書いてもらっています。振興組合でも商店街に来るお客さんや住民との交流を工夫しています。

**佐藤 せつ子さんの話**　昭和12（１９３７）年生

みずき会会長

平成27（２０１５）年10月5日電話で伺う。

**みずき会**

みずき会の設立は昭和54（１９７９）年と古いんです。以前はお母さんたちの持ち寄りでフリーマーケットを開いて、ユニセフや神戸の震災のときにも寄付活動をしたんですよ。お母さんたちも知識を得るために、防災訓練もしましたね。

今は折り紙など趣味の会もやっています。現在の会員は20名、60代が多いですね。みなさんお店で忙しいから「無理をしないで出られる

ときにやりましょう」っていう会です。草取りやお花を植える時には1軒ずつ廻ってお知らせしています。

### (2) 観光客をもてなす「昭和通りのおかみさんもてなしたい」

**松原 安子さんの話** 昭和23（1948）年生

昭和通りのおかみさんもてなしたい事務局、三社タクシー㈱代表取締役、平成26（2014）年8月8日、事務所で伺う。

**女性が楽しめるまちに**

平成9（1997）年に訪れたバングーバーのまちは花で飾られ、イルミネーションが暖かい光を放っていた。「これこそ宮古のまちでもやりたい」と思い、平成10（1998）年に身近なところから花を飾り始めました。平成15（2003）年に岩手県振興局の「花と水の回廊」事業を知り即行動を開始。花のための助成金をいただき、友人とふたりで見様見真似でフラワーバスケットを作って駅前や末広町通りに飾りました。花を美しく保つには水やりの協力が必要ですが、組織もなにもない。それには苦労しましたね。

よく主人に「女性が楽しめない町は魅力がない」と言われていましたので、商店街を歩いて、おかみさん1人ずつに声をかけました。なんとか20人位が集まってくれまして、平成15（2003）年に「昭和通りのおかみさんもてなしたい」を立ち上げることができました。ほとんどのメンバーが昭和生まれであること、この町はハイカラではないことから「昭和」と名付けたのですが、たまたま盛岡の啄木・賢治青春記念館で開催していた「ぼくらの時代展」など昭和ブームとも重なりました。

「昭和思い出探し」として年3回イベントを行っています。3月のひなまつりは末広町のリアス亭に市民有志から提供されたお雛さまを、それぞれのお店や自宅には手作り雛を飾ります。

―毎年古布の手作り雛の講習会を開いている会員の赤坂真喜子さん（昭和42（1967）年生・「糸ぐるま」主宰）によると「昔海側の町では子どもにお雛さまを買う習慣がなかったため伝統的なお雛さまが少なく、10年かけて古いお雛さまを集めた」という。（末広町6・浸水約1㍍の被害、市内に住むメンバー8名の内約半数が被災する）―

7月の七夕は店先に短冊をつけた笹竹や吹き流しを飾っています。11月のクリスマスのイルミネーションは、駅から市役所まで商店街などいくつもの組織が関わるようになりました。イベントではおもてなしの心で参加者にお汁粉やココアを振る舞っています。

**震災後の活動**

毎年4月と6月にフラワーバスケットをまちに飾っていたのですが、震災後も花は癒しに繋がると思い、すでに決まっていた助成金で、予定通り実施することにしました。そこに長嶋茂雄さんが名誉理事を務める「花と緑の農芸財団」から1万鉢と、釧路市の「造園会社」から千鉢の花が届き、市の援助3千鉢を合わせて1万4千鉢にもなりました。4月16日にボランティア150人の手で宮古駅と商店街などに飾られ、さらに何台もトラックを出して重茂半島や田老地区に配りました。長嶋茂雄さんの色紙「がんばれ宮古」のコピーはあちこちに配り、オリジナルは宮古市市長室に飾ってあります。

自衛隊、警察、ボランティアの方々が町をきれいにしてくれましたし、花を飾ってから雑然としていた駅の周りにも自然に人が集まるようになり、「お花の威力はすごい」と改めて実感しました。でも、まだ列車も走っていない、バスもたまに来るくらいで町には音がない。平成23（2011）年5月に三社タクシーで視察された早稲田大学のボランティアセンターの方から「なにか必要なものはありませんか」って声をかけていただいた。そこで、「音のない世界で生きているので音楽が欲しい」とお願いしたら、クラブやサークルにボランティアの学生さんを募ってくれました。真っ先に手を挙げたのが（早稲田大学）ニューオルリンズジャズクラブの皆さんで、7月の七夕と11月のクリスマスイルミネーションに合わせてまちや三陸鉄道や浄土ヶ浜の遊覧船の中でコンサートをしてくれました。それも交通機関三社の共催で可能になったものです。震災前にやっていたイベントに新たに音が加

わり、まちが華やかになりました。

宮古では平成元年から5年ほど「ジャズin浄土ヶ浜」というジャズコンサートが開催されていましたが、こちらは「ジャズイン宮古」と名前が付きました。それから3月には早稲田大学の混声合唱団による「ひなまつりコンサート」が行われようになり、こちらも「早稲田大学混声合唱団みやこ」とグループ名が付きました。早稲田大学応援歌「都の西北」と私たちの町「宮古」とふたつの「みやこ」の意味が込められています。震災後の平成23（２０１１）年の7月から毎年七夕とクリスマス、その他秋祭りなどでもコンサートで支援をしてくれています。

おかみさんたちはみなさん忙しいので、全員参加の活動は難しいのですが、会員がそれぞれの店に花、お雛さま、七夕、イルミネーションを飾ることで一体感が生まれてくる。誰でも気軽に集うことができる明るいまちになるよう、おかみさんたちが少しでもその支えになることができればと思っています。

## 12　町内会と自主防災の取り組み

宮古市は各町・地域ごとに町内会または自治会が組織されている。

各地域で共通した町内会の活動としては会費を集め、主に消防分団協力費、連合会会費、防犯協会会費、衛生組合会費、八幡さまの寄付、老人クラブ、子供会などへの援助に充てている。その他赤い羽根、歳末助け合いなど町内会を通して社会福祉協議会に納められている。

行政連絡員、保険推進連絡員、民生委員なども町内会からの推薦申請で人選が行われ、地域住民が市行政の一端を担っている。

町の清掃、ごみの処理、カラス避けのネットなどの要望にも応えている。その他様々な案内チラシを掲示版に貼る、子どもの登校時の交通整理などなど、町内会の仕事は多岐に渡っている。今回の震災時にも瓦礫の処理や側溝の泥さらいなどボランティアの要請は、町内会を通して行われている。

震災後、活動が停止状態になっているところも少なくない。そんな中でほとんどの町内で災害時に町内の住民が協力し合ったこと、震災後は近所の人同士が以前より挨拶を交わすようになったこと、今後も連絡を密に取り合う必要性などを強く感じている。少子化と高齢化で、子ども会や老人会が組織できなくなったという悩みも抱えているが、町内での活動も徐々に動き出している。

震災後は自主防災組織の整備や防災士養成の働きかけも行われ、町内会の役割はさらに増えている。

宮古市役所危機管理課によると、「自主防災は日本の政策の中に古くからあったが、平成7（１９９５）年の阪神淡路大震災後に町内会を単位とした自主防災の組織化と3年間の補助金制度が作られた。そこで旧宮古市では屯所、分団単位に防災資機材を揃え、屯所の附近にある町内会を自主防災組織にした。自主防災組織は消防署に属していたが、平成7年に市役所内に危機管理室を設置して、その2年後に防災業務が危機管理課に移った。

3・11震災後、改めて自主防災を強化するために、自治体が次の2点に4年間（２０１５年まで）補助する制度を作った。

①必要な資機材をそろえる補助金を支給する。

②人材育成＝防災士の養成

防災士養成は町内会、分団、今ある防火組織に呼びかけて、2日間の講習会を行い、その後の試験に合格した応募者に防災士認定証を発行している。費用は復興資金を活用し、全額宮古市が負担している。3年間で２３７名が取得した。」ということである。

当初の組織化については、連合会会長の赤沼利彦さんによると、「平成7（１９９５）年阪神淡路大震災後、当時の消防所長に「自治会・町内会で防災についての組織ができないか」と質問したところ、第三分団管内で説明会の開催を要望された。そこで、11町内の会長、副会長など役員約40名が参加して、宮古市初の自主防災作りの説明会が行われた。「自主防災組織」という名称はその説明会の2日前に消防署長より知らされた。平成9（１９９７）年に黒田町の第2自治会で自主防災組織を作った。当時見本になる書類がなかったので、チリ地震で

大被害を被った釜石市松原地区の書類を取り寄せて、参考にした」ということである。

末広町町内会の取り組みを一例として紹介する。

## 末広町の取り組み

### (1) 小成 勝郎さんの話

末広町自治会会長

平成27（２０１５）年４月23日、店内で伺う。

**町内会の活性化**

末広町の通りは４００㍍弱で、店舗数は約70、町内会に登録している世帯数は平成27（２０１６）年11月現在１１７ある（居住していない場合も含むので行政の資料とは一致していない）。町内の形態は店舗と住居、店舗だけ、住居だけという3通りのケースがあり、地域の活動拠点として商店街振興組合と自治会がある。道路を挟んで北側に10班、南側に5班あり、1班には5～13世帯が所属し、各班に班長を置いている。

震災前よりも震災後の方が活発ですね。町内会費は一律で1世帯５００円、年間6千円です。主に総会費、分団の夜警費、八幡さまの奉納金などに使っています。その他赤い羽根（共同）募金、社会福祉協議会費、歳末助け合い募金など協力費があり、民生委員が窓口となっています。民生委員と保険推進委員は自治会の推薦で選出され、任期は2年。班長は、地域をよく知るために1年で交代します。役員は約10名、任期は2年です。長年こんな感じでやってきたので、私も2年代理をやり、会長になって4年が経ちます。

震災の時、連絡が取れなかったり、停電したりと不安材料がありましたんで、自主防災の気運が高まり、組織を強化しました。町内に住む消防署や分団のＯＢの方、経験を踏んでいる方々に相談したら、気持ちよくメンバーに入っていただけて、あとは役員の中から選んで組織を立ち上げました。宮古で2番目か3番目で、早かったみたいです。

商店以外の住民の方々から「末広町は商店街のもの」という声もあった。震災後は商店と商店以外の住宅が一緒になって助け合おうと、徐々に交流を深めています。プライバシーの問題もありますが、アパートや一人住まいの方も把握しつつ、自治会と振興組合と一体となり、町の活性化と安全性の強化に努力をしています。

**具体的な取り組み**

行政からの防災資機材は第八分団屯所（大通3）の2階にありましたが、震災後は振興組合の協力を得て、コミュニティ施設リアス亭2階にも置き場を確保しています。１００人分の毛布は分団とリアス亭で50枚ずつに分けて管理し、保存食、水、発電機、担架、移動トイレ、照明資機材、スコップ、ロープ、ヘルメット、消火器などを準備しています。町内には「リアス亭にあります」というお触れを出しています。

自主防災講座で、「火事だ！」と言われたら、「消火器を持って現場に駆けつけろ」と教えられました。リアス亭に消火器を取りに行っていたのでは間に合わない。何本かはリアス亭に置いてあるが、さらにすぐに対応できるように各役員にも配りました。

ＡＥＤも調査したら、2か所の銀行に設置してあった。営業時間内の事故ならば問題ないんですが、夜は使えない。保育園にもあるが夜は閉まっている。常に使えるような場所、例えばリアス亭ならば、末広町に住んでいる自治会長と振興組合の理事長が緊急用の鍵を持っているので、夜中でも対応できる。新たな設置を検討することが現在の課題です。

活動の一環として予算でグリーンのベストを作りました。あるところで、火災のときに消防士や警察官が電源などを見つけるのに苦労しているのを見て、地域の人が手伝おうとしたら、「邪魔だから、どけ」と言われたそうです。その話を聞いて、「他の人にもわかるようにしなきゃあ」という話合いをして、このベストを作りました。幸か不幸か、まだ使っていませんけど、関係者だとわかるし、他の人も声をかけやすいと思っています。

**防災士養成講座を受けて**

市からの防災士養成講座受講の要請があり、若い人に講習に出てくれるように勧めても、忙しくて時間が取れない。そこで私が代表として、平成26（２０１４）年に講習を受けて資格を取りました。宮古市の各地から50～60名の受講者があり、朝の８時から５時まで２日間びっしり講習を受けて、最後に試験がありました。

主な内容は、平時の自主防災の取り組み、地域との連帯など、災害発生時には公的支援が来るまでの初期消火、救出救護、避難誘導などです。救急救命実技講習もあり、ＡＥＤの使い方、怪我人の手当、止血の方法、人工呼吸など一通りのことを学びました。

資格を取った後、地域外で事故に遭遇したんです。息絶え絶えの人に人工呼吸をやっていた女性看護士さんは、見るからに限界にきているようだったので、「資格持っていますけど、代わりますか」って声をかけて協力しました。思わぬところで、講習会の経験を役立てることができました。

自治会では自主防災のためにいろいろな班を作り、それぞれが役割分担をしている。幸いなことにまだ災害がなく目立った活動はありませんが、心の準備をしておくことが大切と組織を強化しています。

**⑵　臼木 禮子さんの話**

末広町自治会副会長

平成27（２０１５）年４月22日、店内で話を聞かせて頂いた。

**炊き出し**

炊き出しの訓練があってね、わたしは炊き出しの班長さんなの。

防災用の炊き出しご飯をもらっても、普段にやってみなければいざというときにわからないから、みんなで熱湯を入れて食べてみました。五目ごはんだから、少しぐらいボソボソしていても、まあ食べられましたね。ガスも電気もなくてお湯が沸かせないときもあるから、水を入れて１時間くらいでごはんになるものもあるんですよ。

水害に備えるために近所の川がどのように流れているのか見学もしました。以前から付き合いはあったけど、震災後は「助け合わなきゃあ」と、ご近所が一層団結しました。

**まとめにかえて**

平成23（２０１３）年３月から平成26（２０１６）年３月にかけて、50余名の方々から貴重な話を聞かせていただいた。話者の皆さまのご理解とご協力に心から感謝する。

忘れたいこと、思い出したくないこともたくさんあったことと思う。仕事の手を止め、忙しい中時間を割いて丁寧にお話しくださった。大変な思いをされたにもかかわらず、どなたも明るく前向きに進んでおられる。震災を機に新たな希望を見出された方もいる。震災の経験からほとんどの方が災害への備えと周りの人々との交流の重要性を口にされたのが印象的であった。体験談の中には今後の復興や防災に対する貴重なヒントがたくさん含まれている。また、身の回りの出来事や復旧の経過などを記録する、写真を保管するなど、ご自分の中で整理されている方が複数おられた。命を守る大切さを初めとして多くのことを学ばせていただいた。この記録が今後の防災の一助になることを願っている。